

62
356

藤田 豐八 講述



文學史 完

東京專門學校藏版



支那文學史

藤田 豊八 講述

序論

歴史の支那文學を顧ざりしこと茲に幾千歳。支那文學果して歴史的考覈を價せざるか、はた璞玉未だ和氏に逢はざるか。

年を閱する四千載、久しからずとせず。人を有する四億萬多からずとせず。而してその文華は東西の天地に光被して東亞文明の源泉たり。支那文學果して歴史的考覈に價せざるか。支那帝國もと文を以て國を建つ、文學はその生命なり、若し文學にして價なしといはば、この舊國、この大國、この文華、最早學者の考覈を離れざる可らず。哲學といふか、そのやゝ見るに足るべき發達をなし、は周末と宋季とのみ、文學に至りては上下幾千載を通じ、古今幾十朝に亘り、脈々として絶ゆることなく、幾百萬の載籍は支那國民の思想と感情とを藏して後昆に傳へたり。その古を

いへば世界の文學の最も古きものなるべく、その壽命をいへば世界の文學の最も永きものなるべく、その風化をいへば世界の文學の最も廣きものなるべく、その富饒をいへば世界の文學の最も富饒なるものなるべし。その眞價は世界の或る文學に比して遜色あるべしと雖も、余は支那文學の優に世界の文學史上に於てその位置を保ちて餘あるものなるを信ず。

崑岡前にあり、何ぞ手に袖にする。已に崑岡に入る、何ぞ手を空して歸る。余は今聊その璞玉を琢き、暗夜なほ光あらしむる能はずとせんも、その千乗の眞價を發揚して世に知らしめんとするなり。而してこれをなすに於て茲に豫め注意せざる可らざるものあり。蓋し時は歴史の經なり、外圍は歴史の緯なり、人間の特性は此經緯に縁りて一種の歴史的現象を織り出すもの也。文學の史に於ても亦た然らざる可らず。而して文學なる現象に對して之に歴史的考覈を加へんには、單にその現象によりて國民の思想感情の推移を闡明するを以て足れりとす可らず。固より是れ主要なるには相違なし、然れどもなほ不足なるを如何せん、何ぞや國民文學の想と共にその想を寄せたる形をも考覈せざる可らざること、是なり。余は

文學の形のみの變遷を叙するを以て文學史と稱するの陋を知ると共に文學の想のみの變遷を論するを以て文學史と稱するの隘を知る。されば余は時と外圍と人とを觀察し、文學なる現象に對してその想と形との變遷推移を叙し、以て支那國民の思想感情の發達を描き、以て支那文學の幽光を發揮するに務むべし。

(二)

然らば支那文學は如何なる性質をか有する。余は本論に入るに先だちてその概觀を敘述するの徒勞にあらざるを信ず。

支那の文化は黃河沿岸に棲息せし漢人種より起る。彼等は自ら稱して華といひ夏といひ、また華夏といひ、自ら處るところを稱して中夏といひ、中華といひ、また中國といふ。その文化の遙に他種に度越せしが故に自ら標すること頗る高く、他種を斥して夷狄戎蠻と稱し、殆ど人間視せず。蓋し此等漢種は土着の民にあらず、西北より轉移し來りて黃河北岸に定住せしもの、如し。もと支那北方は南方に比して天の寒なる、地の瘠なる、太古民人が棲息に適するところにあらず。漢種の諸族は西北より轉移し來りしもの、漸次内地の土民を驅逐し、已むを得ずかゝる天惠

なき地に棲息せざるを得ざることとなりしならん。その何の地より來りしか、往々臆度を逞うするものありて或はア、カチアよりといひ、或はア、シリアよりといひ紛々たる諸説みなその文化の多少の類似を以て斷するのみ、固より信ずるに足るものなし。余は確に黄河沿岸に定住せし以後の漢人種なるものを知るのみ。而して支那の文化が此人種より興起し來りしは恰もア、リアン種の印度に入りてその文化を興起せしが如く、その詩書の文字は全然漢種の文學にして韋隨の文字は全然ア、リアン種の文學なるが如し。彼等は共に他種族に對して激烈なる争闘をなし、結果として、また自種族の遙に他種族に度越せし自然の結果として、遂に深峭なる排他の情と化し、國民的自負の心となる。げにや漢種が他種族に對せし嫌惡、他種族との争闘より來りし自族の痛苦は頗る詩人文士の腸を九廻せしめ、支那文學の興起に與りて大に力ありき。

漢人種は黄河北岸に定住せり。黄河沿岸は此方に於て先づ土地もや、肥へ、水利もや、便なりしならむ。然れども決して太古朦昧なる人種の棲息に適せる地には非ず。漢種は南方の暖と肥とを享くる能はずして北方の寒と瘠とに耐へざる可

らざる運命に逢着せり。自然の結果として彼等は日常の衣食住に汲々たらざる可らず。彼等の聖人と稱する三皇五帝は大抵利用厚生に利益を與へしもののみ。燧人氏何人ぞ民に火食の術を教へしものにあらずや。伏羲氏何人ぞ民に庖犧の法を教へしものにあらずや。神農氏何人ぞ民に農作の業を教へしものにあらずや。太古天文の研鑽また民に時を授けんが爲めにあらずや。彼等の全力は衣食住の實用に盡く。元來彼等は拜天の思想に富まざるにあらず、神とは天の靈にあらずや。彼等また拜地の思想を欠くものにあらず、祇とは地の靈にあらずや。彼等はまた人間の靈を拜するの思想なきにあらず、鬼とは死者の魂魄にあらずや。此等の思想の旺なりしにも拘らず、また相當の文化を有せるにも拘らず、宗教の起らざりしは何ぞ、理想的哲學の萌芽をも有せざりしは何ぞ。余は他にその原因を發見する能はずた、彼等の衣奔食走、空想に馳騫するの餘裕なかりしが故なるを知るのみ。固より迷信は衣奔食走の爲めに空了するものにあらず。晝と共に夜はあり、壯健と共に衰病はあり、生と共に死はあり。迷信を存すべき餘地は衣奔食走の人にも存するなり。然れども餘裕なき國民は這般國民的迷信を發達せしめ

て宗教の形骸を具へしむる能はず。また幽思玄想を逞くして理想界に突入するの閑日月なし。支那人の性格が實際的にしてその文學の實用的文學に富むは古代文化の初期に於て此の如き事情ありしが故にして、その學問が政治道德の實際を離ること亦たこゝに因せずんばあらず。

而して北方漢人種は如何なる制度を以て國を建てしか、世界最古の國民の一なる當時の所謂中國は如何なる制度を以てその社會組織をなししか。太古は逸として知る可らず、今より太凡四千餘年前堯舜以後の事實より推せば彼等は家長制度を以てその社會組織をなしたるが如し。兼併また兼併漸次大族現れて所謂群后なるもの生じぬ。后は君なり、群后は後ち諸侯となりぬ。禹の時諸侯を塗山に會せしとき玉帛を執るもの萬國と稱し殷の時千七百七十三國と傳へ周武殷紂を討ちしとき諸侯來り會せしもの八百と注し、春秋の際百六十餘國なりしが戰國のとき七國となり、遂に秦に至りて一となりぬ。此く兼併せらるゝに従ひ中央の權次第に増し、秦に至りて家長制度の遺たる封建の制度政治上に壞れしと雖も、家長制度なる社會組織は全然一空し去りたるにあらず、否な近時に至るまでなほ一族を

重じ、一家を重じ、家長を尊ぶの風は嚴存するなり。當時の王侯は一家の家長にしてまた家長の家長なり、而して一家を率ゆるが如く所謂万姓を率ゐたるなり。後世人民を稱して百姓といふは當時一姓を社會上の單位とせし餘風なるべし。而して家長制度は如何なる性格を北方漢人に附與せしか。いはずともこのことなり、祖先の崇拜なり、年長の尊敬なり、血族の親愛なり。北方漢人が人間の愛情を経験せしは一家一族の間の愛情なりき。彼等は此愛情を最も圓滿に最も強盛に發揮せり。彼等は婦女に對して樂んで淫せざる底の愛情を養ひしと共に父母に對して最熱の愛情を養ひ、兄妹に對し、一族に對し、漸次相次く愛情を養ひ、推して他人に對するの愛情となりぬ。君主は家長の家長なり、父母に對するの情を以て之に準せざる可らず。人の老は我老に準し、朋友は兄妹に準し、皆な相當の愛情を養ひたり。此の如き愛情は孔子に至りて差等ある愛即ち仁となり、孝悌を以て仁の本とする道德説となりぬ。而して支那の詩人は國民の這般の性格を歌ひ、支那の女士は國民の這般の性格を發揮するに勉めぬ。

家長制度には祖先の崇拜附隨す。従て崇古の念自ら旺らざるを得ず。支那人の

古を尊ぶ精神に富むは他に數多の原因あるべしと雖も是亦た與て大に力あらずんばあらず。已に家長を尊ぶといふ。家長の先人はなほ一層重せざる可らず。而して幾多の星霜は事實をして茫漠たらしめ、口より口へ傳はれる傳説は事實をして神怪たらしめ、こゝに祖先の崇拜は起りぬ。且つや人間の魂は天に歸すと信ぜしが故に祖宗の靈は天に在りてその子孫の行爲を監し禍福を下すものと信じ拜天の思想と相合して牢固なる信念となりぬ。支那古代に於ける叙事詩とも稱すべき頌は多く祖宗の徳を頌するにありき。

古代漢人種の性格は此くして鑄造せられぬ。排他の念頗る篤く、崇古の心頗る旺に、血族的親愛の情に富み、且つ思想全斑の傾向實用的なり。而して神靈に對する敬虔の度また他の古代民人に劣らず。支那文學の曙光は此の如き性格を有する北方漢種に發し遂に他種族に光被したり。排他の念旺なりしはその文學をして純粹たらしめ、他國文學の侵入を妨げ、崇古の心盛なりしはその文學をして擬古的ならしめ、俗文の發達を害し、その親情を主とせし結果は叙情詩に富ましめ、叙事詩に貧ならしめ、その實用的なりしは實用的文學をして多からしめ、理想的製作に乏

しからしむ。たゞ南方文學起り、佛教入りて、その文學の理想的欠乏を醫し、且つや異思想を注入し、宋末より漸く俗文學の勃興を見るに至りぬ。

且つ夫れ外界の壯大は國民の思想をして壯大ならしむ。その野は漠々として長風千里より來り、その山は巍々として暮雲脚下に迷ひ、その水は汪洋として白帆天外より來る。天地の象、動植の物、雄大宏壯兼ぬ具はる。その文學に表るゝものもた自ら掌大の島國的文學と異なるものなり。支那文學に於ける誇大なる思想、及び文字を想ふに這般地理的影響の與て大に力あるべし、兎まれその雄偉誇大なるは支那文學の性質の一とすべし。

而してまた支那は革命の國なるを忘るべからず。戰亂は常の事なり。一朝永きも數百年にすぎず、短きに至りては數年或は數十年を出てず。而してその一朝のうち於ても眞に無事と稱すべきものは數十年をこゆるものなし。國土の廣き中央權力の微弱なる、毎に凶徒嘯聚、良民を殘害するを免れず。且つや塞外戎狄の暴虐なる鐵蹄すぐるところ野に青草なく、毒矢發するところ空に飛禽なきの觀あらしむ。支那歴史は暴戾殘忍、慘憺たる光景、酸鼻すべき事蹟を以て充つといはん

も不可なし、畧言せば支那歴史は血痕を以て充つといはんも不可なし。暴君の暴、逆臣の逆多く他に比類なし、人の肝を醜にし人の肉を啖ひ、普通の開化せる國民の聞くもなほ股慄すべき事柄も彼等は平然として疑はざるなり。此の如き國民の性格は發して文章となり、慷慨激楚の音を發せしめんは自然のことなり。

且つ夫れその文學の表明さるべき文字は形象文字なりき。形象文字は如何なる影響を文學に與へたる。余の見を以てせばその使用に不便なるが故に専ら簡淨を尊はしめぬ。啻に文字使用の不便なるのみならず、筆には刀を用ひ、紙には竹或は帛を用ひたる古代に在ては一部の書を著するにも、一部の書を藏するにも極めて不便を感ぜしなるべし。されば先秦の學者は廣くその説の流布せんが爲めに緊要なる部分は特に簡淨を務め、且つ韻を用ひて口誦記憶に便ならしめぬ。擬古的思想の旺なる、後世に至るまで此遺風存じ、且つ文字の不便は筆紙の發明後と雖もなほ簡淨を務めしめたり。加ふるに形象の文字は音韻の文字に比して古今言語の變化の爲めに影響せらるゝと少なきが故に、古文字を知るに容易なり。從て古文學の旺盛を致すに便なり。是亦たその文學の擬古的なるに與て方あるべき

か。若し夫れ支那文學者が形象文字の形を以て多少讀者の趣味を惹くに足るの便あるを利用せしが如きは他の音韻文字の文學に見るを得ざるところ。

要するにその誇大過宏なる、悲壯慷慨なる、簡朴蒼古なるは、實際的、擬古的、主情的、排他的なると共に支那文學の特質なるべし。固より後世に至りて變化せしところあるは勿論なりと雖も余は大體に於て殆どその然るを信ずるものなり。

(三)

既に後世に至りて變化せりといふ。此變化は殆ど國民歴史の變局と一致し特に文學史に限るものにあらずと雖も、余は念の爲めこゝに一言すべし。即ち

第一期古代文學。上古より秦に至るまでにして之を支那文學の起原ともいふべし。此期に於て支那帝國は東北西の合一成り、やゝ一國民たるの形跡を具へたるなり。文學上に於ても堯舜三代の北方文學と共に荆楚南方の文學起り、また西方秦の文學起り、文學に頗る異分子を有すると共に所謂支那文學なる國民文學の基礎を置きたり。後世推重せる堯舜三代の文學は只た支那北方の文學にすぎざるなり。余は講述の便ならんが爲めに之を三代文學と周末文學とに二小分すべ

し。

第二期中世文學。源頭を秦漢に發し、魏晉に一轉し、唐宋に成る。此期を以て支那文學の最盛時とすべし。詩に於ても文に於ても頗る發達してその種類に富むこと古代文學の比にあらず。曠世の大文豪の輩出、前を集大成し後を睥睨す。而して佛教の東遷は此期の初にして古代の思想に一大變化を與へ往々理想家の出づるを見るに至りき。而して余はまた之を漢代文學、魏晉六朝文學、唐文學、宋文學に四小分して考覈すべし。但し前三者と宋文學との間には思想上大巨溝あるを忘るべからず。

第三期今世文學。宋末より元に至りて俗文學盛に起る。是れ此期の前二期に殆ど缺乏せるものを補ひたるものなり。思想上に於ては宋の遺を承け特に見るべきの變化なしと雖も支那文學の全觀より云へば硬文學はやゝ衰運に向ひたるが如し。余は之を元文學、明文學、清文學に三小分すべし。

三期合して四千餘年。一年有餘の間僅々の時間を以て能く講了し得べきか。勢ひその概にすぎざるは已むを得ざるところなるべし。讀者の豫しめ諒せられんことを望む。

第一期 古代文學。

第一 三代文學。

(一)

上世三代の文學は支那北方の文學なり。余は先づ北人の思想感情の一斑を討尋して三代文學研鑽の端を發せざる可らず。

想ふに支那北人をして支那北人たらしめ、北人の文學をして北人の文學たらしめしものは主として北人の思想感情を陶冶せし支那北方の天然境遇與て大に力あるべし。その上世未開なる民生に對して天然のあまりに苛刻なりし結果は、彼等をして天然を愛せんよりは寧ろ之を畏れしめ、天に親まんよりは寧ろ之を尊はしめぬ。彼等は天を畏れ、ひたすらその意を伺ひ吸々之に聽從するに努めぬ。天子は天に代りて萬姓を治め、その云爲は皆な天の云爲なりと信じ、また天は天子萬民に訓を垂るゝものにして一燠一寒一晴一雨殆ど皆な人間行爲に應ずるものと信じ、即位は天に薦めて然る後ちなし得べく、受命は即ち即位と同義たるなり。堯は舜を天に薦めたりといふにあらすや。舜は禹を天に薦めたりといふにあら

すや。殷湯の夏桀を伐つや、有夏多罪、天命殛之、湯誓といひ、湯の桀を南巢に放つや、仲虺話を作りて

嗚呼惟天生民有欲、無主乃亂、惟天生聰明時人、有夏昏德、民墜塗炭、天乃錫王勇智、表正萬邦、纘禹舊服、茲率厥典、奉君天命、……欽崇天道、永保天命。

といへり。而して當時大旱七年に及ぶや、湯自ら齋戒して爪を剪り髪を斷ち、素車白馬、身に白布を嬰け、身を以て犧牲となし、六事を以て自ら責めたるにあらすや。

彼等は天の早するを以て人事に起因するものと信じたるなり。此の如き事例は枚擧に暇あらず、特に祖己の高宗に訓へて、惟天監下民、典厥義、降年有永、有不永、非天夭民、民中絶命といひ、殷の末年西伯昌の黎を戡むるや、祖伊恐れ奔りて王に告げて、

天子天既訖我殷命、格人元龜、罔敢知吉、非先王不相我後人、唯王淫戲用自絶、故天棄我、我不有康食、不迪率典、今我民罔弗欲喪、曰天曷不降威、大命不孽、今正其如台。

といひ。王申の嗚呼我生不有命在天といひ、祖伊反して、嗚呼乃罪多參在上、乃能責命于天、殷之即喪、指乃功不無戮于再邦といひたるが如き、君臣が儀式的に發したる辭令にはあらず。一片の套語を襲用したるにもあらず。深く天威を畏れ天命を

度みたる舊時一般の思想を表白せるものなり。

天然の彼等に恵せざる結果は此く天威を畏るゝのみならず、その意に迎合せんが爲めに先づ豫じめ天意なるものを忖度せんと務めぬ。即ち天意を忖度して實際に應用せんと務めぬ。約言せば天道の如何なるものなるやを知り、依て以て人事を規せんと務めぬ。易は此企圖を達せんが爲めにあらずや、洪範は天人相關の所信を基礎とせるにあらずや。後世倫理に於て人道の天に出て、易ふべからざるものとする學者一般の傾向は、また此思想の發達せしものに外ならず。此く天威を畏れ天より出でたりと信ずる人道即ち人間行爲の法規に殉ぜんとする思想は、北人の感情を繫縛する鐵鎖となりぬ。

若し夫れ彼等にして天然の恵を得たらんには天然の美も見えつらん、美感も一層發達したらん、不幸にして彼等は天恵を得ず。黄河は濁流のみ、その兩岸は平原のみ。氣候寒くして山は緒なり。花の爛たるに乏しく、鳥の嚶たるに乏し。草木に乏しきの結果は瓦屋穴居に住す。彼等は不潔なる水と沒趣なる山と變化なき原を以て圍繞せられ、且つ鬱陶しき家に居る。何等の誘引ありて美感の發達を促

すべき。然れども天然の苛刻は人間美感の發達を害するの損あれども意志の制裁力を長ずるの徳あり。彼等は天意を忖度し、實際的方面にその全力を盡し専ら天道に出たる人道に準據せんが爲めに強盛なる意志の制裁力を發揮し人間の行爲を以て天然を制せんと勉めぬ。されば美術の發達よりも寧ろ道德の發達を來したるなり。支那の學術が専ら倫理の外に出づること稀なりしはこゝを以てにあらずや。

天然の彼等に恵せざるや、彼等をして實際的方面にその全力を注がしめぬ。彼等は實際以外にその力を延ばすの餘裕なし。而してその望は千里漠たり、高粱を出で、高粱に入るは外來の旅客をしてなほ無聊に耐へざらしむ。その氣候は寒し、氣象上の變化なきのみならず草木の生すると稀なり。而して山の兀げ草木の少なきは榮枯の感想を發せしむるに力なし。且つや彼等は海を知らず、たゞ陸を知るのみ、まかも變化なき陸のみ。陸は動くものにあらず、山は寂然たり。古代支那北人の思想の固定して従てその文學の變化に乏しきと已むを得ざるのとなりとす。北方文學の泰山崑々の趣はあれども流動變化の妙なく、剛健なれども輕妙な

る筆致に乏しきはこゝを以てにあらざや。

特に注意せざる可らざるは外界の變化に乏しき結果は支那北人をして實際に固着し立境にその思索を驅らしめざりしと是なり。上古北人の思想は天道より人道を演繹し、専ら人間行爲の規矩準繩を索め克己之に依據せんとするにありて、毫も此現實世界を脱せんとする努力を見ず。彼等は既に易に於て天道を發見せんと試み、詩書禮樂に於ても亦た天道より人道を演繹せんとする痕を見るべし。即ち専ら規矩準繩の發見に汲々として終に自由なる理想世界に突入すること能はざりき。蓋し世界の國民中最も理想に馳騁せしは印度アリアンに若くものなし。彼等は婆羅門なる僧侶の一階級を有し、専ら宗教的迷想に耽るの閑日月を有し、その氣候は炎熱にして動植物のもの繁生し、氣象の變化倏忽にして人目を驚かすに足るものあり。炎熱は凡てのものを速に發生せしめ、凡てのものを速に枯死せしむ。現實の頼み難きを知ると共に他界の依るべきを索めざる可らず。支那北方の正に之と相反するの境過は遂に支那北人をして規矩準繩に局促し、終に理想界に突入せしめざりし所以にあらざや。

要するに支那北方天然の苛刻は北方人民をして天然を畏れ、その美を認むるに由なく、専らその威令に聽従するに汲々たらしめ、天意を忖りて人道を規し、之に依據せんが爲めに強盛なる意志の制裁力を發揮し、變化に乏しき天然は食衣の餘裕なき國民の思想をして固定的ならしめ、専ら規矩準繩に局促して自由なる思想界に突入する能はざらしめたり。余は今這般の思想の文學上如何なる發露をなしたるを見るに先だち、文學そのものゝ起原を探らざる可らず。

(二)

眞に支那文學と稱すべき價值ある製作は三代に至りて始めて現はれしと雖もその萌芽は遠く遼古に屬す、傳説によれば黃帝の史官蒼頡なる者文字を作れりといふ。固より文字が一朝一夕に一人の手になるものとすべからざるは勿論にして異説紛々たるべきは固より其どころなるべきも、支那人が遼たる太古に於て已に文字を有せしは明なるとに屬す。或は伏羲か八卦を畫せしを以て文字の濫觴となすものありたい伏羲といひ黃帝といひもと口碑上の人物にして歴史上の人物にあらざ。故に當時の事實の深く信を置くに足らざるは言を要せず、たとへ蒼頡

なるもの實に存したりとせんもその所謂文學の製作なるものはたい區々の文字を統一して普ねく通ずるものとせしにすぎざるべし。されば多少具眼の學者は文字の發明の時と人とを限らざるなり。要するにその象形文字の頗る古代の發明に屬し、エツプト、アツカチアの概狀文字等と古を争ふに足るを想し得べし。支那文字はその始め單に象形のみにして之を文と稱し形聲相益すを以て故に之を字とはいふなり則ち文は錯畫にして、字は孳乳して幾く多きの謂なり。

人文の發達と共に象形のみ能く事物思想を表すべきにあらず、周代に至りて六書の目あり。始めて周官方師の職に見ゆ。想ふに堯舜三代をへて自然に發達せしものなるべし。六書とは象形、指事、形聲、會意、轉注、假借是なり。説文之を解して詳なり。今その文を引用して少しく注脚を下すべし。

(一)象形。象形者畫成其物、隨形詁屈、日月也、例せば①②共に日にして㊦は月なり、即ち月は半月を象どるが如し、以て日に別つなり。その他③④を以て目を象どり、⑤⑥を以て耳を象どる。

(二)指事。指事者視而可識、察而見意、上下是也、換言せば形の象どるべきなく符號を以てその義を表はすなり。⑦⑧は即ち古文の上下にして一畫の上下に點して上下の意を見はす。その他⑨⑩を以て左右を表はすが如き、一二三等の數字の如き皆な是なり。

(三)形聲。形聲者以事爲名、取譬相成、江河是也。班固之を象聲といひ、鄭玄周禮を注して之を諧聲と謂ふ。象は則ち形なり。諧聲とは形を以てその聲を諧和するをいふ。その實一なり象形指事は多く獨躰なりき。その複躰あるは後世のことなり。形聲は複躰なり。所謂名とは象形指事よりなる文をいひ、即ち形なり。取譬とは聲の上にていふなり。江の水は即ち川にして流水の形を象どり。工はその水の音を表す義なきなり。河も亦た然り。その他高の⑪は屋根を表し、高は音を表するが如し。

(四)會意。會意者比類合誼、以見指撝、是也、指撝とは指向ふといはんが如し。複躰にして二躰共に義を取る、例せば武は耂なり、戈を止むるの義なり。信は人从ひ言に从ひ、人の言の義なり。象形指事は文なり、形聲會意は文を集めて成る。故に字といふ。

(五)轉注。轉注者、建類一首同意相受、孝老是也。之を解するもの種々なれど、宋の徐諧の説稍穩なり。即ち老を基とし、匕を加へて老とし、子を加へて孝とし、至を加へて耄とし、毛を加へて耄とし、句を加へて耄とす。是に於て同義異音の文字も生じ、以て思想の表白を精密ならしむるに至れり。蓋し轉注の言、水の源を出て、分岐別派、江となり、漢となり、各その名を受けて本と同じく一水を主とする如きをいふなり。

(六)假借。假借者、本無其字、依聲托事、令長是也。蓋し令はヨキなり、借て使令となす。長はナガキなり、借て長上の長となすべし。即ち假借は一字を數用するものにて、來は麥なり、往來の來なり、故に借て往來の來となす、焉はもと鳥名なり、借り來りて助字とす。その他行の如き、莖杏坑沅に轉用するが如し。是に於て同字異義の文字も生じ、思想の表明するに益、便利となりぬ。

彼等は周代に至るまでに思想表明の具たる文字を發達せしめしこと此の如し。而してその發達の順序もまた象形より指事、指事より形聲、會意、轉注、假借に至りしなるべし。但しその何時代に至りて如何なる發達をなし、や知る可らずと雖も、

堯舜時代開化より推し、また三墳五典九丘八索等の書名の今に傳はるより推せば、已に堯舜時代に於てかばかりの發達はなし、わたるなるべし。

(三)

古書に詩の見ゆるは尙書を初とすべし。固より樂と共に詩は文字なき時より存したるべきも今は之を知らんに由なし。虞書益禮篇に舜歌を作りて曰く、股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉と、皇陶虞て歌を載して曰く、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉と、又た歌て曰く、元看叢勝哉、股肱隋哉、萬事隋哉と。是れ詩の正確なる古書に見えたる初めなり。康衢擊壤の歌、南風の詩、景雲の歌皆な正確なる古書に見えず。想ふに當時のものにはあらじ。

而して當時の詩は樂に合せて歌ひしものにて、祭祀會宴に用ひ、また多く子弟教養の具に供したるものゝ如し。舜の夔に命ずるや曰く、夔命汝典樂、教胄子、直而溫、寬而栗、剛而無虐、簡而無傲、詩言志、歌永言、聲依永、律應聲、八音克諧、無相奪倫、神人以和と。見るべし、樂と詩との子弟教養の具たりしを。益稷の篇また夔の言をのせて曰く、憂擊鳴球、搏拊琴瑟、以詠、祖考來格、虞賓在位、群后德讓、卜管鼗鼓、合止祝敔、笙鏞以間、鳥

獸踏踏、簫韶九成、鳳凰來儀と。彼等は樂と詩とを以て人間以上の靈力あるが如く感じ、以て神祇鬼を祭り、以て子弟を感化するの用に供したり。舜と皇陶との唱和を見れば當時の詩なるもの、如何に單純なりしやを知るに足るべし。禹に九歌あり、今の書の大禹謨は偽なりとするも周禮大司樂に九德之歌、九韶之舞とある註に左氏を引ききて、九功之德皆可歌也、謂之九歌と見ゆ。所謂九歌なるもの、存じたりしは疑なし。後ち五子之歌あり、たゞ今の書のは信するに足らざるのみ。

殷に至りて風氣や、開け、詩歌また觀るべきもの多し。大學に引ける湯の盤の銘の如き、箕子麥秀の歌(但し古書には見えず)の如き、特に詩經に見ゆる尙頌の諸什の如き周代のと比して多く謙色なし。而して殷人豪勵の氣象楮幅の上に躍然たり。然とも詩歌の發達は一般文化の進捗と共に古代に於ては特に周代を推さざる可らず。今の詩經は主として周代の詩歌を輯めしものなり。古人の分類に従へばその詩に大凡そ三類あり。風雅頌是れなり。今略ぼ之が解釋を下さんに、蓋し周の天子五歳に一たび巡狩す。太史その地の歌謠を探り、之を音樂にあはせ

天子をしてその地の風俗人情を察せしめ、また一般に諷詠せしめて民人を化す。之を風と謂ふ。而して諸侯の國に探るが故に之を國風といふ。されば詩の序者(或は卜商なりといふ)は之を解して風は風なり、教なり、風以て之を動し、教以て之を化すといひ、また上以て下を風化し、下以て上を風刺すといふ。而してその詩皆な一人の事を詠ぜしものにて、一國の事を一人の本に繫く。その作者は士大夫の之に托するあり、田夫野人の懷を抒ぶるあり。最も當時一般人民の性情を窺ふに足る。

雅とは詩の序者之を解して、正なり、王政の由て廢興するところを言ふ、政に小大あり、故に小雅あり、大雅ありといふ。即ち一人の私事にあらずして天子の政治の得失を褒貶せしものなり。皆な王朝の公卿大夫の作なり。從て規模も大に旨意も深し。頌に至りては詩の序者が盛徳の形容を美し、その成功を以て神明に告ぐるものなりといへるにて明なり。王道衰へ、禮義廢れ、國政を異にし、家、俗を殊にするに至て變風變雅作る。國史得失の迹を明にし、人倫の廢れたるを傷み、刑政の苛を哀み、情性を吟咏し、以てその上を風す。變風變雅は蓋し懿王夷王の時の詩陳靈公

淫亂の事に訖るもの是なり。

當時また詩の躰を分て三とせり。比賦興是なり。比は譬なり他物をかり來てその義を表はし、賦はその意のままを叙し、興は他物を以て思を抒ふる誘引となす。風雅頌と比賦興とを合せて之を詩の六義といふ。

平王東遷の後、王者巡狩せず、採詩のことやむ、朝廷の上風吟するものまた絶ゆ。孟子の所謂王者の迹熄みて詩亡ぶとある是なり。然ども詩を以て子弟を教へし結果は春秋に至りてもなほその痕跡を留め、當時の士大夫なるもの諸侯の會同等に於て多く詩句を以てその微意を通せしこと左傳を覽て知るべく、詩を引きて自己の説を證せしこと先秦の書を閱て明なるべし。詩は實に當時交際の要具たりしのみならず、また一個の證典たりき。

(四)

古代の支那文學は支那北方の文學なり。周召二南、王幽曹衛諸風、大小二雅、商周魯三頌、皆な北方の詩なり。荆楚の音録せられず、實に要荒の故を以てなり。周南の日用の間を離れずして天下萬世を福するの意ある、召南の至誠惇恪秋毫犯さざる。

邶風の君子變に處り淵靜自ら守れる、齊風の剛々として俠氣ある、唐風の憂思深遠なる、秦風の秋聲朝氣に似たる、邶風の深く民情に切にして真に之を躰せる、小雅の忠厚なる、大雅の深遠なる、周頌の天心希聲なる、魯頌の謹て禮法を守れる、商頌の天威大聲なる、皆な地方的印象と、歴史的影響とを有せざるなし。然どもその詩の多くが抒情詩なるに至ては一なり。

當時の所謂詩なるものは大抵四字句にして、樂にあわせて歌ひ、歌ふにつれて舞ひしものにて、即ち一種の歌ひものなり。その韻律は種々にして後世の如く一定せしものにあらず、たゞ自然に音調の整はんことを勉めたるのみ。而して詩の序者は舜の詩言志といひしを敷衍して曰く、

詩者志之所之也。在心爲志。發言爲詩。情動於中。而形於言。言之不足。故嗟歎之。嗟歎之不足。故永歌之。永歌之不足。不知手之舞之。足之蹈之也。

と、政治風俗の治亂に關して感慨するところを抒べ、嗟歎永歌してその所謂詩なるものは成る。古代に於ける詩と散文とは單に有韻無韻を以て區別せらるべきものにあらず。散文に於ても記憶に便ならんが爲め、音調の整正を勉め、韻を押し、

も少なからず。たゞ専ら情感に訴へ、その昂進し來りて嗟歎永歌するものにして始めて詩と稱せられしが如し。永歌するが故に有韻の散文に比して一層音調の整ひ一層韻律の正しきは固よりその所なり。

既に彼等は詩を以て主として情を抒ふるものとす。されば人間の活動と事物の経過を單に歴史的に叙するが如き叙事詩に乏し。雅頌中や、叙事詩とも稱すべきもの存し、祖先の行爲を叙せしもの存せざるにはあらずと雖も、極めて少數にして之を他國の古代文學に於ける叙事詩の盛行と比すべくもあらず。かゝる現象を呈したるは想ふに詩を以て單に個人の懷を詠ずるものにして人間の行爲を叙するものにあらずとするが故なるべきも、また北人一般に意志強くして空想に乏しく、主として人間の道德的行爲を重んじ、武勇的事跡を輕んじ、はたその實際的傾向を有する、多く時事に着目して往事を追想するの暇なきも、頗る與て力あるべきか。

(五)

支那北人の實際的なる詩の題目人事を離るゝもの少なし。而して悉く政治道德

の汚隆を風詠せしものなり。されば彼等は之を以て教育上の用に供しまた政治上の用に資したり。孔子は嘗て曰く、詩三百を誦し、之に授くるに政を以てし、達せず、四方に使用して專對ふる能はず、多しと雖も奚ぞ以て爲さんと。詩の序者詩の用を説きて曰く、先王是を以て夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚くし、教化を美にし、風俗を移すと、彼等は詩を以て政治道德の實用に供したるなり。後世詩を以て専ら風教に益するものとなすは此餘風を承けたるものなり。

蓋し北人か天然に惠せざりし結果は意志を強盛ならしめ、その文學をして専ら政治道德の實際的題目に移らしめ、想像力乏しく、また殆ど天然の美を發揮せしものなしといはんも可なり。彼等は美を認め之を發揮せんと欲して、その文學を有せしにはあらずして、政治道德の實際に關し、情感の昂進せし自然の結果として、情感と意志と撞突せし自然の結果として、知らず識らずの間に、その精神の美を發揮せしものなり。情中に動きて言に形はる詩に於てもその所謂情は意志の制裁ある情なり。情と意と撞突せし結果意の制裁の範圍内に於て動けるの情なり。古代の北人か苛酷なる天然の威を畏れ、天道より出てたりと信ぜし人道即ち道德的注

規に服従せんが爲めに、竟志を以て感情を抑制せし習慣は、遂に北人の性となり、その文學に於ても歴々徴するに難からず。彼等の感情は鐵鎖に繋かれたる猿の如し。動くべき範圍は柱の周邊數歩を出でず。詩の序者は詩の變風を評して

發于情止乎禮義。發于情民之性也。止乎禮義先王之澤也

といふ。古聖先王が苛酷なる天然に服従せんとして漸く涵養せられて意志の強盛を致したる餘風は周末衰亂の世に至りてもなほその情力を失はず、詩人情を詠するにも終に禮義の範圍を脱せず。而して這般の傾向は孔子已に最も明に批評し居れり。その言に曰く、

關雎樂而不淫、哀而不債（論語八佾）

と、史公之を誦強して

國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂（史記風原傳）

と。豈た國風小雅に止まらんや、情の制裁せられ、その狂奔せざるは詩三百皆な然り。真個意志の強盛なりしは北人の特質なり。彼等は色を好まざるにあらず。好むと雖も淫せざるなり。彼等は怨誹せざるにあらず、怨誹すと雖も亂せざるな

り。而して毎に禮義の中に止まる。後世に至るまで北人の規矩準繩に束縛せられて、自由なる天地に放浪する能はざるは這般古代思想の遺を承けたるに因らざるばあらず。宜なり南方老莊の徒のその局促を笑ふや。

而して家長制度によりて養はれたる父母兄弟子の血族的關係、君臣長幼朋友の非血族的關係の間に發したる親愛の情は意志に制裁せられて禮義の中に止まり、以て詩に形はる。君臣相思ふの情、父子相慕ふの情、男女相戀ふの情、志かも禮義の中に止まるの情は詩の毎什至るところに散見するなり。今一々之を引例するの繁をさけ、その情の最も禮義の中をこへ易き青春男女間の戀につきて一二の例を擧げんか。周南漢廣に曰く、

南有喬木、不可休息。漢有游女、不可求思。漢之廣矣、不可泳思。

江之永矣、不可方思。

周德南國に被り、美化江漢の域に行はれ、禮を犯すを思ふことなし。召南野有死麕に曰く、

野有死麕、白茅包之。有女懷春、吉士誘之。

林有_二穠_一。野有_二死鹿_一。白茅_二純束_一。有_二女如玉_一。

舒而_二脫々_一兮。無_二感我悅_一兮。無_二使_一_二_一也吠。

龍は狗なり。非禮相陵げは則ち狗吠ゆ。亂世に當り淫風行はると雖もなほ狗をして吠へしむるなからんを欲す。同じく行露に曰く、

厭_二泥家露_一。豈_二不_一夙夜。謂_二行多露_一。

誰謂_二雀無角_一。何以_二穿我屋_一。誰謂_二女無家_一。何以_二速我獄_一。雖_二速我獄_一。

室家不足。

誰謂_二鼠無牙_一。何以_二穿我墻_一。誰謂_二女無家_一。何以_二速我訟_一。雖_二速我訟_一。

亦不_二女從_一。

豈夙夜せざらんは情なり。行に露多きを謂ふは禮を以て情を制するなり。室家足らず、亦た汝に從はずといふに至ては疆暴の男もなほこの貞女を侵陵する能はざるなり。彼等の意志の強盛なる青春の女もなほその情を抑制して禮義に止まる。特に婦人の最もあり勝ちなる嫉妬の情を抑ゆる如き、その一例として周南_二孟斯_一、桃夭の諸篇あり。大小雅の諸什みな大夫等の私情を抑へて公事に勉むる、皆な

意志の強盛を示さるなく情と意と衝突して以てその妙味をなす。

(六)

要するに天然の苛刻は北人をして意志の強盛を致さしめ、その固定せる思想は想像の力を失せしめ、規矩準繩に束縛せられたる感情の放縱を制し、遂に北方文學の特質をなさしめたり。而してその實際的なる、その文學をして人事を以て主題とした人間行為の規矩準繩を發見するに汲々たらしめ、天人の美を觀るに至らしめず、また理想界に突入する能はざらしむ。故に我等の發揮せる美は天然の美にあらずして人間の美なり。人間形骸の美にあらずして精神の美なり。意志と感情との衝突より來りし美なり。意志の強盛なるよりして堅確なる精神の發揮せる美なり。その禮義の中を失はず、温厚篤實、流れず淫せず、父母兄弟子及ひ君臣長幼朋友の間の厚情まことに掬するに足るべきものなり。孔子は此理の消息を道破して曰く、

詩三百一言以蔽之、曰思無邪、

と。然り真情の發露なり、誠意の發露なり。その親子の間を詠じては

父兮生我。母兮鞠我。拆我畜我。長我育我。顧我復我。出入腹我。

欲報之德。昊天罔極。(小雅蓼莪)

といひ、その兄弟を燕しては

兄弟鬩于牆。外禦其務。每有良朋。亟也無戎

といひ、また

妻子好合。如鼓瑟琴。兄弟既翕。和樂且湛。

宜爾室家。樂爾妻孥。是究是圖。亶其然乎。

といふ。特に詩人忠厚醞籍の見るべきものは去られたる婦を

涇以渭濁。泥々其沚。宴爾新婚。不我屑以。母逝我梁。母發我笱。

我躬不閱。遑恤我後。(北風谷風)

と詠せしが如き、後世李白が去婦の詞を作りて

憶昔初嫁君。小姑纔倚牀。今日妾辭君。小姑如妾長。回頭語小姑。

莫嫁如只夫。

と詠せしに比較せは思半に過くるものあるべし。激せる情なほ禮義の中を止ま

る、皆な是れ北人意志の強盛なるが故にして、詩經の文學的趣味あると共に道德的教訓の書たるはこゝを以てなり。余は詩經に於て善と美の完全なる契合を見る。

(七)

支那に於ては單に確實なる歴史の憑據よりいへば詩歌多く散文に先だち起れりと斷ずる能はず。古代散文の代表とも見るべき尙書はそのうちに詩歌を含みて支那最古の書となすべし。况んや易の或部分は或は尙書以前に成りしものとすべきに於てをや。况んや堯舜以前の書存したる證據あるをや。

蓋し支那古代左史右史の設あり。左史は事を記し、右史は言す。國家天子の大事、歴代聖王の辭詔を記録せしものゝ如し。史は當時の識者にして文筆を職とするもの、古代の文學は多く史の力に成る。文學上の製作も史なれば採詩の官も史なり、古書大抵の史の筆なり。周官に外史の職あり、三皇五帝の書を掌る。左傳昭公十二年に左史倚相なる者あり。能く三墳五典八索九丘を讀むと稱す。慣典索丘は上世帝王の遺書なり。また周書顧命に大訓在西序と見ゆ。想ふに典謨の類なるべし。されば堯舜以前已に載籍の存じたるを知るべく、周に至りて頗る多きに

至りしを知るべく、また今の尙書より推せばその大部分は散文なりしを知るべし。」
 かゝる書類を周の官府に藏し、春秋の時に至りて尙ほ現存せしが、孔子周に遊ひ、之
 を覽てその煩亂を厭ひ、古聖先王國を治め世を経するの大綱たるべきものを取り
 上は唐虞より斷じ、下は秦穆に訖るまで、その數凡そ百篇をとり、當時之を書と稱し
 き、後又た之を尙書といふ、上古の書といふ義なり。後世聖人の書なるを以て之を
 書經と稱す。

然るに秦の焚書の禍あり。刑名主義に反對せる政治主義を撲滅せんとするにあ
 るが故に道德を根據とせる先王の典謨、尙書の如きは最もその惡むところとなり、
 百方之を撲滅せんと努め、一時殆どその跡を絶ちぬ。秦滅び漢興り、惠帝挾書の律
 を除き文帝文教に志し、尙書の學者を求む。偶、濟南の人伏生なるものあり。年九
 十餘、故秦の博士にして尙書を治む、文帝人を遣して就て受けしむ。蓋し焚書の際
 之を屋壁に藏して漸くその禍を免かれしもの、出して之を檢するに僅に二十八篇
 に止まれり。或は云くその記憶せしところなりと。是れ今日の所謂今文尙書な
 り。その内盤庚を分ちて三篇とし、顧命の一部を分ちて康王之誥とし、又た武帝の

特別に民間に得たる太誓を分ちて三篇とし合せて三十四篇とせり。

時に武帝の子共王魯に封せられ、孔子の舊宅を壞り、圖らず壁中より尙書五十八篇
 を得たり。皆な料斗の古文にして時の博士孔安國今文より文字を合せ考へ、之を
 朝に上れり。是を古文尙書と稱す。當時巫蠱の亂あり。學官に列するに至らず、
 空しく秘府に藏し、晋永嘉の亂また全く亡びき。

元帝江左に中興するに及び梅賾なるもの古文尙書を得たりと稱し、朝廷に上る。
 是より古文今文と相並びて世に行はれ、唐に至り陸德明之によりて釋文を作り、孔
 穎達敕を奉して古文尙書孔傳の疏を作り、今文古文を混合して一となす。且つ孔
 穎達の正義は欽定の書にして學官の教科書なりしかば終に一人の古文を疑ふも
 のなかりき。

宋に至りて吳棫始めて之れを疑ひ。朱子亦たその僞を疑へり。元の吳澄に至り、
 書纂言を著し、古文の疑を抉摘せしも未だ條分縷折する能はず。明の梅鷟始めて
 能く諸書を參し、その剽剗を證せり。然とも見聞尙は狭く、蒐采未だ周からざりき。
 遂に清の閻若據の古文尙書疏證世に出づるに及びて考證精確、古文の僞たる炳然

火をみるよりも明なるに至れり。

されば支那古代文學の散文の代表としては尙書中たゞ今文三十四篇を見ざる可らず。三代の書と稱するものなほ易山海經等の如きものなりと雖も古代支那人の思想感情の最も文學的に表明せられたるは書の今文三十四篇を推さざる可らず。而して尙書は實に今より大凡四千年以上の事實を含有し、その最古の部分は或は夏の史官の筆なりとせんも、今より大凡三千數百年前に成りしものなり。今試に世界各民族の最古書と稱するものに比較せんに、ゼミチック種の最古書舊譯全書の最も古き部分も若しモセスの作とせば今より大凡三千五百年をこゆ可らず。アリアン種の古書なるセンタヘスタの如き最も古きものとする人の説によるも今より大凡三千有餘年を出でず。或は今より大凡二千五百餘年を出でずといふものすらあり。ホーマーの如き二千八九百年以内のものなり。殆んど四千年に垂んたる此種の古書はたゞ印度に於て韋陀あるのみ。その叢稱の部は最も古しと稱するもの、説によれば西曆紀元前二千年乃至千五百年の頃のものとなす。ハミチック種のエジプトに於てはマンソンの埃及史を最古とすべし。紀元前

三百年の頃ギリキ語にて筆せしもの。されば尙書は(易詩等たゞに蒙古種の最古書なるのみならず。世界の最古書なり。之と拮抗するものたゞアリアン種の韋陀と、ゼミチック種の舊譯全書のみ。

(八)

堯舜三代の間の文化の進歩は孔子の

虞夏之質、殷周之文至矣。虞夏之文不勝其質、殷周之質不勝其文。(禮記表記)

といへるにても明なるべく、文運は慥に殷周に至りて開けたるなり。詩歌に於ける如く散文に於ても亦た然るなり。而して特に周代に至りて兩者共に長足の進歩をなしたり。余は先づその思想に觀んか。

孔子曾て三代を比論して以爲らく、夏道命を尊ぶ。鬼に事へ神を敬して之を遠く。人を近けて忠なり。祿を先にして威を後にし、賞を先にして罰を後にす。親にして尊ならず。その民を敝、恣にして愚、喬にして野、朴にして文ならず。殷人神を尊び民を率ゐて神に事へ、鬼を先にして禮を後にし、罰を先にして賞を後にす。尊にして親ならず。その民の敝、蕩にして靜ならず。勝ちて恥なし。周人禮を尊びて

施を尙び、鬼に事へ神を敬して之を遠く。人を近けて忠なり。その賞罰爵を用ゆ。親にして尊ならず。その民の敵利にして巧文にして慙ぢず、賊にして蔽と。まこと三代人民の氣風は其敵に於て頗る明なるものあり。慙愚、喬野にして不文なる夏は先づ之を措き、今の書の商書(殷書)中今文と稱する湯誓、盤庚高宗彤日、西伯戡黎及び周書中に見ゆる洪範(殷代の思想の發露なる)を讀めば殷人の神明に對する敬虔の篤くして豪勵の氣象遠く他二代の人に勝るを知るべし。孔子が神を尊び、民を率ゐて神に事へ、鬼を先にして禮を後にすといひ、蕩にして靜ならず、勝ちて恥なしといへるは誣言にあらず。されば殷の將に亡びんとする、その天及祖宗に對する信念の篤く、紂の凶惡と民の腐敗とによりて遂に天及び祖宗に遺られたるを自ら憤り自ら悶ゆるの狀は西伯戡黎の篇に觀て想せられ得べし。彼等は悲哀せず、憤悶するなり。特に紂の凶惡なる行を觀よ、その死狀を觀よ。他二代の亡ぶる、その君皆な降る、獨り紂は勇ましき焚死を遂げたるにあらずや。商書はかゝる信念と豪氣とを有する人民の文學として夏周二書の間にも異采を呈せり。

古代文運の旺盛は周に至りて極まる。詩の發達は既に觀たり、散文に至りても、規模の宏壯、文辭の巧妙決して前二代の及ぶどころにあらず。その思想に於てもまた一段の進歩を見る。孔子は周人を評して禮を尊び施を尙ひ、鬼に事へ神を敬して之を遠く、人を近づけて忠なりといふ。夏人と一なり且つ其親にして尊ならざるまた夏人と一なり。然ども世運の進歩はその兩者の敵に至て見はる。夏人の慙愚、喬野、朴不文なるは周人の利巧、文不慙、賊敵なると文野の別見るべし。たゞ一般人に比して二代の人のやゝ弱に失するを見るなり。若し夫れ二代の中につきてその差を云へば夏人は野にして弱なり。周人は文にして弱なるなり。げに周人文弱の敵は面に仁義を飾り、心に豺狼を養ふ。否な寧ろ狐狸の狡猾を養ふを見る。要するに殷人は氣を以て勝ち周人は巧を以て勝る。その文字の豪爽なるは周殷に及ばず、規模の宏大、思想の優美、文致の整正、躰裁の具備せるは殷遠く周に及ばざるなり。

(九)

尙書は三代の史官が主として當時の君臣の言を記したるものなり。その事を記したるものは別に編事躰の史として存じたるが如し。(竹書紀年は偽書なり、信す

可らず。諸侯の國の事を記したる史としては魯に春秋あり。而して尙書に六躰あり。典謨訓誥誓命是なり。然とも當時未だ一定の文躰をなしたるにはあらず。典謨訓の三躰の如き特に然るを見る。典は説文に冊の丌上にあるに従ふ之を尊閣するなりといへる是なり。たゞ堯舜の云爲を記したるものに典の名あり。謨は謀なり、禹臯陷益等の嘉言を記したるものに名づけたり。典謨の名後世なし。訓は導なり、敷奏諫説の辭なり。後世の上書の如きものなり。たゞ當時口に失ひ言を陳べ篇目を立てず、隨時命名一に協ふなし。然も亦た史臣の手より出づ。劉勰の所謂言と筆と未だ分らずとは、即ち是時なり。但し今文に訓の名あるものなし。誥誓命はやゝ前三者に比すれば一定の文躰をなししが如し。字書を按ずるに誥は告なり。後世は上に告ぐるを告といひ、下に發するを誥といふ。然とも當時は上下皆な通じて誥といひたるが如し。秦に至りて古法廢せられ、たゞ制詔と稱す。漢武元狩六年始めて復た之を作る。然とも亦た以て官を命せず。宋に至りて始めて以て庶臣を命ず。誓は衆に誓ふの詞なり。蔡沈云ふ戒なり、軍旅に誓といふ。また群臣に警告する詞あり。後世後者の類なく、師に誓ふ

の詞も亦た多く見ず。命は朱子云ふ猶ほ令の如きなりと。字書に大に命といひ小に令といふと。これ命令の別なり。當時王の言同じく稱して命といふ。或は以て封爵し、或は以て命官し、或は以て飾職し、或は以て錫賚し、或は以て傳遺す。秦天下を兼ね命を改めて制といふ。漢より以下命の名亡ふ。

されば六躰の中眞に一定の文躰と稱するに足るべく、且つ後に及びたるものたゞ三躰のみ。想ふに當時は後世の如く詩文共に嚴然たる人爲的の規矩法度ありしにあらず。獨り散文に於て然りしのみにあらず、詩に於ても亦た然りしなり。例せば詩句の如き大抵四言なりと雖も、三言あり、麟之趾、江有汜の類の如く、五言あり、維以不永懷、誰謂雀無角の類の如く、六言あり、我姑酌彼金罍、政事一埽、益我の類の如く、七言あり、送我乎淇之上矣、還予授之子粲兮の類の如く、八言あり、胡瞻爾庭有縣貺、今我不敢傲、我友自逸の類の如く、九言あり、四之日其蚤、獻羔祭、洵酌彼行潦、挹彼注兹の類の如く、皆な開出して篇章をなせるにあらずと雖も、詩句に嚴然たる人爲的制限なかりしは明なり。たゞ書の文躰のみにはあらずなるなり。

而して北人の天及び祖先に對する畏敬の念、家長制度に涵養せられたる親愛の情

は書に於ても亦た發揮せられ、強盛なる意志は感情を制裁して堅確なる道念を助長し、剛健なる精神を培養しき。而してその固定せる思想、抑制せられたる感情はその文學をして輕快の妙に乏しからしめたりと雖も、崇神の念、確然不動の心はその文學をして壯嚴の趣あらしめぬ。彼等の文學は水の如く動くものにあらずと雖も山の如く巍然たるものなり。若し智者を水とたとへ、仁者を山にたとへたる比喻をかりていはし、彼等の文學は智者の文學にあらずして仁者の文學なり。流動多変、變化の妙に乏しと雖も、泰山巖々、よづべからざる趣を存ず。韓子の渾々として涯なしとせる姚姒の書、佶屈聱牙なりとせる周詰殷盤、皆な然り。皆に書に於てのみ然るにあらず、詩書と共に支那三大古書の一なる易に於ても、はた周代制度慣例の書たる周官儀禮に於ても亦た北人文學の特質は具はる。今此等の書を評論するの間なきか故に、余は古代散文の代表たる書にのみとめて満足せんのみ。

第二 周末文學

總叙

周末に至りて眞に支那文學と稱すべきもの興る。余は先づ之を概論するに當て當時の思想界の状態を略叙せざる可からず。

(一)

支那思想の史に於て一家獨立の見地を立てしものは蓋し周末に至りて始めて雜然として世に出づ。紛紅駭綠まことに絶代の偉觀たり。その狀恰も火山の一時に破裂して飛火熱石の四方に散亂せしが如し。然とも山の火を噴くは自らその内部に火を噴くべき素と之を壓抑すべき地皮の薄弱なるとの事情具らざる可らず。周末に至りて諸學派の勃として起りしは、また勃として起るべき理由あるなり。即ち

第一、這般の學派をなすに足るべき素養。支那最古の史料の眞に依るに足るべきものは主として尙書なり。今より大凡四千年前の事實を含有し、世界最古の書の一なり。然るに最時已に堯舜の開化をなし、政治道德の見るべきものあるの

みならず、曆制も頗る具はり、教育の制も亦た存じき。近世泰西の支那學者中その文化は地より導かれたるものなりとなすもの往々にしてこれありと雖も、支那のかゝる遙遠の時に於てかゝる燦然たる文化を有したるは匪ゆ可からず。夏殷をへて周に至り、歴世養ひ來りたる文明の華は孔子をして郁々乎として文なるかなと嘆稱せしめき。今周官にみるに繁文もとより當時に實行せられ得べきものにあらじと雖も、規模の大、思想の密、真に後人をして一驚を與せしむるに足るものあり。而して道德學術の獎勵は堯舜の遺意を襲ぎ、益、その歩をすゝめ、始と完成に近きものあり。司徒あり國の教を總括し、大司樂あり國子の教養を司どり、師儒保あり教養の局に當る。また史あり當時の言と事とを記し、古代の書を保存す。想ふに當時學術獎勵の結果は必ずや國民の思想に偉大なる影響を及ぼし、後年に至りて巨大なる頭腦を輩出せしむべき素地を造りたるなるべし。

第二、思想繫縛の解除。堯舜三代の王化は當に周末に興起すべき諸學派の素を作りたり。然とも一統の政治上にたち、億兆の生民下に安ずるに際しては思想の自由なきと共に器々治國安民の術を講ずるの用なし。(特に禮記王制に曰く、執

左道以亂政殺と見ゆ)たとへ講ずるものありとせんも、天下を風動し、人心に影響すること洵に難し。幸か不幸か、春秋に至りて周室の紀綱は紊れ、思想の繫縛は解け、民またその生を聊せず。偉人の當に出づべき素養と、當に出づるを得べき自由と、兼て救濟せざる可らざる時難と、救濟を待つ所の生民とあり。獨得の見地を立つるものゝ出づべく、その言の一世を風動し、人心に浸透せんは固よりまさきに然るべきところ。而して列國の抗争は人心を活潑ならしめ、諸子の争鳴、想界の逐鹿は次て起りぬ。是れ恰も地皮の抗抵力失せて火山の一時に破裂せしか如し。燦然目を眩する多様の思想は皆な此の飛火熱石の碎片にあらずや。

蓋し支那古代は族長權力の消長によりて互に迭りて政柄を握るの有様なりき。夏殷二代の間中央集權の實や、舉りしと雖も、族長即ち諸侯の割據は依然たりき。周に至りて封建の制支那史上最も完成の域に達せり。山窮りて水出で、地つきて海注たり。趨勢の馳するところ社會の局面は今や一回轉せんとなす。周末の動亂によりて封建制の破れんとせしは固より至當の順序なり。然とも幾多の歲月によりて養はれたる地理的影響、歴史的感化は容易に磨滅すべきにあらず。况んや

周制の實際に行はれしは邦畿即ち王室に直隸せし中央の小部分に過ぎずして、諸侯の所謂國はたゞ其大綱を總ぶるのみなるをや。故に地方人民の思想感情は各その特色を有し、互に相同じからず。周末前半に於ける學派の分裂、思想の多様は之が爲のみ。(詩の國風に於て各その特色を異にするをも併せ考ふべし)魯は周公子孫の封ぜられし地、周の小模型なり。親親を以て國是となす。而して孔子實に此地に出づ。齊は大公呂望の封ぜられし地、尊賢從俗を以て政をなしき。こゝに所謂山東巧利の民處る。而して管子は實に此地に出づ。南方荆楚の思想は自ら北方實踐的思想と異なるものありて比較的稍、理想的傾向あり。而して老子は實に此地に出づ。宋は夏の子孫の封ぜられし地、自ら古禮を尙びて周禮を採らず。而して墨子は實に此地に出づ。然とも皆な時勢に激して濟世救時の言をなし、もの實踐傾向を帶ぶるは一のみ。

然れども時勢の潮流は益急に峻坂轉石、世は戰國となりぬ。周末の前半と後半とは政治上社會上道德上思想上に於てや、相異なるものあり。今や思想上に於ける地理的影響漸く薄らぎ、祖述折衷の傾向を呈しぬ。而して春秋のなほ温然追らざる風は失せて劍戟相摩し憂々憂あり、閃々火あるを見る。孟子荀子の孔子に於ける莊子の老子に於ける韓非のその以前の管子に於ける、墨徒の墨子に於ける、或は祖述し、或は折衷し、英偉の氣人に迫る。その他名家の如き亦た思想動亂の餘に出でしものなり。従ふて思想は争の結果として益精密となりぬ。

要之するに先秦の諸學派は支那古代實踐的の餘風を承け、兼て濟世救時の爲めに興りたり故に實踐的なり。地理的影響あり、思想の自由あり、故に多様なり。獨立なり。政治界に統一なし、故に思想界にも亦た統一なし。而して獨立的思想にし、て且つ世道人世に裨益あるものにあらざればその書を傳へんこと難し。是益、先秦諸派の獨立的思想に富むの觀あらしむる所以。

(二)

思想界の状態は此の如し。而して當時已に文字の使用に於てもや、便益を得たらんが如し。爾雅は固より周公の作にはあらざるべきも、尙ほ周代のものたること疑なし。されば既に辭書様のものも出て來にきといふべく、國民の言語文字の統一は頗る偉大なる影響を與へしなるべし。また周の宣王の時太史籀なるもの

大篆を作る。古文科斗の文字に比すればやゝ簡にして書記には少しく利便を得たるなるべし。蓋し古文には變態極めて多く、字様率ね糾纏蟠屈殆ど畫圖に類す。その漆液を以て書するものは頭大にして尾細く、形蝌蚪に類す。故に蝌蚪文と名づく。太史籀の大篆は又た籀文と名づけ、先秦に行はれし文字多くは蝌蚪文と此籀文となりき。當時籀は十四篇九千字を作りしといふ。孔子はたゞ詩書の如き古書には尙ほ古文を襲用せしも、通例大篆を用ひたりといへば、先秦の諸子皆な此字様を用ひしなるべし。當時木皮紙なし。或は木に書し。或は竹に書す。故に札檄等の字木に従ひ、篇籍等の字竹に従ふ。或は縑帛を用て紙となす。故に紙の字糸に従ふ。典籍大抵漆液を以て竹簡に書す。韋を以て之を編み、卷て之を藏す。故に書冊を算するに卷數を以てす。秦より以前は皆な此有様なりき。古文の簡淨を貴び、暗誦に便ならしめんが爲めに韻を用ひしは此不便ありしも亦た與て力あるべし。たゞ文字の使用上には周末は三代に比してやゝ利便を得たるなるべく、從て思想の傳播もやゝ容易なるに至りしなるべし。かく思想上の進歩、文字使用の利便等の原因は相結合して周末に至りて文學上一大進歩の運を啓きぬ。

(三)

まことに三代の文學は支那文學の淵源とも稱すべきものなり。支那文學が眞に燦然たる光輝を發ちたるは周末に至りての事なり。當時獨立の思索家争ふて鳴りしと共に卓然一家をなせる大文豪も亦た呈はれにき。三代の文學は之を國民の聲と稱すべくして、國民文學を代表すべき一家の文學者はなかりき。たゞ國民の聲の裡に一貫せる思想感情の表現を見るのみ。こは獨り文學に止まらず、政治倫理の上に於ても皆な然るなり。所謂一家言は皆な周末に興る。實に當時に至りて國民文學を代表するに足るべき文學者の崛起して、千歳の偉觀を呈せしは、文學史上一大進歩と稱せざるを得ず。但しこゝに所謂文學者は文學を最後の目的とし、唯一の生命とするが如き純然たる文學者にはあらず。政治學者、哲學者、はた歴史家とも稱すべきものにして、文學も寧ろその手段に外ならず。否寧ろ全然文學者となるの意志なくして、文學者と稱せらるべきものも亦た之れ有り。即ち美はその結果として表現せられしものにて、目的として表現せられしにはあらず。尙ほ一の注意すべきは周末に至りて眞に支那文學と稱すべきものゝ起りしこと

是なり。古代の文學は單に北方の文學なりき。若かも北方少數者の文學なりき。周末に至りて文化西南に充溢せしと共に支那全國民の文學なるもの興りき。且つその文學は在上少數者の文學にあらざりて民間多數者の文學となりき。見よその文學者なるものは無位無官の人に多かりしを。

まことに周末の文學をして一層豊富を致さしめしものは、その文學たゞに北方文學のみならず、南方文學の鬱然として興起し來りたるを以てなり。南方文學の北方文學と頗る異なる色彩を以て興起し來りたるは周末のことなり。周以前に在りては南方は未だ開明の域に達せず、また文學を有せざりき。北方の勢力南方に及ぶに従ひ、漸々文明の域にすゝみ、特異なる人種、特異なる天然境遇、特異なる言語風俗によりて、眼々の間に涵養せられたる特異なる思想感情は、周末に至りて特異なる文學となりて表はれにき。而して北方のと如何に異なるやは別に評論するところあるべし。兎に角特異なる南方文學の興起は支那文學にやゝ理想的分子を加へ、やゝ細墨に拘々たらざる自由の天地あるを知らしめ、後世に至るまで頗る偉大なる影響を支那の思索界に與へたると共に、頗る偉大なる影響を支那文學界

に與へたり。要するに南方文學の興起は頗る當時の支那文學を多様ならしめ、豊富ならしめ、是のみにても殆ど當時の文學の一半をなしたり。而して西方秦の孤峭簡強なる文學もまた周末に至りて現はれ來りぬ。こゝに支那政治上の勢力の鼎立せしか如く、文學も亦た鼎立の勢を呈せり。曰く北方文學、曰く南方文學、曰く西方文學是なり。而して當時の文學者と稱すべきものにて三文學の特質を發揮せしもの北方文學に孔孟荀あり、また左史等の史家あり。南方文學に老莊等あり、また賦家として屈宋あり。西方文學に韓子の徒あり。

(四)

春秋の時に在ては周室その統治權を失ひしと雖も、齊桓晉文互に興りて所謂中國を率ひ、以て周に臣事したり、而して周公の遺制はなほ未だ地を掃ふに至らず、孔子の所謂利にして巧、文にして恥なしの敝はあるも、尊禮の流風は諸侯民人をして表面だけでも温厚君子の態あらしめぬ。而して風俗習慣等の社會的制裁はなほ存したるを見る。當時士大夫の云爲の行餘曲折、腹に劍あるも口には蜜の甘ありし風習は左傳を見んものゝ熟知するところ、されば當時の文字はなほ古代の蒼古典雅

の風を失はず。思想もまた温厚和順なるものを多しとす。當時の諸子につきて孔子の言行を載せたる論語にても、老子の反動的精神をこめたる道德經にても、はた管子の經言にても古雅簡淨後人の筆致の到底企圖すべからざるところ、而して各々その稱道するところの趣の異なるにも拘らず。その思想の温古雅順なるに至りては一なり。

而して這般の社會の傾向はその行かんとするところに行かざれば止むものにあらず。春秋は遂に戰國となりぬ。今社會の表面に現はれたる事實によりて春秋と戰國との差異を見るに春秋の時の如き猶ほ禮を尊び信を尊びたり、而して七國は則ち絶て禮と信とを言はず。春秋の時猶ほ祭祀を嚴にし聘享を重じたり、而して七國は則ち絶て王を言はず。春秋の時猶ほ宗姓氏族を論じたり、而して七國は一言の之に及ぶものなし。春秋のとき猶ほ宴會詩を賦したり、而して七國は則ち聞かず。春秋の時猶ほ赴告策書ありたり、而して七國は則ち聞かず。邦定文なく、士定主なし、約言すれば春秋のときは周の遺風や、存じたりしに戰國に至りて封建的制裁壞

れて郡縣制度に遷らんとする過渡となりたるなり。故に當時の人心は不羈獨立にして王侯に屈せず、王侯また士を用ゆるに急にして厚く之に禮し、支那國民の思想をして頗る自由に頗る廣闊なるものとなしき。

春秋は衰世なり、戰國は亂世なり、衰世の氣は餒乏、亂世の氣は充つ、兵馬の馳驅は國民の氣象をして活潑潑地たらしむ、朱子嘗て文を品して曰く、

有治世之文、有衰世之文、有亂世之文、六經治世之文也、如國語、委靡繁絮、眞衰世之文耳、是時語言議論如此、宜乎周之不能振起也、至乎亂世之文、則戰國是也、然有英偉氣、非衰世國語之文之比也。六經を治世の文と稱するは概を以ていふのみ。まことに春秋と戰國とを比較すれば此の如き差あるを見ん。而して文學に於ける此の如き差は思想感情に於ける此の如き差なるを知らざる可らず。國語を以て戰國策に比し、春秋諸子の文を以て戰國諸子の文に比せよ、朱子の所謂英偉の氣は後者に於て磅礴せるを知らん。

さはあれ、周末の文學は濟世的精神を以て充つ。春秋と戰國とを問はず、皆な時難を急に救はんと欲する志士の衷情に出づ。故にその文學輕浮ならず淫靡なら

ず、その熱誠の湧るところ徒らに空文字を弄するの徒を見す。故にその文學は幾千歳の下なほ懶夫をして起たしむるに足る。而して此時期を横絶して支那北人の思想と感情を遂げ、支那北人の爲めに氣を吐くものは儒の一派にして、儒のうち眞に最もよく文學者の性格を有するものは孟子にして之に次くものを荀子とす。

北方文學

(一)

北人の性格は己に數次の考覈を経たり。その天の人にあらずして地の人たり、その春の人にあらずして冬の人たり、その水の人にあらずして山の人たり、その智者にあらずして仁者たり、切言せばその剛毅克己の人にして泰山嶺々の風あり壁立千仞の態あるは許多の事實之を證して餘あり、その修徳に力め履道に鋭に斃れて後ち己むの慨は浮靡淫縱なる南人の夢にだも及ばざるところとす、此の如き性格を有する北人にして時の難に逢ふはた如何なる行爲をかなす、はた如何なる言語をかなす、はたまた如何なる文學をか後昆に傳ふべき。

さすがに孔子は多面的の人なりき、北人性格の短所を暴露せずして善くその長所を發揮したり。その生るゝや、最も周化せられたる魯に於てせり、魯は管子の所謂近邇にして禮に訓ふの地、その見たりしとき嬉識するに常に俎豆を陳ぬ禮容を設けしといふ。その周に傾投する、衰へたるかな吾夢に周公をみずと嘆じ、郁々乎として文なるかなと激賛し、吾東周をせんかど自白するを以ても知らるべし。彼は北方の文化を集めて大成し、以てその學説を立て、以て民人を教へ、以て世難を救はんとせり。その知識を集むるに汲々として怠らず、周禮を問はんとして周に適き夏殷の禮を見んと欲して杞宋に之きぬ。支那三代の載籍の今に傳はれるもの多く孔子の編著刪正を経たり、書といひ、詩といひ、禮といひ、樂といひ、易といひ、古代の支那人の文學技術は實に孔子の手によりて今に傳はるを得たるなり、その政治家として道徳家としてはた學者として世界の偉人の一たるに止まらず、支那文學に於ける功勞は決して少小なりといふ可らず。その政治に巧に徳行に敢に、兼て詩に通じ、文に妙に、樂に精なるが如き之を釋迦に求むべからず、基督に求むべからず、ソクラテスに求むべからず、たゞ孔子一人のみ

孔子は北人なり、たゞその圓滿なるだけに主角を露さず、然ともその思想感情の根

底は北人の性格を失はず。その道は北方先王の道にして、その教義の總要たる仁は北人血族親愛の情の發達にすぎず。その禮樂を尊び規矩準繩を重んずるは北人の遺風にして、規矩準繩に依らんが爲めに修練せられたる強盛なる意志はまた北人の上古より傳へ來りたる者に外ならず。而してその實際を主とし、説て人間以外に亘らざるは北人本來の傾向にして、天を樂しみ命に安んじ、死生たゞ道によらんとする強固なる道念はまた北人本來の面目と謂ふべし。主として孔子の遺言を集めたる論語は此の如き思想と感情との沛然たるを示すにあらざや。

且つや孔子は甚だしきをせざるの人なり、可もなく不可もなき人なり、一方に偏倚せざるの人なり、中庸の徳の大なるを唱道せし人なり、惟道に惟よりて實際に行動せんとせし人なり、禮義の中に止まらんとせし人なり、その圓滿なる些の圭角を認めんことまことに難し。然ども禮義の中に止まるとは何の意ぞ、規矩繩墨に束縛せられ自由なる理想界に突入せざりしものにあらずや。人間以外、否や道德の範圍以外に出づる能はざりしものにあらずや。是まことに支那北人の思想の實際的にして、また固定的なる所以にあらずや。

而して當時春秋の末に當り戰國に比するに人情風俗なほ温厚なるどころあり、且つやその思想周代の文化によりて鑄鍛せられ、その天稟に於て圓滿玉の如きを以てその言語文章また温順雅健なるを得るものなるべし。而してその詩書禮樂を以て教へし結果は世の亂れたるにもかゝはらず、濟々たる多士を出し、身の六藝に通ずるもの七十有二人の多きに及べり、戰國文學の興起は遠く三代の蘊蓄によると雖も孔子の力蓋しまた與て大なるものあるべし。

頑石水の夾に屹たり、流緩なれば以て漣波を起すに足るのみ。流急なれば如何、怒濤崩るべし、泡沫飛ぶべし。而して頑石の頑益、明なるべし。孔子の弟子が世の風潮に逆ひ廻瀾を既倒に反さんとせしはいはず、次て起るもの子思といひ、孟子といひ、世の頽波を支へて中流に屹然たりしは北方の剛健なる人士ならずして何人か之をよくせん、その意志の強く、その力行の鋭なる、道を執て動かざる皆な北人の性の徳なり。見よ南方の流蕩せる思想は、狂濤にたへずして世にそむき世をのがれんとせしにあらずや。余は孟子に於てや、詳しく之を評し、以て當時に於ける北方文學の眞價を見すべし。

(二)

孔子は魯に生れて周公の流風に化せられ、孟子また孔子の餘韻に和して郷に起る眞個儒教は支那北方思想の化醇にして魯を中心として四方に波及せしものゝ如し。

郷は古邾子の國、説文に云く郷は魯の縣、古の邾婁國、帝顓頊の後の封せらるゝところと蓋し郷といひ邾婁といふは語言緩急の異のみ。而して周時郷に作り、漢時郷に作る古今字の異なるのみ。或はまた略して邾といふ、武王顓頊の苗裔佚を封じて附庸としこゝに置く、儀文に至りて春秋に見ゆ。蓋し春秋のとき魯、邾と仇たり、哀公の時歳として難をなさざるなし、而して兩地相近遷せるは魯の擊柝、邾に聞ゆといふを以ても知るに足るべし。或はいふ孟子生るゝところの郷は郷國の郷にあらずして邾邑の郷なり、即ち孔子と國郷の人なりと。是説や、薄弱なり。たゞ郷國とせんも邾邑とせんもその生れし地の孔子と相遠からざるは明なるべし。

當時邾はよく孟子を出すべき開明の度に達せしか。春秋の時にては左傳僖侯二十一年成風曰く、蠻夷猾夏と、邾を謂ふなり。昭侯二十三年叔孫諾曰く、邾又た夷

なりと杜預註して云く、邾雜して東夷の風ありと。昭侯の時より孟子の時に至るまで大凡百年前後この間能く夷風を脱するを得しか、文献徴するに足らず、今知るに由なきも、さまで長足の進歩をなしたりとも思はれず。さればにや孟子を郷國の人とする者流は或はその先魯に出づとなす。趙氏云く、或は曰く孟子は魯の公族孟孫の後故に孟子齊に仕へ、母を喪て魯に歸葬すと。按ずるに孟孫氏の子孫學を好むもの多し。孟献子は賢大夫なり、もと嘗て孟子の稱するところとなる。孟莊子の孝、孟公綽の不伐、孔子の稱するところとなる。億子懿子武伯皆な孔子を欽敬するを知る。敬子は教を曾子に受く。孟子その子孫として曾子の學統を承く。またあり得べからざるのことにあらず。三桓の子孫哀公に至て皆な微にして諸國に散處す。孟子既に既に孟を以て姓とす。或はその子孫なるやも知る可らず。但し世系詳ならず、こゝに斷言する能はざるのみ。

孟子の生年月に關しては今確然之を定めんに由なし。幾多考證家が考證の餘を以てするも憑據なき臆度の外古來信すべきの説をなし、ものなし。史記は孔子の生年月を明記すれども孟子に略せり。余はたゞ齊宣王梁惠王と同時の人なり

といふを以て足れりとせんのみ。生れて淑質あり、又た賢母の鞠育を受く、三遷斷機のこと夙に人口に膾炙す、今説くを要せじ。長じて學を子思の門人に受く、(史記)或はいふ、子思に受くと(烈女傳風俗通趙岐漢書藝文志注等)然れども年歴より推して孟子決して子思に業を受く可からざるを知る。また自ら吾孔門の徒たるを得ず、私に人に淑すといひしを以ても知るべきか。その子思の門人につき儒學を學び五經に通じ詩書は特にその精通せしところなりといふ。七篇中書をいふ凡そ二十五詩をいふ凡そ三十五、彼は禮節の未より寧ろその本質を説けり。人間行爲の外面的規矩よりも内面的心性を説げり。要するに彼は思索家にして兼て想像力に富み、また猛烈なる感情を有せり。その思索家としては哲學者らしく、想像に富み感情に鋭なる點よりして文學者らしく、蓋世の氣概を有し、不拔の確信を有し、純潔なる理想を有し、勇往果敢水火をも避けざる底の決心を有し、辯才筆力を兼ね有する點よりしては實に一世の革命者らしきところあり。

春秋の末田氏齊を取り、六卿晋を分ち、所謂戰國の形勢成る、當時秦は商君を用ひ、國を富まし兵を強くし、楚魏は吳起を用ひ、戰勝ちて敵を弱む。齊の威宣、孫子田忌の徒を用ひて諸侯東面齊に朝す。天下方に合従連衡を務め攻伐を以て賢となす。

是に於て優は勝ち劣は敗れ、弱は強の肉となる。韓子の所謂氣力に競ふの世とはなりぬ。儒者の立脚地より見ば人の禽獸を去ること幾もなし。人性を善なりとする孟子の理想は之を坐視するに忍びざるなり。激烈なる彼の感情は之を坐視するに忍びざるなり。勇往果敢なる彼の氣象は之を坐視するに忍びざるなり。是に於て彼が筆端は火を吐き、彼の口角は泡を噴けり。思索家、文學者、革命者たる孟子は當時學者の慣行の如く遂に起てり。

その出遊の前後に關しては古來諸説紛々として決するところなし。史記云ふ、游で齊の宣王に事へ、宣王用ゆる能はず、梁へ適く。梁の惠王言ふところを果さずと。趙氏亦た之に依る。曰く、篇を建て梁を先にするものは、仁義を以て首篇をなさんと欲す、因て魏の事を言ひ、章次相從ひ、然して齊の事を後にするなりと。閻氏の見は之と異なり、云く、蓋し生れて鄒人たり、晚に始めて梁に遊ひ、繼て齊に仕へて卿となる。久しうして鄒に歸り。又た宋へ如き樂正子の故を以て魯に至り、終に滕へ之くと。その説蓋し周氏の所謂孟子齊梁先後に於て、當に六國年表及び魏の世家

を以て據となすべし、孟子列傳を以て據となすべからず。年表魏惠王三十五年は齊宣王の七年なり。是年特書して曰く、孟子來ると。若し孟子齊宣王七年以前に於て先づ已に齊に遊ばば、年表何を以て書せざるといへるの理由にいつるならん。その他尙ほ種々の説ありと雖も、先づ史記列傳及び趙氏の説を據とせざる可らず。年表を以て云々するは、やゝ薄弱の感なき能はず。兎まれその出游の前後の如き今之を確言する能はずといふを可なりとせんか。

梁は魏なり、魏惠王大梁に居る。故に僭號して梁王と稱せり。惠王一時強大を致し、若し蘇秦の言をかりて云はば、土を擁する千里、帶甲三十六萬、邯鄲を抜き、定陽を圍み、又九十二諸侯を従へて天子に朝す、以て西秦を謀る。然るに一旦大に齊の爲めに馬陵に敗られ、太子申生虜にせられ、將軍龐涓殺され、國勢頓に振はず。卑禮厚幣以て賢者をまねき、馬陵の恥を雪がんとす。鄒衍之き、淳于髡之き、惠王三十五年孟子また之く。時に秦に商君あり、富國強兵、惠王爲めに大梁に移る。されば惠王の志は克復にあり、利國強兵にあり。孟子之に仁義を説く。その合はざる固よりそのところなり。惠王死後なほその不仁を非る。その改伐を事とし、人民を虐せしこと太甚たしかりしが故なり。惠王卒して子襄王立つ。孟子之を評していふ、望之不似人君、就之而不見、所畏焉と。固より共に爲すあるに足らず。その梁を去りしは宜なり。

而して當時國勢に於て兵力に於て魏を凌駕するの勢あるもの中國に於てはたゞ齊のみ。加ふるに宣王大度あり。その孟子との問答より見るも、寡人兵を好むといひ、寡人色を好むといひ、磊々落落古豪傑の風あり。故に孟子之に説くや、殆どその包懷を盡し、事へて卿となり、極力王をして王道を行はしめんとしき。然るに如何なる事情の蟠るありてや遂に去らざるを得ざるに至る。或は謂らく、孟子使して齊王の幸臣王驪を怒らしむ。疑ふ、驪是を以て積憤して去ると。或は謂らへ、且つ燕畔き王愾づるの後、蓋し君臣の隙既に開きて復た合ふべからざるものありと。そのこと考ふべからずと雖も、孟子の齊を去りしは忍びざるを忍びしものなり。國此の如く、君此の如し。一たび去らば亦た爲すある能はず。されば三宿して豈を出づ。尹士その濡滞を責む、彼猶ほ王の庶幾くは改めて己を反さんことを欲す。自らいふ、夫出晝而王不追予、然後浩然而有歸去。予雖然豈舍王哉。王由是用爲善。王如

用予、則豈徒齊民安、天下之民舉安。王庶幾改、予日望之。と。弟子またその不豫の色あるを問ふ。喩を取る、悲憫大忽を發して吾事休矣の狀歷々語氣に見る。

孟子齊を去てまた臣たるに意なし。魯に遊びては臧倉に隔てられ、鄒宋皆な合はず。たい勝文公賢なり。師事して事を圖る。然とも國小なり、故にたい告ぐるに後王則を取るを以てす。遂に空言世に施さずして止みぬ。

當時國と國と相争ひしが如く、學派と學派とも亦た頗る相競ひたり。今孟子と相辯難せし主なる諸子を擧げんにも性無善惡を唱へ氣外を唱へて孟子と争ひし告子あり。神農の言を唱へ尊農の説をなして孟子と争ひし許行あり。博愛の説薄葬の言をなしたる墨者夷之、非戰を唱へたる宋研等あり。皆一たび孟子といふ、ただ怪む孟子と殆ど同時に宋に莊子あり。言語互に相及はず、西虎相争うて山鳴谷應の壯觀を見る能はざりしを。

孟子は周の赫王の世に没す。その何年なるや詳ならず。年を享くる或は七十四となし、或は九十七となす。皆な信するに足らず。孟子名は軻、字は未だ聞かず。

或は子車といひ、或は子居といひ、或は子輿といふ、また皆な依據なきの言取るべからず。

(三)

七篇は孟子の自著なり。史記にいふ、孟軻如くところ合はず。退て萬章の徒と、詩書を序て、仲尼の意を述べ、孟子七篇を作ると。趙氏いふ、此書孟子の作るどころなりと。又たいふ、是に於て退て高弟弟子公孫萬章の徒と、難疑答問するところを論集し、又た自らその法度の言を撰び、書七篇を作ると。皆な孟子の自著となす。唐に至りて退之いふ。孟子弟子の作るどころと。蓋し證號を書するを見てまかいふか。然とも是れ誠に謂なきのことなり。孟子といひ、惠王といひ、襄王といひ、宣王といひ、後人の書き改めしものとして何の不可あらん。朱子曰く、七篇を觀るに筆勢鎔鑄して成るが如し。綴緝して就るべきにあらずと。閻氏また云く、余も亦た一證あり。證語門人の手に成る。故に聖人の容貌を記する甚だ悉せり。七篇己の手に成る。故に言語或は出處を記するのみと。余は孟子を以て自著となすの穩なるを見る。

孟子七篇の外尙ほ四篇の外篇ありたるが如し。漢志にいふ、孟子十一篇と。風俗

通窮通篇にいふ、書中外十一篇を作ると。或はいふ、史記十二諸侯表にいふ、荀卿孟子韓非の徒、各、往々春秋の文を摺撫して、以て書を著す。勝て記す可からずと。孟子七篇、春秋をいふたゞ迹熄詩亡、及び知我、罰我、無義戰の三章のみ。亦た未だ嘗て其文を摺撫せずと。或はまた云く、史記、法言、鹽鐵論等の引ける孟子、今の孟子にはその文なし、豈俱に外書なるものかと。當時四篇の外書なるもの、存せしは疑ふ可らず。

然とも後漢の時既に散逸して早く偽書の行はるゝありしか。趙氏いふ、又た外書あり、性善辯、文説、孝經、爲政、或は性善、辨文、説孝經、爲政なり。その文宏深なる能はず、内篇と相似ず。孟子本真にあらず、後世依致して託するに似たりと。後世外書につきていふもの多し。然とも真に外書の存したりとせんも、諸子の外篇の例より推せば、多く門人の手に成るを常とす。况んや後世の外書の偽なるに於てをや、その取るに足らざる固より論なし。

(四)

彼は已に思想に於て北方思想を繼承せり。孔子に對しては師弟的尊敬を表し、堯舜に對しては偶像的崇拜をなせり。述へて作らざる孔子は北方聖賢の言と跡とに本づき、その儒教の倫理説を組織したり。而して自ら堯舜禹湯文武周公の道、即ち所謂先王の道を繼承せりと以爲り。語の堯曰篇は最も明白にこの意を示せり。而して孟子はまたその自ら任ずるところを述べて以爲らく、堯舜より湯に至るまで五百餘歳、禹臯陶の若きは則ち見て之を知る、湯の如きは則ち聞て之を知る。湯より文王に至るまで五百有餘歳、伊尹萊朱の若きは則ち見て之を知り、文王の若きは則ち聞て之を知る。文王より孔子に至るまで、五百有餘歳、太公望敬宜生の若きは則ち見て之を知り、孔子の若きは則ち聞て之を知る。孔子よりこのかた今に至るまで、百有餘歳、聖人の世を去ること、此の若くそれ未だ遠からざるなり、聖人の居近きこと、此の若くそれ甚だし、然り而して有るなからんや、則ち亦た有るなからんやと。眞個彼は孔子以後儒の代表者なり、北方思想の繼承者なり、否な寧ろ發揮者なり。

請ふ先づ去てその説くところを觀よ。北方思想の特性なる實驗的方面を出でざりしにあらずや、倫理政治の外に出でざりしにあらずや。彼は孔子の仁より義を

掲出して仁義を説く、發明の功決して没す可らず、然とも孔子の仁は則ち孟子の仁義にして、北方家長制度の間に養成せられたる親のみ、血族の厚薄によりて差等ある愛のみ。孔子は仁を以て此愛を表し、孟子は特に義を掲出して愛に差等あるを示せり。博愛主義の盛に唱導されし孟子の時に於て明に之と異なるを示さんが爲め、仁に代ゆるに仁義を以てせしは、時勢に適應して儒の所説を明確ならしめしものといふべきのみ。

その他性善の説の如きまた儒家一派の傾向を道破せしものにて、四端の言の如きまた茫洋たる孔子の所説に組織を與へたり、且つや養氣の論は殆ど先儒未發の論にして躬行實踐を主とする儒家の倫理説には欠く可らざるもの。彼は儒教史上に於てかゝる功績を遺し、這般の立脚地を以て盛に人主に説き、政治道德を談し、弟子を教へ已に端を異にするものを攻め遂に七篇の大文字を後世に傳へたり。今その言説を分析縷述するは、殆ど余の目的にあらず。余はたゞその文學的價値を問ひ文學者として孟子を觀んのみ。

(五)

彼は管に一代の思索家たるに止まらず、また一代の大文豪なり。動かす可らざる北方的確信とその人性に對する性善なる理想とその燃ゆるが如き熱情とその白刃も蹈むべき敢爲の氣象と兼てその辯才筆力とは涸澹なる學者として終生吃々たること能はず。されは已にその性格に於て一代の思索家たると共に、一代の改革者たると共に、また一代の理想家にしてまた一代の文學者たるを見る。その人類に對して性善と信する理想を以て戰國汚濁の世態人情を見、その確信と、その熱情と、その敢爲の氣象とはその辯才とその筆力とを驅て火を吐き雲を喚ぶ。加ふるに人心作興せる戰國の時代的影響を蒙りたりとせば孟子七編の大文字決して偶爾に出でさりしを知るべし。

余は孟子を理想家なりといふ、比較的の言のみ。決して現實世界を擺脫せりといふにはあらず。その言説は依然として政治道德の實際的方面のみ。然とも之を儒家の他の諸子に較すれば明に理想的傾向あるものと稱するに躊躇せず。蓋し孔子以後の儒家に二派あり、一は子夏より荀子に及びたる一派と、一は曾子より子思を経て孟子に及びたる一派と是なり。前者は尊禮を主とし、後者は信性を説く。

勢ひ後者の比較的理想家たらざる能はず、而して余は此派に於ても孟子を以て最も理想的傾向あるものとす。その心性を説き仁義禮智を性の四端とし、多く主觀的言説をなすのみならず、堯舜に對して偶像的崇拜をなすを以ても知り得べからざるにあらざり。さすがに孔子は之に異なり、その夢想するところは周公にあり、堯舜を景慕するまた尋常にあらざり、寧ろ事實の明白なる周公を模範とせん意は見ゆ。孟子に至りては禹湯文武周公特に孔子を景慕すること非常なると共に、事實のさまで詳細ならざる堯舜を崇拜し、始ど之を理想的偶像とし、その時代を理想的時代とし、殆ど自己の理想せる善の化身と信じき。

蓋し文學者の理想は分析して到り得べき哲學者の理想にあらざり。寧ろ想像を以て到り得べきものとす、哲學者の理想は主として智力を以て之を得、文學者の理想は主として感情を以て之を得るなり。孟子の理想は前者よりも寧ろ後者に屬す而して彼は空想に富み感情に富むが故にその文學抽象的ならずして具體的なり見よ、彼は汎然仁といはずして仁義といへりしにあらざりや、彼は汎然性といはずして性善といへりしにあらざりや、その事物を論議する多く一事一物を論議せしにあらざりや。

孟子の言説の明確なる、また多く比喩を用ゆる皆なこゝを以てにあらざりや。

孟子が抽象的論議をさけて具體的事實を好むや政治道德上多く時事を談じ、また好で人物の評議をなしき。而して毎に明確なる斷案を下し、人をして把握するに苦しましむるの痕なし。また古聖先賢を上下するに毎に抽象的ならずして具體的なり、理の上より説きて死物ならしめず、情の上より説きて活物たらしむ。その言に曰く、以友天下之善士爲未足、又尚論古之人、頌其詩、讀其書、不知其人、可乎。と眞個彼はその詩を頌し、その書を読み、その含有せる理を見んよりは寧ろその人を知らんとするなり。その活人を畫きて之を友とせんとするなり。

彼が事を論ずる科學者的分析を事とせずして文學者の總合を事とす。之を歸納せんよりは寧ろ之を演繹せんとす。文學者の知識は智力的歸納に得ずして感情的獨斷に得るを多しとす。孟子の此傾向は偶、以てその文學者たるの資性を示すものなり。彼が是を惠王に説く劈頭喝破して曰く、王何必曰利、亦有仁義而已矣と、毎節みな此の如き筆致を用ひ、概括的斷案を下して縷述説明を後にするを常とす。

而してまた透徹なる眼光を以て人の意を量り、齊宣王をして詩云、他人有心、予忖度之、夫子之謂也と賛せしめ。最も明白なる事例を以て最も覺りかたき事物を説明し、層々説きてその矛盾の存ずるところを知らしめ、遂に誘ひて自家藥籠中の者たらしむ。當時その好辯を以て目せられ、後世戰國策士の風ありと評せらるゝものになきにあらず。その梁惠王に問ひて人を殺すに挺と刃とを以てするに、以て異なるあるか、曰く以て異なるなし、刃と政とを以てするに、以て異なるあるか、曰く以て異なるなしと自白せしめ、また齊宣王の牛の死を見るに忍びずして羊を以て之に代へしめたるに乗じ、この心以て王たるべしと説き、また宣王に謂ひて曰く王の臣その妻子を其友に託して楚に之き遊ぶものあり。その反るに比びてその妻子を凍餒せば則ち之を如何せん。王曰く之を棄てん。曰く士師(獄官)士(卿)士(遂)士(を治むる能はずんは之を如何せん、王曰く之を已めん、曰く四境の内治まらざるは之を如何せん、遂に王をして顧みて他を言はしむ。而してその獨斷的なる書を讀むに於てもまた曰く盡信書、則不如無書、吾於武成、取二三策而已矣、仁人無敵於天下、以至仁伐至不仁、而何其血之流杵也と、その堯舜等の事蹟を論ずる多くは獨斷のみ。

こゝに注意すべきことあり。その比喩に用ゆる材と雖も多く人事を用ゆることはなり。是また北方文學者たるの一徴にあらずや、その論するところ皆な人事にして之を説明するを要する具體的事實は之を天然に資ること少なくして大抵之を人間の行爲に資れり。人事を論するが故に人事に資るといふことなけれ。天然の寵兒は人事を説明するにもまた多く比喩を天然に求むるなり。若し我言を疑はし去て孟子と莊子との文を比較せよ。天惠なき北人の文學と天惠ありし南人の文學とは明に識別するに難からざるべし。

(六)

枯澹なる儒家の倫理説を説きて有趣なる文學たらしめしもの當時孟子あり。而して後た一の王陽明あるのみ。若しそれ尋常一様の筆力を以てせんには沒趣なる仁義道德の説明は依然沒趣に了らんのみ、余は沒趣なる題目を説明して有趣なる文學となし、孟子の文學的天才に推服せざんばあらず。

彼は毎に仁義禮智の如き抽象的概念を説明するに具體的事實を以てし哲學的談理をして文學的趣味を帶ばしむ。余は一に之を引例するの冗なるを知る。たゞ

楊子の爲我説を擧ぐるにも楊子取爲我、拔一毛而利天下、不爲也といひ、一毛を抜き
て天下を利するをすら爲さざるの事實を示し、測隱の心を説明すにも井に陥らんと
する小兒の例を擧ぐ。而してその熱情と時世に影響せられたる英偉の氣象と
は痛快なる語氣、轉讀者をして快哉を叫ばしめ、摩姑をやどうてかゆきをかくの感
あらしむ。

感情の熾なるものは時勢の影響を受くることも亦た太だし。孟子の痛言快語ま
た頗る時勢の影響を受けしものたらずんばあらず。たゞに其の痛言快語といは
ず。その思想と雖もまた頗るその影響をうけたるを見る。彼が齊王に説きて君
之視臣、如手足、則臣視君如腹心、君之視臣、如犬馬、則臣視君如國人、君之視臣、如土芥、則
臣視君如寇讎と。而してその卿を問ふに答へて貴戚の卿あり、異姓の卿ありとな
し、その貴戚の卿を請問するに答へて、君有大過、則諫、反覆之而不聽、則易位といひ、王
をして勃然として色を變ぜしむ。その他墨者を罵て父なく君なく禽獸の如しと
いふ。此の如き激語は一々列擧するに暇なし。その感情の激甚なる往々にして
中正の外に逸出し、北方的規矩も能くその意馬の馳騁を制する能はざらんとする

狀あり。

さればその文辭は白帆順風に駕するの態、少なくして奔流岩を嘯むの狀あり。そ
の意志は北方の風を承けて頗る強盛にその感情は戰國の風を承けて熱熾にその
強盛と熱熾との度の益々高きに従ひてその撞突益々甚たしきを見る。

(七)

要するに孟子は羅大經が

以儀秦齒舌、明周孔心胸、卓識明辯、蘇醒萬生者。

といへるものは確評なり。また陳繹曾が

孟子善議論、先提其綱、而後詳說之、只是見識高、胸中流出、辨論盤根錯節處、只以譬喻、
輕々解破

といへるも亦たよく孟子を觀たるものなり。眞個儒家的文學者としては孟子そ
の第一位に居るもの。

(八)

儒家の文學を傳ふるに與て有力なるものは孔門中子夏の一派を推さざる可から

ず。而して荀子は此派に於て最も有力なるものなり。

子夏は卜商の字なり。孔子より少きと四十四歳なりといふ。而して當時業に已に孔門中嶄然として頭角をあらはし、特に文學を以て稱せらる。孔子嘗て之に告げて汝爲君子儒、無爲小人儒、といひ、また

子夏問、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮、何謂也。子曰、繪事後素、曰、禮後乎。孔子曰、商始可與言詩已矣。

と見ゆ。而して當時の所謂文學は德行に對するの謂にして、多く古來の經典に通するを指したるなり。されば子夏の思想は孔子門流中に於ても曾子の如く内に向はずして外に傾きたるが如し。勢ひ古代聖賢の迹たる禮を重んずるに至らざるを得じ。

事は極端に至りて弊所と優所と自ら判明す。子夏が禮を重んぜし弊はその末流の徒に至りて愈甚だしきを加へぬ。蓋し子夏は如何に子弟を率ひしか。子游曰く、

子夏之門人小子、當洒掃應對進退、則可矣。抑末也。本之則無、如之何。

と。以てその一斑を想しがたからず。戰國に至りて特に甚だしきを加へ、荀子をして之を嘲りて正其衣冠、齊其顏色、曠然而終日不言、是子夏氏之賤儒也といはしめき。當時いづれの流派かその弊なからむ。然ともその末を見てその本を推すべし。而して荀子は實にその門流なり。その思想の外に傾き、また文學に富むもの、蓋し師承に於て已に然るものあるなり。

孔子の死する、子夏魏の西河に教授す。論語中、子游の子夏の門人を評せしを載するを見るも、檀弓に文侯子夏を招きて國中子弟皆なその教を仰ぎしと記するを見るも、曾子が子夏を攻めて西河の人汝を夫子かと疑はしむといひしより見るも、その門戸の大察すべきなり。さればその門下頗る士に富み、今その著明なるもののみを擧ぐるも、曰く駢臂子弓、曰く魏文侯、曰く段干木、曰く田子方、曰く高行子、曰く曾申、曰く公羊高、曰く穀梁赤、曰く李克、その他枚擧に暇あらず。而して此等は皆な當時學界一方の明星たるべきもの。彼既に文學に通ず。故に經を傳ふるに於て遙に曾子に勝る。此等高足弟子は多く子夏より經を傳へて後代に惠み、實に漢唐訓詁學の端を發きたり。而して荀子は實に此の如き門流を承けたり。その傾向ま

た察するに難からざるべし。

荀子の學風その師受する所より來りしことまた疑を容るべからず。然とも當時の社會の狀態の影響も亦た少小なりと謂ふ可からず。

仁失はれて義あり。孟子は既に義を説くこと頗る重し。義失はれて禮あり。荀子の禮を重視する孟子に軒ぐ。固より内を重すれば仁義皆な心より生ずとし、性を説く自ら善ならざる可からず。外を重すれば禮樂皆な聖人の爲に出づとなす。性を惡とし之を規するに禮を以てするは自然の勢なり。然とも荀子をして特に性惡を唱へしめしもの孟子に反動する所ありしなるべしと雖も亦當時人心の汚穢なりしに本づかざんばならず。彼は戰國の末年に出たり。世態の頹敗また孟子の時の比にあらず。况んや孟子は理想に奔るの人なり。外部の腐敗は益之を驅て理想に奔らしむ。荀子は外部を觀る人なり。時勢に影響せらるゝこと勢多からざるを得ず。

故に彼か禮を説くや。古人の思想とや、異なる所あるを見る。彼かどく所は儀式典例にあり。約言せば外儀にあり。彼は之を以て天然の性にあらざして聖人の爲なりと謂ふ。彼は之を以て民を教へむとするよりは寧ろ民を規せんとするの傾あり。是れ道德的政治主義を離れて一步を法治主義の範圍に投じたるものにあらずや。勿論性惡とせば之を束縛して人爲の禮に従はしむるの要あるべし。孟子は内を以て外を化せんとし、荀子は外を以て内を規せんとす。想ふに古代淳朴の世に在ては。結繩尙信をたかへず。人智すゝむに従て稍智も亦た長ず。荀子が世を治めんが爲めに禮をして法に近からしめしもの時勢豈影響なしと謂ふべけむ。劉向云く、觀孫卿之書、其陳王道、甚易行也。これを謂ふなり。

荀子外を觀、孟子内を察す。その結果は歴史的觀念に大差を生じき。荀子は進歩をや、認めしと雖も孟子は之を認めず。前者は治方の世運と共に變すべきを知られども後者は之を知らず。孟子は堯舜に至治の極となし、理想的標準となし、直ちに之に倣ひて今を治めむとせしも荀子は乃ち後王を稱す。彼は後王の道の明なるを以て之れに依りて治をなさむとするなり。その天地始者今日是也、百王之道後王是也、君子審後王之道、而論於百王之前、若端拜而議、不荀と曰ひ、又た聖王有百、吾孰法焉、曰、元久而息、節族久而絕、故曰、欲觀聖王之跡、則其燦然者矣、後王是也、彼後王者

天下之君也。舍後王而道上古賢之是猶舍己之君而事人之君也。(非相)と云ひ、又た言道徳之本不二。後王道過三代謂之蕩法。二後王謂之不雅。百家之說不及後王則不聽也。(儒効)と云ひ至治之極。復後王(成相)と云ふ以て徴すべきなり。

要之荀子は子夏の學風を承けて之を大成し。恰も孟子が曾子子思の學統を嗣きて之を大成せしか如し。孟子の學流れて空疎の弊を生せしが如く荀子の學亦た流れて刻薄なる法術となる。而して荀子の學特に時勢に影響せられしことの大なるを見る。

(十)

威宣の時より稷下は天下學者の巢窟となりぬ。之を先にしては騶忌あり孟軻あり。之を中にしては騶衍あり淳于髡あり慎到あり。環淵接子田駢騶奭の徒あり。皆な書を作りて治國のことを言ふ。衍や迂大にして閎辨奭や文具りて施しかた。髡や久しく與に處れば時に善言を得ることあり。故に齊人頌して曰く談天衍彫龍奭矣。穀過髡と而して荀卿最も晩る。

荀卿又た孫卿と曰ふ。荀と孫とは普通なり漢宣帝の諱を避くと以爲へるは非なり。

り。宣帝諱は前漢時尙は嫌名を諱まざりき。名は况趙の人秀才あり年十五(史記五十)始めて遊て齊に學ぶ。田駢の屬皆な己に死し齊襄王の時荀卿最も老師たり。是よりさき齊士を尊で之を遇する大夫に準ず。稱して列大夫と云ふ。淳于髡等皆命ぜらる。第を康莊の衢に開き門を高くし屋を大にし之を尊寵す。當時尙は列大夫の缺を修む。而して荀卿三たび祭酒となりき。

齊人或は荀卿を譏す。荀卿乃ち楚へ適く。楚相春申君蘭陵の令となす。人或春申君に謂ふ。曰く湯以七十里文王以百里孫卿賢者也今與之百里地楚其危乎と。春申君荀卿を謝す荀卿去て趙へ之く。後客或春申君に謂ふ曰く伊尹去夏入殷殷王而夏亡管仲去魯入齊魯弱而齊強故賢者所在君尊國安今孫卿天下賢人所去之國其不安乎と。常時の貴公子が所謂客なるものに如何に簸弄せられしか荀卿か如何に當時に重を有せしかを想するに足るべし。

荀卿の聘に諸侯に應ずるや秦昭王に見ゆ。昭王方に戰伐を喜ぶ。而して荀卿三王の法を説く。秦相應侯みな用ゆる能はず。趙に至て兵を孝王の前に議す。孫臏變詐の兵を爲し荀卿王兵を以て之を難す。書中議兵篇あり是なり。趙も亦た

用ゆる能はず。

蓋し荀子の説は孟子のに比すればや、當時の趨勢に近し。然とも時流と彼との間には猶ほ數十百歩の差あり。况んやその情に熾にして才に短に、や、迂なるが如き跡あるをや。固より當世の務を談ぜは孟子と比すべきにあらず。彼は戰國策士の習ひに染まらず、優に地歩を占む。國策僅かに彼が春申に諫むる事を載するも、大旨その賢を擇びて長を立るを勸むるのみ。蘇秦張儀、縱横の説をなして大に諸侯に貴顯せらるゝや、退て笑て曰く、夫不以其道進者、必不以其道亡と、議兵篇、その弟子李斯との問答を載す。李斯、荀卿に問ふて曰く、秦四世有勝、兵強海内、威行諸侯、非以仁義爲之也、以便從事而已と、荀卿之に答ふるの言は以てその立脚地を知るに足らむ、曰く、非汝所知也、女所謂便者、不便之便也、吾所謂仁義者、大便之便也、彼仁義者、所以修政者也、政修則民親、其上樂其君、而輕爲之死、故曰、凡在於君、將率末事也、秦四世有勝、認々然常恐天下之一合而軋已也、是所謂末世之兵、未有本統也と、當時に在ては彼はもと敬して遠けらるゝを免れざりき。遂に蘭陵の令を以て楚に終る。その生卒年月今之を知らむに由なし。四庫全書提要之を辨じて詳なり。曰く考劉向

序録、卿以齊宣王時來遊稷下。後仕楚、春申君死而卿廢、然史記六國年表載春申君死之年、卿年當一百三十七矣、於理不近。晁公武讀書志謂、史記所云年五十爲年十五之誤、意其或然。宋濂荀子書後、又以爲襄王時遊於稷下、亦未詳所本。總之戰國時人爾、其生卒年月已不可確考矣と。其遺書全く是れ憤世矯俗の言、自ら世に容れざるを悲むの意、特に成相の一節に顯然たり。

劉向云ふ。蘭陵多く善く學をなす。蓋し孫卿を以てなり。長老今に至るまで稱す、曰く、蘭陵の人、喜て字して卿となす。蓋し以て孫卿を法とするなりと。その徳化想ふべきなり。

(十一)

荀子は孟子の後に生れて最も戰國の老師たり。史公傳を作り、諸子を論次す、獨り孟子荀卿を以て相提して並び論ず。荀卿の弟子の如き殆ど孔子に比す。而してその學最も後あり、故に之を推尊すること決して後世の如くならざるなり。

蓋し周末秦漢より以來、孟荀並べ稱すること久し。小戴に傳ふるところの三年間は全く禮論篇に出で、樂記の飲酒義の引くところは俱に樂論に出づ、聘義の子貢玉

を貴ひ珉を賤むを問ふは亦た法行篇と大に同じ。大戴傳ふるところの禮三本篇も亦た禮論篇に出づ。勸學篇は即ち荀子の首篇にして宥在篇末、大水を見る一則を以て之に附す。哀公問五儀、哀公篇の首に出づ。則ち知る荀子著すところ、載せて二戴記に在るもの尙ほ多からんを。想ふに荀子の學風、頗る古禮を重んじ、之が解釋に務めたり。また孟子の獨斷的にして心性を説き理想に傾きたると異なるものあり。その著の戴記に採録せられしはもと以あり。

荀子の學は隆禮を主とす。禮とは何ぞ。古聖先王の跡なり。規矩準繩なり。制度風俗習慣なり。道の外面的依據なり。彼は殆どこの外面的依據を以て道とするなり。その學承くるところあり、彼が隆禮の主義は最も北方的思想に適合せる者なり。その性を惡とし、務めて北方聖賢の跡なる禮に依據すへしと教ゆるは道徳實踐の上に於て意志の作用を要するのみ。彼はたゞ意志の作用によりてその所謂禮即ち規矩準繩に依らんとはするなり。之を稱して北方思想の醇正なるものといふ、決して不可なるなし。後世宋學者の之を非るはその惟心の哲學に影響せられたるが故にして偶、荀子の醇正を證すべきのみ。然り彼は純乎たる北方思想の繼承者なり。

(十二)

儒家の諸子荀子に至りて始めて文を作るに意あり。荀子以前の儒家は大抵自家の學説を發揮するに勉め、敢て文に巧を求めたるの痕なし。たゞ文學者たるの天資は自然にその文字をして文學的たらしめしのみ。されば論語孟子等の書大抵問答牒を用ひ、語錄牒を用ひ言文一致す。又た篇に命ずるにもたゞ篇首の一句を以てするのみ。篇名と篇中の意と相關するもの少なし。荀子に至りて全くその風を革め、語錄牒を用ひず、また篇に命ずるにも多く篇意による。言と文と遂に相岐る。

彼が文を作るに意あるは皆にこれのみにあらず。頗る之を修飾するの傾あり。さればその辭頗る富麗にして絢爛目を驚かすに足るものあり。是れ或はその學の博くして文字に富むの致すところなるべきもまた文を作るに意あり。辭を修むるに心あるが故ならずんばあらず。

彼が文を作るに意あり、辭を修むるに心あるはその賦を作りしを以ても知らる。

蓋し嘗て楚に遊びし結果ならんか。漢書藝文志載す、孫卿賦十篇と今存するもの僅に禮和雲、蘆箴及び無題二篇にすぎず。賦の今に存する者荀卿の此等の賦を以て始とすべし。固よりその賦なるものは恰も後世道學者の詩歌の如く、毫も詩的價值なく、論文に賦の形骸を與へしものにあらず。たゞその迂餘曲折の所や、賦に近きものあるのみ。然ども文を作るに意あり、辭を修むるに心あるは明なり。

(十三)

荀子の學は博し、辭は富む。その文學の辨博富麗なるは自然のことなり。特に彼は文學を以て孔門の十哲と稱せられたる子夏の流を挹めり。その文を作り辭を修むるに意あるはまた自然の事なり。たゞ荀子は外形に着するの人なり。その學既に道の外面的表章たる禮を主とせり、その性惡の説また人間の外形たる肉體の側よりみたるものにして、觀察多く客觀的に傾き、孟子の主觀的なるとは正に相反對せり。而してその文學も亦た多く富麗を以て勝る、即ち字句の外形に於てその妙を見るなり。

彼は學に深くして才に乏し、吃々書を讀むの人にして之を實行するの活氣なし、や

一拘儒の氣味あり。その文字、辨博富麗は有り、而して一道の活氣その間に鬱勃たるもの少なし。特にその冗漫にしてままりなきは讀むものをして厭倦の情に堪へざらしむ。辭賦の影響を蒙りし散文は大抵この病あり。要するにその活氣なく、運用の才なきは、その富麗をして美裝したる人形を以て終らしめ、その絢爛をして人造の花を以て終らしむ。陳繹曾がその文を評して

荀子善議論、辨博富麗、失之太方、轉折少力。

といへるは誣言にあらず。

たゞ時勢の影響はこの老儒先生をして咄々怒聲を發せしむ。特に十二子を非し、思孟を罵て

略法先王、而不知其統、猶然而材劇志大、聞見雜博、案往舊造說、謂之五行、甚僻遠而無類、幽隱而無說、閉約而無解、飾其辭而祇敬之曰、此真先君子之言也。子思唱之、孟軻和之。世俗之溝猶習儒、嚙々然不知其所非也。遂受而傳之、以爲仲尼子游爲茲厚後世。是則子思孟軻之罪也。

といふ。况んやその他の諸子をや。怒罵往々にしてその實に過ぐ。たゞその怒

罵や不才子の怒罵なり。孟子の如く透底せず。單に怒聲を聞くのみ。單に罵言を聞くのみ。終に人をして快哉を呼ばしむる能はず。さくものたゞその怒り、その罵りしを知るのみ。

要するに荀子は學を以て勝る。その辨博富麗まことに多しとすべし。袁才子、王安石を評して曰く、

荆公性拗折、故琢句撰詞、迥別凡調。

と。移して以て荀子を評すべし。その學を以て句を琢り詞を撰ぶ。絢爛人目を驚かすは自然のことなり。而して實に秦漢雅麗の端を發く。

南方文學

(一)

南方の文學は周末に至りて始めて世に現はれ、その特異なる思想感情とその特異なる文字とを以て殆ど周末文學の一半をなし、その影響の大なる北方文學と對立して毫も譲るところなきを見るなり。

蓋し南方荆楚の始めて文化に向ひしは蓋し周の時よりなるべし、時の周南に漢廣なる篇あり。序者は曰く

德廣所及也。文王之道被南國、美化行乎江漢之域、無思犯禮、求而不可得也。

と而して毛氏は之に註して紂時淫風遍於天下、維江漢之域、先受文王之教化と。江漢の域は荆楚の北域にして、眞に南方と稱すべきにあらず。然とも文王の時已に南方荆楚の北域文王の化を被りたりとせば、漸次周徳の南流する端は啓けたるなり。而して特に南方をして北方文化に感染せしめしものは、周時鬻熊なるものを楚に封じたることなり。或はいふ、鬻熊は楚人なりと。漢志鬻熊二十一篇を著す。今傳ふるもの或は僞なるべしと雖も、その文武周公の師たりしは疑なし。されば江南をして衣冠の區たらしめしもの鬻熊及びその子孫の力決して少小ならじ。

但し余はこゝに北方文化の感染を被りたりといふ。實に南方文化の開道者は北人なり。然とも南人は依然南人なりき。北方文化の感染を被りたりと雖も、天然境遇を異にしや、人種を異にせる南人の思想感情は、その固有なる特質を失ふべきにあらず。寧ろ少數の北人は南方多數の人民に動かされて自ら南人化したる

を見る。况んや周制の實際に行はれたるは畿甸の地に止まり、所謂國は各、その地の人情風俗によりて之を治め、從て制度を異にしたるをや。南人の思想感情は北人の開導によりてその固有なる特質を發揮したるに過ぎず。

余はこゝにやゝ人種を異にしたりと云ふ。今支那に旅行したるもの、言を聞くに、鶏頭關を下りて褒城縣汧縣に至れば人間の顔容俄かに前のと異なること、輿態に堪へたり。之を北京等の人に質せば、南人は色白し、軀瘦たり、丈矮しといふを通例とす。北方の人は大抵黃色にして、軀幹長大なり。且つ北人は多く蒙古人の特質を帯び、眼上に釣るもの多く、南人の眼は平行して細きもの多し。また北人は鼻高く、南人は比較的幾分か低し。即ち北人は剛勁の氣質を、軀貌に表し、北人は柔弱の氣象を形色に示す。されば孔子嘗て子路の強を問ふに對へ、

南方之強與、北方之強與、抑、而強與、寬柔以教、不報無道、南方之強也、君子居之、被、金革、死而不厭、北方之強也、而強者居之、(中庸)

と。形貌と氣質とに於て既に此の如き差異あり。未だ充分なる考察を経ずと雖も、人種に於てやゝ異なるものありと謂ふ、決して不可なきが如し。且つや支那に

於ては四方の交通まことに不便にして、また他郷の人と婚せざるの習慣なり。たとへ他郷へ流寓して死すともその屍を故山の土に埋むるが如き、容易に他郷の人と混淆せず。故にその血族を純粹に保存する傾向あり。這般南北人種の差は、蓋し古昔より然りしものなるべし。

已にやゝ人種を異にし、從て言語に於ても亦た差違あり。固より支那に於ては五十餘種の言語あり。然ども最も汎く南話北話の二に區別すべし。古代已に楚夏の二音ありしこと、爾雅說文等に徴するも明なり。我國に傳はりたる支那語にも漢音あり、吳音あり、やゝ異なり。近時なほ北京語なる官話と廣東等の南音とは大に差異あり。古代交通少なき世に在りては、此差異一層甚だしかりしなるべし。

南と北とは已に此く人種を異にし、また從て言語を異にし、而して兩者は頗る天然境遇に於て異なるなり。北方の氣候寒冽にして、空氣極めて乾燥せる平原なるは既に云へり。而して南方は之と大にその趣を異にし、氣候は冬もなほ暖く、空氣も濕潤し、土地も頗る肥沃なり。從て北方の如く動植のもの少なからず。已に三代の時に於ても禹貢の記するところによれば、揚州の條下に

篠簞既敷厥草惟夭。厥木惟喬。厥土惟塗泥。
と見え、またその貢を擧げて、

厥貢惟金三品。璫珉篠簞。齒革羽毛。惟木。島夷卉服。厥篚織貝。厥包橘柚。
といふ。また荊州の條下に厥土惟塗泥といひ厥貢を擧げて、

羽毛齒革。惟金三品。批絲栝栢。礪砥磬丹。惟篚繅紵。云々

といへり。以て古代より頗る動植物のものに富みたるを知るべし。現時に至りては北方の民は多く供給を南人に仰ぐなり。

此く南方の氣候の暖きは氣象上の變化を倏忽ならしめ、動植物のもの、繁生は榮枯急變の感を深からしめ、且つや土地肥沃にして生活に便なるは人をして衣食住に汲々たらざらしめ、從て理想的生活をなすの暇あらしむ。南方的思想の理想的傾向あるは是れ亦た與て力あらずんばあらず。眞個彼等は北人の如く意志強盛ならずと雖も感情に富み、想像に長ずる點に於ては北人に勝ること萬々たるを見るなり。

且つや竹木の繁生は彼等の氣質の上に於て少なからぬ影響を及ぼしたり。北方

に於て竹木なきの結果は家屋を作るに土石を用ひ、甚だしきは穴居に住せり、此穴居は河南より陝西に至るの間に極めて多く、古の所謂司空の官は穴居のことを司とるの義に取る。而して今なほその數頗る多し。江南は之と異なり竹木多く、以て家を作るに足る。泥土の家に住するものは自ら氣質陰鬱にして、南方晴朗の天空氣の疏通する室に住するもの、自ら胸宇快闊なるは争ふべからざるの數なりとす。

而して自然の美に於て南方は北方の如く貧ならざるなり。彼は花卉鳴禽に富む。山は北方の如く驟ならずして翠色抱むべく、水は北方の如く濁らずして清澄緑を漾ふ。且つ氣は澄み日は暄なり。さればその人民自ら郊外に遊び、北方的閉居を事とせず。古代に於ては漢上游女ありといへるにあらずや。されば南方は意志の強盛なる克己力行の人を出さざと雖も、また感情に富み、特に美感の發達せる人を生せんは自然の事なり。

尙ほ一の注意すべきことあり。その風光の多様なることなり。變化あることなり。北方黄河の邊の平原千里又千里、太行等の山ありと雖も、その平原を破るに足

らざるとは異なり、到るところ峯巒曲屈してまた北方の望の茫たるに似ず。且つや南方は北方に比すれば水頗る多く、商船北馬の熟語は頗る能く南北旅行の状を穿てるものなり。且つ氣象の變化あり、動植のもの多種なり。従て風光を多様ならしめ、變化あらしむ。南方文學が北方文學の單調に似ざるはかゝる地理的影響ありしによるなるべし。而して若し北方文學を山の文學とせば南方文學は水の文學なり。北方文學を仁者の文學とせば南方文學は智者の文學なり。されば南方文學の流蕩多姿なるは北方文學の固定的なるに似ず。而して南人遺般の傾向は老莊の文學に表はれ、また屈宋の詞賦に見はる。

(二)

南方思想の理想的傾向を代表して始めて高遠幽玄なる哲學を組織したるものを老子とす。彼は北方實踐的傾向を代表して儒教を組織したる孔子と對立して支那學界の日月の如し。然り、孔子は事物の表面にその思想を運び、日の晝を照すか如く老子は事物の裏面にその考索を向け、月の夜を照すが如し。支那人の口吻を以て之をいへば孔子の道は陽にして老子のは陰にして、前者の積極的なるは後者の消極的なるを正に相反對せり。孔子が北方魯の産として老子が南方楚の生として固より正に然るべきところ。

老子は楚の苦縣厲鄉曲仁里の人なり。苦縣もと陳に屬す。春秋の時楚陳を滅し、苦もまた楚に屬せり。史記傳ふるところによれば姓は李氏、名は耳、字は伯陽、諡して聃といふ。周の守藏室の史なりと。然とも或はいふ聃は外字なりと。或はいふ、字なりと。許慎曰く、聃は耳漫なりと。蓋し老子は匹夫なり、固より諡なし。苟も弟子諡して之を尊ばんと欲せば則ち必ずその令徳を擧ぐ、烏ぞ聃といふを得ん。孔子嚴事するところの賢大夫皆な氏と字とを擧ぐ、晏平仲、蘧伯玉、老聃、子産その稱一なり。聃それ或はその字ならんか。蓋し理想的傾向を有するものは歴史の憑據を重せず。老子は古來道教の祖と仰がれたるが故にその閱歴多くは虚誕にして信ずるに足らず。神仙者流許多の神怪なる事蹟を附會して漢時已にその眞を知るに由なかりしならむ。されば史公その傳を作りて、或蓋などの疑辭を用ひ、その年齢を百有六十餘歳なりといひ、二百餘歳なりともいひ、或は周の太史儋は老子なりといひ、世その然るや否やを知るなしといひ、又たその終るところ知るなしと

いひ終に隱君子なりと稱す。その知りかたきこと此の如し、後家道家が附會せる奇蹟の如きことに擧ぐるの要なし。余はたゞかゝる現象を見て、南方荆楚の思想の如何に理想的なるかを知り、その架空なる想像に長ずるを知るのみ。蓋し老子の老耳なるはまた疑なしと雖も或は太史儵、老萊子の二者を以て老耳と同人なりとなす。然とも老子の外に老萊子なるものありしは史記及び漢書(藝文志)之を證すべく、また老子の孔子前一輩なりしは史記(仲尼列傳)禮記之を證して餘あり。而して太史儵は孔子の後百二十九年に世に出てたるもの自ら別人に屬す。想ふにかゝる説をなすものは神仙家者流が老子道を修めて長壽となすに因するものなり。固より信ずるに足るべきなし。

老子は周に事へて藏室の史柱下の史となる。周官を案するに曰く、史官主三皇五帝書と。史は實に當時の識者なり。孔子の周に遊ぶ禮を老子に問ふ。その言禮記曾子問に具す。史記はその消息を傳へて(孔子)周に適き禮を老子に問ふ。既反りて弟子益進むと。老子の學殖以て見るべし。彼はまかく古來北方聖主賢臣の言と事とに通じ、彼はまかく古來北方聖主賢臣の遺制たる禮に達し。然ともその

南人理想的の傾向を享けたる頭腦は北方的規矩準繩に局促する能はず。加ふるに當時古代開化の集成なる周代繁文縟禮の弊に激せられたる結果は、孔子の禮を問はんとするに答へて子所言者、其人與骨皆已朽矣。獨其言在耳。と曰ひ、北方聖賢の道なるものを罵倒して

大道廢有仁義、慧知出有大義、六親不和有孝慈、國家昏亂有忠臣 (老子十八)
といひ、また

絕聖棄智、民利百倍、絕仁絕義、民復孝慈、絕巧棄利、盜賊無有 (老子十九)

といふ。彼の理想的なる大古順朴なる無爲の風を夢想し、後世開化せる有爲の俗を嫌惡す。されば有爲の度によりて諸徳を上下して

失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、夫禮者、忠信之薄而亂之首、前識者道之華而愚之始。

といへり。その禮を以て忠信の薄、亂の首となし、智を以て道の華、愚の始となし、最も之を賤するは北方思想の規矩準繩を重んずると正に相反せるを見るべし。而して楚人の想像力に富むや、老子に於ても亦た表はれ、その三皇五帝の智識に富

む之を基礎として無爲の世界を描出して、

小國寡民使有什伯人之器而不用使民重死而不遠徙雖有舟輿無所乘之雖有甲兵無所陳之使民復結繩而用之甘其食美其服安其居樂其居隣國相望雞犬之聲相聞民至老死不相往來、(八十章)

といひ、また功成事遂、百姓皆謂我自然(十七章)といふ是れ老子の理想世界なり。日出而作、日入而息、鑿井而飲、畊田而食、帝力何有於我乎と咏せしは老子の理想の本づきしものなるべく、桃源の如き、蓬萊瀛州の如き、はた神仙の如きまた然り。老子の哲學に根せる理想が支那の詩人に及ぼしたる感化の如何に大なりしかは後に至りて益、明なるべし。

老子の理想に馳騁して自ら莊子の所謂北方の聖人(孔子)の規矩準繩を發見するに汲々たりしと異なるは道につきて兩者の見解を異にせるを見ても明なるべし。孔子の所謂道は人間心身行動の規矩準繩にして老子の所謂道は萬物開發の本源なり。蓋し支那に於てもまた自ら天地開闢説あり。易は即ちその遺なり。其大極より二氣の分出を説き、二氣より四象の分出を説くも決して物質の分出を説く

にはあらざるが如し。この邊の觀念頗る明瞭を欠くと雖も全射の傾向より推せばその所謂氣は物質にあらざして一種の力なるが如し。想ふに易はもと天地開闢の說に本づくが故に當初に於ては、或は物質も大極より分出せしものとの思想ありしならんも、周人實用的思想を以て之を解釋するに至りて物質分出の側は自然に委棄せられ、力及び力の働くべき規則の側のみ發達したりしならん。孔子に至りて此傾向は益、明白較著となり、寧ろ力より氣力の動くべき規則即ち道を發明するにのみその精神を用ひたり。是に於て易は益、天人行動の規則を説示するものとなりぬ。老子の哲學の本據たる道といへどもまた同じく天地開闢の說に出でその所謂道とは

有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名字之、曰道、強爲之名曰天、

なるもの是なり。而してその道より萬物の分出を説きて

道生一、一生二、二生三、三生萬物、(四十二章)

といへるは、易と同じく開闢の說にして、易に説くところよりは一層高遠なり。後

世大極即ち無極の説の如き老子に出でしものなり。列子の天瑞編に

有大易、有大初、有大始、有大素、太易者、夫見氣也、大初者、氣之始也、大始者、形之始也、太素者、質之始也

とへる、また莊子の

有始也者、有未始有始也者、有未始有夫未始有始也者、(齊物論)

といへる皆な老子と同じく、從て易と同じく、天地開闢の説に出でたるものなり。而してその説くところ孔子のと異なり、道を以て萬物の本源としまた本體とす。

老子は人をして此道なるものを昧せしめ、次て無爲ならしめんとするなり。一切人爲的の規矩準繩を蛇蝎視するなり。南方思想の理想的傾向は此く老子の哲學に於て幽玄の位置に達したり。

南人の理想的傾向を有し、兼て想像力に富める、己に老子によりて發揮せられたること此の如し。而して老子は實に頭腦に於て絶世の文學者たるのみならず、手腕に於ても亦た居然たる文學者なり。史記はいふ、周に居る久し、周の衰へたるを見て、迺ち去て關に至る。關の令尹喜亦た隱君子なり。老子に謂て曰く、子將に隱れ

んとす。疆て我が爲めに書を著せと。是に於て老子迺ち書上下篇を著し、道德の意を言ふ五千餘言にして去り、終るところを知るなしと。書上下篇とは即ち今に傳はる老子二篇なり。先秦諸子の著作中後人の摻入附益少なく、殆ど著者の眞面目を存するもの孟子荀子等と共に老子その一なり。固より老子と雖も後世流傳の際、誤寫訛謄相互に轉輾して數種の異を生じたれども、作者の眞意を損ずるに至らず。また一ニク所の脱落増入せる節なきにあらざると信ぜらるゝも、他の諸子の如く眞贋混淆してたゞその一部のみ信ずべきとは自ら異なるものあり。今本上下二篇に分ちまた幾多の章を分つ皆な後人老子の意を推し讀者に領得の便を與へしのみ。

老子の文字の簡奥なる、明の李于鱗は文字少なくて意味多きものに論語孫子と共に老子を挙げ、宋の李性學は以爲らく、

老子、孫武子、一句一理、如申、八寶、珍珠、間錯而不斷

と、實に然り。而して史公は老子を贊して微妙難誦といひ、又た曰く老子深遠といふ。老子は微妙深遠の哲理を藏するに微妙深遠の文字を以てしたり。而してそ

の簡奥なるその文全く絶句的なり。一句一理を具し、知言格言の累々として堆をなすが如し。老子五千餘言一文をなす。而して毎句また別に知言格言として獨立し得へし。已に人口に膾炙せる大器晚成の如き、大姦似忠の如き、天網恢々疎而不失の如き老子中に於て決して珍とするに足らず。天下之至柔、馳騁天下之至堅の如き後ち莊子秋水篇中風喻の一段となり、又た淮南子原道訓中水喻の一段となり、聖人生大盜起の如き莊子胠篋篇の妙喻となる。

老子の文の古奥なる、動詞少なく、形容詞少なく、また助字少なし。されば譬喩を用ゆるにも、如し、似たり等の如き助字を用ひず、大抵渾喩を以てやる。無名萬物之母といひ、玄之又玄、衆妙之門といひ、知其雄、知其雌、爲天下谷といひ、道者萬物之奥、善人之寶といひ、天地不仁、以萬物爲芻狗といひ、是の如きの例枚舉に暇あらず。此等は皆に文字をして簡潔ならしむるのみならず、兼て古奥ならしむるものなり。上世抽象的文字に乏しく有形なる物の名を借りて無形なる想の符とせし習慣は此の如き表明に對して益、古奥の感を深からしむ。而して具體的表明の結果として哲學的談理を詩的たらしむ。支那古代の書に於て易最も此風あり。現時世俗の

格言に於ても、多く此の如き譬喩を用ひたり。蓋し簡約にして記臆し易く、兼て趣味に富ましむるが故なるべし。

老子は記臆に便ならしめんが爲めにあらゆる手段を盡したり。簡約はその一法たり。而してまた多く押韻の語を用ひたり。是れまた記誦に便ならしむると雖も古奥ならしむるの効あり。五千言中肝要の語句は大抵押韻せるを見る。今その例を擧ぐれば

常無欲以觀其妙。常有欲以觀其徼。(讀)

有無相生。難易相成。長短相形。高下相傾。(庚)

谷神不死。是謂玄牝。玄牝之門。是爲天地根。綿々若存。用之不勤。(元眞通韻)

視之不見。名曰夷。聽之不聞。名曰希。搏之不得。名曰微。此三者不可致詰。故混而爲一。

(實)大道廢。有仁義。智慧出。有大僞。(眞)

唯之與阿。相去幾何。(歌)善之與惡。相去何若。(藥)

知其自守其黑。爲天下式。爲天下式。常德不惑。復歸于無極。知其榮。守其辱。爲天下谷。爲

天下谷。常德乃足。復歸于樸。(沃職通韻)

天得一以清。地得一以寧。神得一以靈。谷得一以盈。萬物得一以生。侯王得一以爲天下正。(庚)

上德不德。是以有德。下德不失德。是以無德。(職)

是れその顯著なるものにすぎず。先秦の書韻を用ゆるもの少なからず。然とも老子と易との如く甚たしきものなし。

老子また多く對句を用ゆ。上に引けるところによりても亦た之を知るに難からじ。皆な是れ記誦の便あらしめんが爲めにして、老子の文の簡勁古奥なるは、渾喻を用ひ、韻を用ひたる對句を用ゆるの三特質を具ふるによる。

(四)

道家の書今に存するもの老子に次きて文子關尹子あり。漢志道家に文子九篇あり。本註に曰く、老子の弟子なり。孔子と時を並ぶ、周平生問ふと稱す、依託せるものに似たりと。唐志にいふ、李暹註して十二篇となすと。今の篇次と同じ。文子の姓名今知る可らず、其書また駁書なり。信ず可らず。關尹子は即ち關の令尹喜なるもの、書なりと稱す。喜字は公度(釋姓)老子と時を同じくす。蓋し秦人なり。

終南樓觀はその故居なりといふ。周末の隱君子にして老子五千言は聃が喜の爲めに著せしもの、喜また老子の道を奉ず。漢志を案ずるに關尹子九篇あり。而して隋志唐志皆な著録せず。則ちその佚すること已に久しきなり。南宋の時、始めて永嘉孫定の家より出づ。定果していづこより之を得たる。前に劉向の序あり、曰く

蓋公授曹參、參薨書葬、孝武帝時有方士來上淮南王安、秘而不出、向父德治淮南王事、得之。

と。陳振孫以爲らく、始皆依託也。序亦不類、向文と。宋濂また以爲らく、(序)文既與向不類、事亦無據、疑則定之所爲也。間讀其書、以法釋氏及神仙方技家、而藉吾儒言文之と。その書の性質大抵知るべし。四庫全書提要、宋濂の疑則定之所爲也といへるを駁して

然定爲南宋人、而墨莊漫錄載黃庭堅詩、尋師訪道魚千里、已稱用關尹子語、則其書未必出於定、或唐五代間方士解文章者所爲也。

と。濂未だ嘗て關尹子の定に出でたるをいはず。たゞ向の序の定に出でたるに

あらずやと疑へるのみ。然とも或はその唐五代間の方士文章を解するものゝ爲くるところならんといへるは中らずと雖も遠からざる疑なるべし。されば濂のいひけん如く

其文雖峻潔亦頗流於巧刻

るゝは已むを得ざるどころにして、古文今文の辨認ゆ可らざるものあるなり。要するに關尹子は疑書なり。決して先秦文學中に瑣すべきものにあらず。たゞ唐以下の文字として峻潔喜ぶべきものなるのみ。

(五)

列子の書また偽なり。傳ふるところによれば、列子名は禦寇、鄭の人なりといふ。その事蹟頗る茫乎たり。或は列禦寇なるものゝ存在を否定するものすらあり。司馬遷老莊を傳して一言の列子に及ぶものなく、莊子天下篇諸子の學説を述べて列子を擧げず、特に荀子悉く諸子を評してまた列子に及ばず。まことに疑しきものなきにあらず。陳振孫遂に

豈禦寇者其亦所謂鴻蒙列缺者歟。

と極言す。たゞ尸子廣澤篇に列子貴虚といひ、呂氏春秋不次篇にも子列子貴虚の語あり。また戰國策に

史疾爲韓使楚、楚王問曰、客何方所循、曰、治列子圍寇之言。

と見ゆ。されば列子を以て濂濂列缺と同一視するは非ならん。况んや莊子の之を稱する數次に止まらざるをや。

然とも列子の事蹟に至りては概ね寓言のみ。莊子の稱するところ、列子書中に見ゆるところ皆な然らざるなし。劉向叙録いふ、列子鄭人也、與鄭繆公同時と。この叙録の向の作にあらざるは先人既に説あり。その事實の牴牾あるや少なからず。たゞ鄭人たるはやゝ疑ふ可らざるが如し。鄭繆公は孔子の前幾百歳の人なり。之と同時にいふに至りては柳子厚その偽を辨じて餘蘊なし、而して魯穆公の誤となす。然とも列子載するところの孔穿、魏牟は魯穆公の後にあり。然らば則ち又た魯の穆公の誤となす可らざるが如し。王應麟は以爲く、壺丘子林は列子の師なり。呂氏春秋云ふ、子產相鄭、往見壺丘子林、與其弟子坐、必以年と。然らば則ち子產と時を同じくす。然らば孔穿、魏牟は後人の附加とせざる可らず。關尹子、壺丘

子林の弟子より推し、子産、子林と時を同じくし、孔子、子産の後一輩なるより推せば、列子は孔子と殆ど同時の人にして、或は孔子の後一輩の人なるべし。然とも列子の書もと偽なり。依て以て證とすべからずとせば、列子の年代殆ど知る可らざるなり。

列子を傳するもの已に少なし。其の説を是非する者亦た多からず。その學界の位置決して老莊と比肩するに足らざりしが故にあらざや。後世列子の書あり、遂に老莊と並立して道家の宗師と稱するに至る。特に知らず、列子の書は多くは索寇の手になりしものにあらざるを。若し當時已に此の如き書ありしとせば、莊子何そ言及せざる、荀子何そ言及せざる、はた司馬遷何ぞ傳せざる。その書漢志に八篇とあり。今本と合ふ。その偽書なるは古來之をいふもの多し。今その余が意を得たるものを列舉すれば、柳子厚は曰く、其書多増、實非其實と。高似孫は曰く、其書與莊子合者十七章、其間尤有淺近迂僻者、出于後人會萃而成之耳。特に宋景濂の

書本黃老言、決非禦寇所自著、必後人會萃而成者、中載孔穿、魏公子牟及西方聖人之

事、皆出禦寇後、主楊朱力命篇、則爲我之意多、疑即古楊朱書、其未亡者、勳附於此、といへる、四庫全書提要の

又凡稱子某子者、弟子之稱師、非所自稱、此書皆稱子列子、則決爲侍其學者所追記、非禦寇自著、其雜記列子後事、正如莊子記莊子死、管子稱吳王西施、商子稱秦孝公耳、不足怪。

といへる。姚際恒の

意戰國本有其書、或莊子之徒、依託爲之者、但自無多、其餘盡後人所附益也、以莊稱列、則列在莊前、故多取莊書、以入之、其言西方聖人、則眞指佛氏、殆屬明帝後人所附益、無疑。

といへる、殆ど列子の書の性質を盡せり。その禦寇の手に出でざるは疑ふべきものなきが如し。たゞに禦寇の手に出でざるのみならず、一人の筆、一時の書にあらざる。故にその書の何人の著なるやを定むるを得ざるのみならず。何時代の書なるやも亦た定む可らず。然とも大抵林希逸のいひけん如く、その間又た絶到の語あり。決して秦漢以下の作者の及ぶべきところにあらず。後世或はその散佚完

からざるによりて、己の意を雜出し、且つ莊子を增倣して以て之に附益せしものなるべし。四庫全書提要穆天子傳と列子載するところと一々相合するを根據として以爲らく此非劉向之時所僞造、可信確爲秦以前書と。列子の一部は周末に成りしものなるべきもまた周末に於ても顔る晚出のものたるを疑はず。列子の精髓とも稱すべき天瑞篇の如きすらもや、剽竊の迹あるを見る。例せば天瑞篇の骨子ともいふべき有生不生は莊子に出で故有太易有太初の一段は易の乾鑿度の文を襲用し、易と道家の言とを混合せしものなり。乾鑿度は周末漢初出でたるものにして戰國末以來その説盛に世に行はれ特に兩漢に至りて甚だし。されば列子の書は決して戰國末以前のものとなすを得ず。西方有聖人の章の如き漢末魏晉の際に出でたる決して疑ふ可らず。

さればその文字、温厚なるあり、瑰麗なるあり、明媚なるあり、淺俗なるあり、未だ一概に論じ去る可すと雖も大抵柳子厚の其文辭類莊子、而質厚少爲作といへる朱子の平淡疎曠といへると互に相補うて列子の全觀を盡すに足らん。列子の文老子の奧妙なく、また莊子の神變なした、質厚爲作なく平淡疎曠なる愛すべきのみ。洪

邁の書事簡勁宏妙、多出莊子右といひ、宋濂之を承けて書事簡勁宏妙、則知勝於周といひ、王元美が列子與莊子同叙事、而簡勁有力といへる、皆な公平なる批評といふ可らず。たゞ姚際恒か

列子則明媚近人、氣脈降矣。莊之叙事回環鬱勃、不即了了。故爲真古文。列之叙事簡淨有法。是名作家乎。

といへる、以て確論とすべし。固より文學的技能に於て莊列と同列に論ずるは文學者を視るの眼なき徒のみ。

(六)

北方文學の園を出で、南方文學の野に入らば、鳶天に舞ひ、魚淵に躍り、人工なく作爲なく、始めて人界を脱して天然に反りしが如き心地すべし。始めて人間の桎梏を脱して天然の自由を享け得たらんか如き心地すべし。始めて矮屋を出て、天下の廣居に入りたるが如き心地すべし。然ども老子はなほ簡與莊重、端坐して正語す、莊子無町畦の文辭を誦するに至りて這般の心地は益々長ずべきなり。

史の傳ふるところによれば、莊子は蒙の人なり、名は周、嘗て蒙の漆園の吏となると。

蒙とは何れの國に屬せるや、後世頗る異説あり。然ともその正確なる説によれば蒙は宋國の蒙なるが如し。今の河南省歸德府の東北四十里に大蒙城あり、蓋しその地なりといふ。大蒙城の南に小蒙城あり、漆園實に此中にあり。城亦た漆邱と名づく。園の吏となりしは蓋し此漆園なり。然らば周の宋人にして蒙の宋地たるや疑なし。降りて戰國の時に至り、宋王偃凶暴なり。人稱して桀宋といふ。是に於て齊楚魏と謀り、伐て宋を亡ぼし、その地を三分す。蒙の地是に於て魏に屬せり。莊子の出たるは齊宣王の時にして遙に此以前にあり。たゞ蒙は後ち魏に屬せしが故に陸德明の徒、莊周を以て梁人となす。正しといふ可らず。宋子かその語類に於て莊子自是楚人、大抵楚地便多有此様差異底人物、といへるはたゞ莊子の思想感情の自ら南人風なるより臆斷せしものにして、歴史的憑據あるにはあらず。宋は南北の間に夾まる。韓退之はいふ。蓋し夏之學、其後有田子方、子方之後流而爲莊周、故周之書喜稱子方之爲人、と。退之果して何によりたるかを詳にせずと雖も、またあり得べからざるの事にあらず。魏文侯の時、子夏西河に教授す。西河の民、子夏を孔子かと疑ひしといへば、その學盛に魏に行はれしや知るべし。子夏の

弟子に名流多し、田子方またその一なり。蒙と西河と相遠からず、况んや莊子の書中儒學に通せざれば、決して言ひ得ざるの語あるをや。宋また楚と接す。南方荆楚の思想また宋に流入せしならん。莊子蓋し儒を學びて後ち道に歸せしか。然とも莊子の博學なる司馬遷其學無所不闕といふ。彼は道に據り、傍諸子の學に通せしか如し。莊子は史記に梁惠王齊宣王と同時なりと傳ふ。然らば孟子と同時の人なり。而て共に梁に遊べり、而て共に相識らざるが如し。蓋し孟子の足跡たゞ齊魯滕宋大梁の間に止まり、曾て大梁の南に及はず。莊子は終に大梁の北に及はず。是れ相識ざる所以なるか。况んや莊子は所謂尾を途中に曳かんとするものなるをや。莊子の徒傳ふ。曰く

莊子釣於濮水。楚王使大夫二人往先焉。曰願以竟內累矣。莊子持竿不顧曰吾聞楚有神龜、死已三千歲矣。王巾笥而藏之廊堂之上。此龜者寧其死爲留骨而貴乎。其生而曳尾於塗中乎。二大夫曰寧生而曳尾塗中。莊子曰往矣。吾將曳尾於塗中。(秋水)

と。楚王は蓋し楚威王なり。また傳ふ。曰く

惠子相梁。莊子往見之。或謂惠子曰莊子來。欲代子相。於是惠子恐搜於國中。三日三夜。

莊子往見之曰、南方有鳥、其名鷦鷯、子知之乎。夫鷦鷯發於南海、而飛於北海、非梧桐不
止、非練實不食、非醴泉不飲。於是鷦鷯得腐鼠、鷦鷯過之、仰而視之曰、嚇。今子欲次子之梁
國、而嚇我邪。(上同)

と、惠子名は施、宋の人なり。梁惠王に相たり。博學善辯を以て當時に名あり。莊
子天下篇之を評して多方といひ、その書五車といひ、卒に善辯を以て名を爲さんと
すといふ。莊子常に之と辯ず。こゝに引用せる二則の逸話の如き莊子の外篇に
出て莊子の徒の傳ふるところにしてその事實なるや否や未だ容易に判す可らず
と雖も莊子の此の如き人物なりしはその遺言によりて察すべき者あるなり。莊
子は實に空言放語逍遙して世に遊びたるものなり。その書内外雜篇なり。内篇
はその自筆にして外篇雜篇は多くその徒の筆にかゝる。故に眞に莊子を評せん
には主として内篇に依らざる可らずたゞ外篇秋水の一篇頗る深邃、或は莊子の自
筆ならん。

(七)

老子はその思想に於ては出世間的なり。然ともその文字に於ては規矩準繩の以
て律す可きものあり。莊子に至りては啻にその思想の出世間的なるのみならず、
その文學に至りてもまた尋常の法度を脱却せり。莊子は實に全然方外の人なり。
莊子の老子に於けるは猶ほ孟子の孔子に於けるが如し。老子は孔子と共に春秋
の人なり。温然迫らず。莊子は孟子と共に戰國の人なり。鋒芒頗る鋭なり。老
子は出世間的の思想を有し、また頗る厭世的の思想を有し、

吾有大患、爲吾有身、吾既無身、而有何患。

といふに至る、然ともなほ救世に意あり、世を擧げて太古の朴に反さんとす。故に政
治を説き道徳に談ず。莊子に至りては人間の運命に想到し、多く己を淑するに傾
く。彼は老子の厭世的思想を敷衍して曰く

予惡乎知、悅生之非、或耶、予惡乎知、惡死之非、弱喪而不知、歸者耶、麗之姬、艾封人之子
也、晉國之始得之也、涕泣霑襟、及其至於王所、與王同筐牀、食芻豢、而後悔其泣也、予惡
乎知、夫死者、不悔其始之戰、生乎。(論齊物)

と、又た

髑髏謂莊子曰、子欲死之說乎、死無君於上、無臣於下、又無四時之事、從然以天地爲春

秋。雖南面王樂不能過也。莊子不信曰。吾使司命復生子。形爲子。骨肉肌膚。反子父母妻
子。閭里知識。子欲之乎。髑髏深腹。臆曰。吾安能棄南面王樂。而復爲人間之勞乎。(樂至
篇)

といふ。彼は人間を以て適に來り適去るとなし。死を以て自然の順となし。天の縣
解となし。薪盡きて火自ら盡くるに譬へた

夫大塊載我以形。勞我以生。佚我以老。息我以死(大宗
師)

といひ尋て

今大冶鑄金。金踴躍曰。我且必爲鑊錙。大冶必以爲不祥之金。今一犯人之形。而曰。人耳
人耳。夫造化者必以爲不祥之人。今一以天地爲大鑪。以造化爲大冶。惡乎往而不可哉
といふ。彼は實に生を以て附贅懸疣となし。死を以て決疣潰癰となす。彼は生を
以て偶然とし。死を以て偶然とす。生るゝ所以を知らず。死する所以を知らず。化
に順うて物となり。以てその知らざるところの己を化するを待たんとするなり。
而して人間の有爲を嫌ひ。自然の無爲を欲するが故に生よりは寧ろ死を欲するな
り。蓋し彼は人生を以て夢とするなり。その齊物論に於て

夢飲酒者且而哭泣。夢哭泣者且而田獵。方其夢也。不知其夢也。夢之中又占其夢焉。覺
而後知其夢也。且有大覺而後知此大夢也。而愚者自以爲覺。竊々然知之。君乎牧乎。固
哉丘也。與汝皆夢也。予謂汝夢亦夢也。

といひまた

昔者莊周夢爲蝴蝶。栩栩然蝴蝶也。自喻適志。與不知周也。俄然覺。則遽々然周也。不知
周之夢爲蝴蝶。與蝴蝶之夢爲周。與周與蝴蝶。則必有分矣。此之謂物化。

といふ。彼は人世を以て一場の夢幻となし。芒乎として何に之き忽乎として何に
適くべきやを知らず。たゞ化に従て變じて常なきを知るが故にこの有形有爲の
沈濁界を脱し。無形無爲の自由界に入り。天地と並び神明と往かんとす。されば彼
は人間世に重を置くものにあらず。たゞ塊然生れて人の形を犯し。人と群する以
上は人に離るゝを得ず。故に人間世を説く。然とも人間の變故。世々宜を異にす。
唯無心にして自ら用ひざるもの。能く變の適くところに隨てその累を荷はずとな
すにすぎず。彼また應帝王に於て無にして自化に任するもの。帝王たるべきを説
くも。彼は寧ろ世間を離れて不生不死の神明と友たらんとするなり。老子に比す

れは頗る世を輕すること甚だしく獨を淑すること甚たし。

(八)

莊子は老子に比すれば人間の考究に近づきのみならず、また身を淑するに傾けり。而して變化無常を説き死生を説き深く人間の運命に想到せるは老子に比して一步を進めたるものと謂ふべし。その化に應じ物を脱し上造物者と遊び下死生を外にし終始なきものを友とし是非を一にし差別を無し無何有の郷に彷徨し廣莫の野に逍遙せんとするは老子の救世に意あるとや、異なるものなり。されば莊子の道を躰せる神人を描出せるは老子の聖人を描出せるよりも一層人を離れて神に近づけり曰く

藐姑射之山有神人居焉。肌膚若冰雪。淖約若處子。不食五穀。吸風飲露。乘雲氣。御飛龍。而遊乎四海之外。其神凝。使物不疵癘。而年穀孰。(逍遙)

と而してこの人や物これを傷ふなく大浸天に替れども溺れず。大旱に金石流れ土山焦るも熱せず。その塵垢糝糠も猶は堯舜を陶鑄するに足るものとなすなり。また齊物論に於て至人を狀して

至人神矣。大澤焚而不能熱。河漢沍而不能寒。疾雷破山。風振海。不能驚。若然者。乘雲氣。騎日月。而遊乎四海之外。死生無變於己。

といふ。彼は理想を現化して神人を説き至人を説く。而してその宗教的傾向は後世遂に道教を胚胎し庸俗の徒莊子の寓言を以て實際になし得べしとなし遂に神仙形解飛昇の説方士練丹葆形の術を説くに至りぬ。

(九)

莊子が北方の聖人なるものを詆訾するや至れり。漁父盜跖胙篋等は外篇にあり實に莊子の言にあらずとせんも司馬遷の當世宿學と雖も自ら解免する能はずといへりしは蓋し事實ならむ。その要老子の外に出ですと雖も北方細墨に區々たるを罵倒し笑倒するは轉た痛快を極む。その所謂神人なるものを説きて

是其塵垢糝糠。猶將陶鑄堯舜者也。

といひその相愛を笑ひて

泉涸魚相與處於陸。相响以濕。相濡以沫。不如相忘於江湖。(大宗)

といひまた許由と意而子との問答に擬し許由の意而子に告ぐるの言として仁義

是非を罵りて曰く、

夫堯已黜汝以仁義、而剗汝以是非矣(上同)

と。また無趾の老聃に語るに擬して孔子を罵りて

孔丘之於至人、其未邪。彼何實實以學于子爲。且斲以諷詭、幻怪之名聞。不知至人之以是爲己、桎梏邪。

といひ、老聃の口をかりて、

胡不直使彼以死生爲一條、以不可爲一貫者、解其桎梏、其可乎

といひ、再び無趾の言として、

天刑之、何可解。(徳充)

といふ。また實に孔子を以て天の戮民となせりき。此等はたゞ引用に便なる二三の例にすぎず。若し夫れ去て莊子を通讀するの勞を執らば、なほ一層の激語を發見するに難からざるべし。而して彼が詆訾に巧なるは、此等の零碎なる語句の中に於ても、瞥見するに足るものあらんか。

(十)

而して莊子がかゝる無町畦なる思想を寓するに無町畦なる文字を以てす。天下篇の筆者は莊子を概して、謬悠の說、荒唐の言、無端崖の辭といふ。その想に於ても形に於ても無町畦なる、また

其書雖瓌璋而連犴無傷也、其辭雖參差而諷詭可觀。

といふ瓌璋なれば世を驚かし俗を駭かし易し。連犴とは宛轉の貌なり。宛轉にして情に入り理に入る。故に瓌璋と雖も傷なき也。參差なれば雜亂章なきに至り易し。諷詭は奇幻也、奇幻滑稽にして變見百出す。故に參差と雖も觀るべき也。莊子は想に於て驚俗駭世的なり。世の認めて善とし美とし眞とせるものを彼は惡とし醜とし僞とす。全然人の常情に反せり。彼の天を尙びて人を卑む、自然を尙びて人を爲を卑む、自ら人の大人は天の小人にして人の小人は天の大人なりといふ。世の認めて聖賢哲王とするところのもの、皆なその詆訾を免れざるなり。形に於て亦た之に準ず。ことさらに奇を弄し、ことさらに幻を翫び、正言せば何の奇もなく何の幻もなきことを一たび莊子の筆に入らば、奇幻百出端睨す可らざるの趣を呈す。その始なるものを、説き無なるものを説くも

有始也者。有未始有始也者。有無也者。有未始有無也者。有未始有夫未始有始也者。有無也者。有未始有無也者。有未始有夫未始有無也者。俄而有無矣。而未始有無之果孰無孰有也。今我則已有謂矣。而未始知吾所謂之其果有謂乎。其果無謂乎。

といふ。是れ單に一例にすぎず。その他此の如き例は枚舉するに暇あらず。齊物論は莊子の大手筆とするところ、その讀みがたぐ、解しがたきは皆な此の如くことさらに奇を弄し、幻を翫び、ことさらに奥妙をてらふが故のみ。道より之を見れば是非なく不可なく、生死なく、萬物皆な一なるを説き、儒といひ、墨といひ、はた衆學派の互に他を非とし、自を是とするの謂なきを説くのみ。

而して思想の豊富なる詞藻の豊富なる混々として流れて盡きざる泉の如く地の高下に順ひ或は左し、或は右し、紆餘曲折一定の行程なきが如く、また石に激し、崖に懸り、時に千里の長江となり、時に萬丈の飛瀑となり、潭となり、渦となる、千態萬狀窮極なく、終に規矩の律すべきなきが如し。而して自から低につき海に朝宗す。司馬遷は之れを評して洗洋自恣適己といふ、されば參差として亂雜章なきが如きは固よりなり。而してその間諷詠觀るべし。今その一例を擧ぐれば、人籟、地籟、天籟

を説きて

子綦曰夫大塊噫氣、其名爲風。是惟無作。作則萬竅怒呿、而獨不聞之。參寥乎。山林之畏佳、大木百圍之竅穴、似鼻、似口、似耳、似枅、似圈、似臼、似洼、者、似汚、者、激、者、謔、者、叱、者、吸、者、叫、者、譟、者、實、者、咬、者、前者唱于、而隨者唱。鳴、冷風則小和、飄風則大和、厲風濟、則衆竅爲虛、而獨不見之調、調之刁刁乎。子游曰、地籟則衆竅是已。人籟則比竹是已。敢問天籟。子綦曰、夫吹萬不同、而使、其自己也。咸其自取、怒者、其誰邪。(齊物論)
といへるが如き是なり。その亂雜章なきが如きは莊子全篇皆な然り。奇幻滑稽また毎篇至るところに雜出す。

(十一)

莊子の常識に反する想、不規則不一致なる調子は到底人間界の音に似ず。その文辭を誦すれば人間の常識を以て解すべからざる鬼窟の音楽をきくが如し。而して何となく人間以上の妙音をきくが如き心地す。彼は正語せず、絶えず形容比喩を用ゆ。たゞ形容比喩を用ゆるのみならず。その全篇率ね寓言なり。その豊腴にして溢るゝ計りなる頭腦より迸り出づる熱情は急潮の如く泥塗の下へも芥天

の上へも容捨なく奔騰するなり。而してその絶大なる理想、その激楚なる感情は毎に寓言を以て之を遁るなり。天下篇の筆者は以天下爲沈濁不可與莊語、以卮言爲曼衍、以重言爲眞、以寓言爲廣と云ふ。彼は抽象的なる道を狀し、道を昧する神人を狀し、至人を狀する毎に理想を現化して具體的となすなり。彼は凡ての哲學的談理を化して全然具體的事實となす。その説くところ正面より之を觀れば、皆な説話なり、議論にあらず。而して裏面より之を觀れば皆な議論なり、説話にあらず。而してその説話の材殆ど選ぶところなきなり。彼は天地萬物を以て盡くその材となすなり。人は聖王より兀者に至り、物は動植金石土芥の屬皆なその藥籠中のものとなる。而してその人と物とを問はず、一たび莊子の筆に入らば土砂もまた黄金と化し、氈履もまた錦繡と化す。彼は思想に於て神仙たるのみならず、その文學的手腕に於ても神仙たるなり。今その一例を示さんか、

且夫水之積也、不厚則負大舟也、無力覆杯水於坳堂之上、則芥爲之舟、置杯焉則膠、水淺而舟大也。(遊道)

子見夫睡者乎、噴則大者如珠、小者如霧、雜而下者不可勝數也。(水秋)

といへるが如き、將た道の何處にも存するを形容して

東郭子問於莊子曰、所謂道惡乎在。莊子曰、無所不在。東郭子曰、期而後可。莊子曰、在螻蟻、曰何其下邪。曰在稊稗。曰何其愈下邪。曰在瓦甓。曰何其愈甚邪。曰在屎溺。東郭子不應。(知北遊)

といへるが如く、その譬喩の材として如何なる卑汚なるものも、皆なその藥籠中のものとなし、砂を化して金となすなり。而して莊子はこの事を以て直ちに神人を狀するなり。彼は最高最卑なるものを採て皆なその材となすなり。また去てその大小を語るを見よ。開卷逍遙遊の冒頭に曰く、

北冥有魚、其名爲鯢、鯢之大不知其幾千里也。化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。是鳥也、海運則將徙於南冥。南冥者、天池也。

と。而して齊諧の言を引きて、鵬の南冥に徙るの狀を記して、水に擊つこと三千里、扶搖を排て上るもの九萬里、去て六月を以て息ふものなりと。その他五百歳を以て春となし、五百歳を以て秋となせる冥靈を擧げ、八千歳を以て春となし、八千歳を以て秋となすの大椿を引き、大瓠を語り、大樹を語り、大牛を語る、皆なその妙を極盡

す。後世李白が白髮三千丈もまた多く珍とするに足らず。而してその小を語るや、決起して飛て楡枋を突き、時に至らずして地に投ずる小蟬と小鳩。騰飛して上り、數仞にすぎずして下り、蓬蒿の間に翔翔する斥鷃。晦朔を知らざる朝菌、春秋を知らざる蟪蛄。深林に巢ふも一枝にすぎざる鷦鷯。河に飲むも滿腹にすぎざる偃鼠等の如き、皆之を狀して活動飛躍す。その高を極るや、高を極め、その卑を語るや、卑を極め、その大を語るや、大を極め、その小を語るや、小を語り、具さにその態を盡す。眞個天地、萬象は莊子が筆に上りて、その道を説明するの材となれり。

(十二)

莊子の言は、大なり。その大を説くに妙なるは、鵬を語り、鯢を語りし一節に於ても明なり、而して彼の思想は、たゞに大なるのみならず、また極めて密なり。彼の筆力は、たゞに大を描くに妙なるのみならず、また極めて細なり。その思想の密なるは、惠子と濠上觀魚の爭論に於ても、その一端を見るべく、その筆力の細なるは、文惠君に對ふる庖丁の言を以ても、その一斑を窺ふべし。庖丁文惠君の爲めに牛を解く。手の觸るゝところ、肩の倚るところ、足の履むところ、膝の踏るところ、悉然たり、憮然

たり。刀を奏ること、騞然として、樂音に中らざることなし。柔林の舞に介ひ、乃ち經首の會に中る。文惠君曰く、譎善なるかな。技蓋し此に至るかど。庖丁刀を釋て、對て曰く、

臣之所好者道也。進乎技矣。始臣之解牛之時、所見無非牛者。三年之後、未嘗見全牛也。方今之時、臣以神遇、而不以目視。官知止而神欲行、依乎天理、批大郤、導大窾、因其固然。技經肯綮之未嘗、而況大軀乎。良庖歲更刀、割也。族庖月更刀、折也。今臣之刀十九年矣。所解數千牛矣。刀若新發於硎。彼節者有間、而刀若無厚、以無厚入有間、恢々乎其於遊、刃必有餘地矣。是以十九年而刀刃若新發於硎。雖然、每至族、吾見其難爲、怵然爲戒。視爲止行、爲遲、動刀甚微。騞然已解、如土委地。提刀而立、爲之四顧、爲之躊躇、滿志、善刀而藏之。
(養生主)

と。若し夫れ逍遙遊を讀めば、その意物その分に當り、逍遙して遊ぶにありと雖も、人誰かその大言空語に驚かざらん。齊物論を讀めば、その意、道より之を觀れば、彼我一なるを説きて、物論を齊しくするにありと雖も、飛瀑懸り、萬雷轟くにその耳を聳すべし。而して一たび讀みて、養生主に入れば、細言密語かねて、濠をすきて、淵と

なり雷收りて光風吹くの態あるべし。莊子の筆は大に宜しく、小に宜しく、高に宜しく、卑によろしく、粗言し、また細語す。彼の筆は殆ど萬能なり。

(十三)

余はいふ、莊子の筆は殆ど萬能なりと。余はたい高卑大小の間に於てしかいふのみ。彼の文には缺點あり、しかも大なる缺點あり、莊子をして莊子たらしむる缺點あり。彼は全然、世を醜弄し、人を醜弄し、到底共に莊語すべからずとなす。彼は所謂卮言をなして之を戯るゝのみ。愚弄し、嘲笑し、罵詈す。愚弄、嘲笑、罵詈の裏面人生に對する深憂あり、萬斛の涙ありと雖も、彼終に正言せざるなり。已に正言せず、その文の莊重ならざるは固よりそのところなり。彼が大宗師に於て、

夫道有情有信、無爲無形、可傳而不可受、可得而不可見。自本自根、未有天地、自古以固存。神鬼神帝、生天生地。在大極之先、不爲高、在六極之下、不爲深、先天地生、而不爲久。長於上古、而不爲老、狶韋氏得之以繫天地、伏羲得之以繫氣母、維斗得之終古不忒、日月得之終古不息、堪坏得之以襲崑崙、馮夷得之以遊大川、肩吾得之以處大山、黃帝得之以登雲天、顓頊得之以處玄宮、禺強得之立乎北極、西王母得之坐乎少廣、莫知其始、

莫知其終。彭祖得之上、及有虞、下及五伯、傅說得之以相武丁、奄有天下、乘東維、騎箕尾、而比於列星。

といへるが如き光焰萬丈なるのみならず、莊子中に於ては頗る莊語に屬す。然とも此等はその穢に見ゆるところにして、多くは滑稽諧謔のみ。

彼の奇想は天外より落つ。而して人間中より出でざるなり。その道を以て螻蟻にあり、稗釋にあり、瓦甓にあり、屎溺にありといふの當に人を驚かすのみならず、天運篇に於て商の太宰蕩なるもの仁を莊子に問ふ、莊子曰く、虎狼仁也といへるの益々人を驚かすに足るべきものあり。而してその何の謂ぞやと曰ふに對へて父子相親、何爲不仁といふに至りて益々その常を變となし、正を奇となすの手腕に驚くべし。彼が描くところ皆な奇なり、正と雖も彼の筆に入らば奇となりて現はるゝなり。而して特に奇なる材を擇ぶ。木は不材の木なり、人は無用の人なり。徳充符に於ける徳充てりとせざるもの兀者にあらざれば醜を以て天下を駭かすの人なり。想奇なり、筆奇なり、材また奇なるもの多し。而して終に平正少なし。此く滑稽にして莊重ならず、奇幻にして平正ならざるは莊子の莊子たるどころに

してまた莊子の南人なる所なり。

(十四)

莊子は寓言を用ひ、重言を用ひ、卮言を用ゆるのみならず、また多く事物を人に擬し、之をして談話せしめ、之をして行動せしむ。莊子より觀れば、彼れ周の蝴蝶たるや、蝴蝶の周たるやを知らざるなり。その事物を以て人らしく語言し行動せしめん、に何の憚るところあらん。擬人法は支那文學史上實に始めて莊子に至りて多く用ゐらるゝに至りぬ。彼は道を人に擬し、鬼とし、神とするのみならず、その理想を人とするのみならず、動植を人とし、事物を人とす。今試に事物を人に擬したる一例を挙げんに、金跗躑曰、我且必爲鏡鄒、といへる。前に已に之を引けり、女偶が南伯子葵の道をいづくに聞けりやと問ふに答へて

聞諸副墨之子、副墨之子、聞諸洛誦之孫、洛誦之孫、聞之瞻明、瞻明聞之聾許、聾許聞之需後、需後聞之於謳、於謳聞之玄冥、玄冥聞之參寥、參寥聞之疑始。(大宗師)

といへるが如き、またその例とすべし。而して動植を人に擬したるが如き枚舉に暇あらず。已に開卷第一道遊遊に於て、蝴蝶、鷓鴣、笑之曰、我決起云々といへり。特

に秋水篇に就て

夔憐蜺。蜺憐蛇。蛇憐風。風憐目。目憐心。夔謂蜺曰、吾以一足吟蹕而行、子無如矣。今子之使衆足、獨奈何。蜺曰、不然。子不見夫睡者乎。噴則大者如珠、小者如霧、雜而下者、不可勝數也。今予動吾天機、而不知其所以然。蜺謂蛇曰、吾以衆足行、而不及子之無足、何也。蛇曰、夫天機之所動、何可易邪。吾何用足哉。蛇謂風曰、予動吾脊脅而行、則有似也。今子蓬々然起於北海、蓬々然而入於南海、而似無有、何也。風曰、然。予蓬々然起於北海、而入於南海也。然而指我則勝我、指我亦勝我。雖然、夫折大木、蜚大屋者、惟我能也。故以衆小不勝爲大勝也。爲大勝者、惟聖人能之。

といへるが如き、はた抽象的觀念を現化して人に擬したるには

南海之帝爲儻、北海之帝爲忽、中央之帝爲渾沌。儻與忽時相與遇於渾沌之地、渾沌待之甚善。儻與忽謀報渾沌之德。曰、人皆有七竅、以視聽食息。此獨無有、嘗試鑿之。日鑿一竅。七日而渾沌死。(應帝王)

といへるが如き、特にその顯著なるものなり。

(十五)

彼は抽象的理想を化して具體的事實となす。而してその寓言はもとその人とその事となし、空に從て蕪撰す。重言はもと古人の事と言とにあらざ、而してその事と言とを以て之に屬す。卮言は口に隨て出て是非を論せず。而して天地萬象を以てその材となし、殆ど擇ぶところなし、一事一物、之を論じ、之を寫すに皆な原あり、委あり、鬚眉悉く張り、躍々として出でんと欲せざるなし。

但しこゝに注意せざる可らざるものあり。その歴史的影響、地理的感化はなり。蓋し孟子と莊子とは共に戰國時代に出で、儒と道との別こそあれ、その學者としての位置よりいふも、文士としての位置よりいふも頗る相似たるものあり。孟子の北方的剛毅は莊子の南方的放縱と互に相映帶し、孔子の執禮は戰國に至りて孟子となり、老子の賤禮は戰國に至りて莊子となる。孔子は山の如く巍然として高し。老子は海の如く汪洋として深し。戰國人事の狂風一たび起りて孟子出で、山鳴り谷應へ、莊子出て海激し波起る。而して共にその地理影響を失はざるなり。而して莊子が材を選ぶにもまた南方地理的影響の大なるを見る。彼は多く人事を用ゆ。而して人事と共にまた多く動植のものを用ゆ。その夢に蝴蝶となると

いふ。何ぞ雅趣に富める。螻蛄のその臂を怒らして車輪に當るを以て、任に勝へざるに譬へ、轍迹の水溜にある魚を以て窮にたとへ、魚の陸にありて、泡沫を以て相濡すを以て世路人間の相愛にたとへ、籠中の鳥を以て仁義繩墨の繫縛にたとへ、その他多く動植のものを用ひて文に一段の雅趣を添ゆ。多くを求めず、たゞ逍遙遊の一篇をよめ。大小その分に當りて逍遙する天機を悟り得るのみならず、また天清く氣澄むの日、郊外に逍遙して萬物の各、その時を得て嗜遊するを目睹するの感あるあり。莊子胸中花鳥あり、風月ありと謂ふべし。支那文學に於て天然の美と附加せしものは南方老莊道家の人事を離れて自然に反らんとする思想に出でしに相違なかるべしと雖も、南方天然の風景また與て力なくんばあらざるべし。莊子はまた天然の事物を採りて材となすのみならず、また多く支那古代の神話を採り來りて材となすなり。老子已に太古の朴に反らんとす。然ともなほ抽象的の文字を用ひたり。莊子に至りては具體的に神人を説くなり。古代の神話を採り來りて往々之に寓言す。而して是また多少南人の迷信深く、支那古代の神話を保存したるを資りしにあらざるなからんや。

之を要するに莊子は無町畦なり、想に於ても形に於ても無端厓なり、司馬遷の所謂洗洋自恣なり。而して郭玄の所謂「その書を觀れば超然として自ら以爲らく己に當に崐崙を経て大嶽を涉り、惚恍の庭に遊ぶべし」と復た貪婪の人、進躁の士と雖も暫くもその餘芳を攪り、その溢流を味へば彷彿たるその音影、なほ曠然として忘形自得の懷あるに足る。况んやその遠情を探りて永年を玩ぶものをや。遂に編邈清遐、塵埃を去離して冥極に返るを得ん。而して彼實に奇を以て勝る。若し夫れ南方天然の美に染み、支那古代の神話を資りて之に情を寄するの甚だしきものに至りては遂に屈原に待たざる可らず。

(十六)

春秋戰國の間詩人なし、たゞ一つの屈原あり、賦家として南方に鳴る。蓋し周平王東遷の後禮制盡く壞れ、王者巡狩の如きまたやむ、孟子の所謂王者の迹熄みて詩亡ぶといへるもの是なり。即ち採詩のこどもやみしなり。春秋の時宴會なほ古人の詩を賦して志を言ふ。是れ周時詩教の餘響といふべし。孔子詩を緝して徒に授く。故に之を誦し、之を詠するもの絶えずと雖も終に作者なし。詩はたゞ政治と

教育上の要具となり、國民美感の發露する能はざるに至りぬ。大聖孔子の如きすら詩の政治上に於ける用を説き、また道徳上の用を説き、また多く鳥獸草木の名を識るを説くのみ。諸書に散見するものを集め來らば當時の士大夫また一二の作詩なきにあらずと雖も概して之をなしといふも亦た可なり。

戰國の末に至りて戰亂の餘國土衰亡の怨漸く人心を動かし、荆軻易水の歌となりて燕趙慷慨の風を表し、また屈原の離騷となりて荆楚怨誹の音を發す。但し荆軻は刺客のみ。その歌感激の至情に成ると雖も、終生二句の短歌あるにすぎず、以て詩人となすに足らず。屈原に至りては離騷を首とし、九歌以下二十五篇實に後世辭賦家の祖なり。而してまた辭賦家の魁たり。彼は實に楚文學の爲めに鳴るのみならず戰國文學の爲めに鳴るのみならず、周末文學の爲めに鳴るのみならず、實に辭賦を以て支那文學の爲めに鳴る。汨羅の水萬世流る、而して屈原の流終古絶えざるなり。

屈原名は平、楚と同祖なり。共に顛覆高陽の苗裔なりと稱す。春秋の時楚の武王出づ。尊爵を周に求む。周興へず。遂に僭號して王と稱し始めて郢に都す。是

時子瑕を生む。屈なる地を受けて客卿となる。因て以て氏となす。屈原はその後なり。故に楚に於て離る可らざるの義あるなり。戦國の時懷王に事へて三閔大夫となる。三閔の職王族の三姓(昭、屈、景)を掌る。その譜屬を序し、その賢良を率ゐ、以て國士を厲す。原博聞、疆志、治亂に明に辭令に爛ふ。入りては王と國事を圖議し、以て號令を出し、出ても賓客に接遇し、諸侯に應對す。王甚だ之に任ず。上官大夫之と列を同じくす。寵を争うて心その能を妬む。懷王屈原をして、憲令を造らしむ。屈原草を屬して、藁未だ定らず。上官大夫見て之を奪はんと欲す。原與へず。因て之を讒して曰く、王屈平をして令を爲らしむ。衆知らざるなし。一令出づること、平その功に伐り、曰く、我に非らざれば能く爲くるなしと。王怒て屈平を疎んず。

屈原既に離るべからざるの義あり。詩人の所謂我に翼なし奮飛する能はざるもの是なり。而して王聽聰ならず。讒諂明を蔽ひ、邪曲公を害し、方正容られず。故に憂愁幽思して、戀るところなし。乃ち離騷を作る、司馬遷曰く、離騷者猶離憂也と。憂にかゝるの義なり。王逸之を解して、離は別なり。騷は愁なり。放逐離別中心

愁思の義に取ると。想ふに史公の解是ならむ。况んや逸の離騷に經を附し、經は經なり、直徑を陳ぶといふをや。經は蓋し後世之を尙びて附したるもの、原の知らざるところ。史公之を評して

屈平正道直行、竭忠盡智、以事其君、讒人間之、可謂窮矣、信而見疑、忠而被謗、能無怨乎、
屈平之作離騷、蓋自怨生也。

といふ。まこと離騷は怨の一字を以て之を概すべし。而してその怨や去るべからず、奮飛する能はざるもの、怨なり。三諫して聽かれずば去るべき忠臣の讒に遇うて怨むの怨にあらず、去るべからざる忠臣の讒に遇うて疎せらるゝの怨なり。勞苦倦極天を呼び、疾痛慘怛父母を呼ぶ。憂心煩亂、千斛の怨となりて離騷と化成す。

屈原既に黜けられ、その後秦齊を伐たんと欲す。齊楚と從親す。秦之を思ふ。張儀をして懷王に陷すに利を以てし、齊と絶たしむ。懷王貪にして儀に信じ、遂に齊と絶つ。秦約の如くせず。懷王怒て秦を伐ち大敗し、漢中の地を失ふ。懷王再び國中の兵を發して深く秦に入る。魏きゝて楚を襲ふ、楚兵秦より歸る。而して

齊竟に怒て楚を救はず。尋て秦、漢中の地を割き楚と和せんとす。懷王曰く、地を得るを願はず、願くば張儀を得て甘心せんと張儀自ら楚に入り、詭辯を王の寵姫に設けて去ることを得たり。是時屈原既に疏せられ、復た位に在らず。齊に使して顧反し、懷王を諫めて曰く、何ぞ張儀を殺さるると。懷王悔ひ張儀を追ふ、及ばず。その後諸侯共に楚を撃ち大に之を破る。

時に秦昭王楚と婚す。懷王と會せんと欲す。懷王行かんと欲す。屈原曰く、秦は虎狼の國なり、信ず可らず。行くことなきに如かずと。懷王の稚子子蘭、王に行くを勸む。奈何ぞ秦の勸を絶たんと。懷王卒に行き、秦懷王を留めて地を割かんとを求む。懷王怒て聽かず。亡げて趙へ走る。趙内れず。復た秦へ之を遂に秦に客死す。その子頃襄王立つ。その弟、子蘭を以て令尹となす。楚人既に子蘭を咎む。屈原また既に之を嫉む。放流せらるると雖も、楚國を眷顧し、心を懷王に繫け、反を欲するを忘れず。君の一悟、俗の一改を冀幸するなり。子蘭また上官大夫をして屈原を頃襄王に短せしむ。頃襄王怒て之を遷す。屈原江濱に至り、髪を被りて澤畔に行吟す。顔色憔悴、形容枯槁、漁父の辭を見て知るべし。而して九歌以

下皆な放流の後に成る。而して九章はその汨羅に投せんとするの志を明す。濁濁なる人世は清白なる彼を容れず。悲酸此の如き死を遂げしむ。

(十七)

屈原の性格はその終始を見て明なるべし。孟子は伯夷を評して聖の清なるものとす。屈原はその清に於て實に伯夷の亞流なり。その資性の純潔なる、新に沐するもの、必ず冠を彈き新に浴するもの、必ず衣を振ふか如し、何ぞその察々を以て物の汝々を受けんや、安ぞ能く皓々の白を以て世俗の塵埃を蒙らんや。その獨清獨醒を以て濁世醉人に伍す。何ぞ放たれざるを得んや。何ぞ湘流に赴て江魚の腹中に葬られざるを得んや。伯夷は蕨を首陽山に採り、屈原は沙を汨羅に懐にす。孟子曰く、伯夷は隘しと、我屈原に於てまたいふ。

屈原の清なる、濁濁にして清まらず、蟬翼を重しとし、千金を輕しとし、黃鐘毀棄せられ、瓦釜雷鳴するの世に容らるべきにあらず。屈原の隘なる、到底、滄浪の水清めは以てその纒を洗ひ、濁らは以てその足を濯ふの人にあらず。彼の清は異常なり、彼の隘は異常なり、而して時恰も戰國の末年に當り、世の濁、人の醉、また異常なり。彼の

異常の隘己に泥々として水中の鳧の如く彼と上下する能はず、彼の異常の清、その泥を滌してその波を揚ぐる能はず、その糟を餉ひてその醜を歌る能はずとせば、彼の處すべき途たゞ二あり、曰く隱遯、曰く自殺。

而して彼は遂に隠れ得ざるなり。眞に隠れ得べきものは情の熱灼して、凡ての世俗的繫縛を焚消し、遂に死灰の如くならざる可らず。大隱は市に隠る。たゞ植杖して耕し、荷竿して漁し、山林に獨棲して麋鹿を共とするものを以て眞に隠れ得たりと稱す可らず。屈原は多感なり。その情は熱灼せり。然どもなほ熱灼せるまゝなり。未だ死灰たらざるなり。而して遂に世俗的繫縛を焚消する能はざりき。彼の思想感情は遂に流蕩せんと欲して流蕩する能はざるなり。彼は終世奮飛せんと欲して奮飛する能はざりき。果然彼は遂に懷沙を賦せり、而して

浩浩沅湘兮、分流汨兮、修路幽蔽兮、道遠忽兮、曾陰恒悲兮、永歎慨兮、世既莫吾知兮、人心不可謂兮、懷情抱質兮、獨無匹兮、伯樂既歿兮、驥將焉程兮、人生有命兮、各有所錯兮、定心廣志、余何畏懼兮、世溷不吾知、心不可謂兮、知死不可讓兮、願勿愛兮、明以告君子兮、吾將以爲類兮。

と詠して、寧ろ自殺を擇びき。彼の遺賦皆なその性格の異常なる清及び隘と、世の濁人の醒との衝突を賦せしもの。

(十八)

班固云く、或曰、賦者古詩之流也と。蓋し詩六義あり、賦はその一なり。古詩の所謂賦はその事を敷陳して之を直言するもの是なり、自ら詩の一昧にすぎず。南方賦家の所謂賦は之と異なり。實に六義を兼ねて時に之を出す、古詩の所謂賦の一義を以て律す可らざるなり。而して之を賦といふ、實に事を敷陳して之を直言するもの稍々多きを以てなり。

蓋し三代勢力の及びしところは北方に止まる。而して特に南方に及ばざりし。従て政度に、まれ、風俗に、まれ、人情に、まれ、頗る北方と異なる。且つや詩に必要なる音に於て楚夏頗る分別ありしが如し。荀卿曰く、

人居楚而楚居、夏而夏、非天性也、積靡使然也。

と。左太仲魏都の賦またいふ、
蓋音有楚夏者、土風之乖也。

と。古代に在ては詩は音樂に合せて詠せしもの、南音の調あるもの必ずしも此音に詠して調あらず。蓋し北方古代の詩楚風なきは此を以てにあらずや。單に之を夷として採らざりしとせば、何ぞ秦風ありて楚風なきや。召南漢廣篇の如きは南方の北境の音にして純乎たる南音にあらず。故に之を收めしのみ。然るをこれに顧みず、賦を以て古詩の一義とし、南方の賦の自ら北方の詩と別發達をなせしを知らざるなり。想ふに詩經を以て凡ての詩の本源となさんと欲するか故に此の如き誤謬に陥りしなるべし。

南方の賦もまた南方の散文の如く、周末に至りて世に現はれぬ。屈原に先だちて孔子の時楚狂鳳分の吟あり、自ら南音なり。莊子の書中またく散見す。後ち趙人荀卿楚に官遊して楚音を學び辭賦を作る。その時を考ふるに屈原の前にあり。作るところの五賦、工巧深刻なりと雖も、殆ど詩的價値に乏し。南人にして南方の詩たる辭賦を作り、その英華を發揮せしもの屈原を以て始とすべし。而して支那文學史上恰も散文界に於て老莊の影響の大なるか如く、韻文界に於て偉大なる影響を與へたり。その用語の北方の古詩と異なるのみならず。その章句の長短

自在なるに於てもその韻律の散漫なるに於てもまた頗る北方古詩のや、整然たりと異なれり。孔子は詩の用を説きていふ、多く鳥獸草木の名を識ると。然ども楚辭の天然物を用ひてその材となすに比すればその及ばざること頗る遠し。而して神話を混用するに於てもまた多く北方のに勝る。且つや北方の古詩には遺世的觀念なし。而してこれあるは南方辭賦のみ。是等は皆な地理的影響の詩人に及びし結果にして、自ら北方古詩と南方辭賦とを異ならしめし所以のもの、特に南方辭賦の千紫萬紅、絢爛目を驚かすものあるは遂に楊雄をして

詩人之賦、麗以則、詞人之賦、麗以淫。

といはしむ。眞個詞家は瑰語麗辭に淫するものなり。さすがに屈原は辭を以て意を害せず意を以て辭を遣る。後世摸倣するものに至りては殆ど辭を以て意を遣るの感あらしむ。而して終に屈原の血涙なく、尾原の深意なく、麗辭瑰語を弄びて美を競ひ、艶を争ふ。その極遂に文字の翫弄者たらざるもの寡なきに至り流弊の及びしところ音に韻文のみならず、散文をして駢儷四六たらしむるの端を啓く。

(十九)

史公は離騷を評して蓋自怨生也といふ。信にして疑はれ、忠にして謗らるより生ずるの怨なりといふ。彼は楚家に對して離るべからざるの義あり、而して容れられず。且つや懷王の末路は彼の如く、頃襄王子蘭上官大夫の爲は彼の如く、而して楚の國勢は彼の如し。その怨また尋常忠臣の怨にあらざるなり。史公また評していふ。

國風好色而不淫。小雅怨誹而不亂。若離騷者可謂兼之矣。上稱帝嚳、下道齊桓、中述湯武、以刺世事、明道德之廣崇、治亂之條貫、靡不畢見。其文約、其辭微、其志潔、其行廉、其稱之小而其指極大、舉類迥而見義遠。其志潔、故其稱物芳、其行廉、故死而不容。自疎濯淖、污泥之中、蟬蛻于濁穢、以浮游塵埃之外、不獲世之滋后、儼然泥而不滓者也。推此志也、雖與日月爭光可也。

と。而してその思を構へ文を遣る、王逸のいひけん如く、「詩に依り興を取り、類を引き譬諭す。故に善鳥香草以て忠貞に配し、惡禽臭物以て讒佞に比し、靈修美人以て君に擬し、宓妃佚女以て賢臣に譬へ、虬龍鸞鳳以て君子に託し、その詞温にして雅、其義皎にして朗、凡百君子その清高を慕ひ、その文采を嘉し、その不遇を哀みてその志

を闕まざるなし。』まことに美人を君に比するは詩經詩人に於て既にその傾あり、屈子たゞ之を敷暢せしにすぎず。蓋し上世に在ては美人はたゞ女子のみに用ひしにあらざ、男子にも亦た用ひたり。外観のみに用ひしにあらざ、内心にも亦用ひたり。詩は文王を指して美人といへり。屈子はいふ

日月忽其不淹兮、春與秋其代序、惟草木之零落兮、恐美人之遲暮。(離騷)

と。また思美人の篇あり。美人とは懷王を指すなり。而して男女の關係を以て君臣の間に比し、

曰黃昏以爲期、羌中道而改路、初既與余成言兮、後悔遁而有他、余不難夫離別兮、傷靈修之數化。(離騷)

といふ。懷王の始め己を信任し、中道他志あるを怨むなり。また時臣を女子に比し以てその辭を馳にす。邪臣の正人を忌害するをいひては各興心而嫉妬といひ、衆女嫉余之蛾眉兮、謠諑謂余以善淫といふ。また世の國濁分たゞ好で美を蔽ひて嫉妬するを惡み、その絶大なる想像を馳せて天上に神遊するを狀し、楚國に眷戀してその賢臣なきを悲み、忽反顧以流涕兮、哀高丘之無女と咏じ、續てその遊行女を求

むるの状を咏じて

溘吾遊此春宮兮。折瓊枝以繼佩。及榮華之未落兮。相下女之可詒。吾令豐隆乘雲兮。求宓妃之所在。解佩褱以結言。吾令蹇修以爲理。紛總々其離合兮。忽緯繆其難遷。夕歸次於窮石兮。朝濯髮乎滄盤。保厥美以驕敖兮。日康娛以淫遊。雖信美而無禮兮。來違棄而改求。覽相觀於四極兮。周流乎天余乃下。

といひ、また言を有娥の美女に寄せ、また意を有虞の二妃に寓し、皆な意を得ざるに了る、以て君に遇はざるの懷を述ぶ。而して閨中遠遠にして、哲王また察めざるなり。若しそれ

惟佳人之獨懷兮。折芳椒以自處。增歎歎之嗟嗟兮。獨隱伏而思慮。涕泣交而淒々兮。思不眠以至曙。終長夜之曼々兮。掩此哀而不去。寤從容以周流兮。聊逍遙以恃。傷大息之愍歎兮。氣於邑而不可止。紕思心以爲縲兮。編愁苦以爲膺。

といひ、心踊躍其若湯といふに至りては、移して以て失戀の人の述懐となすべし。たゞ孤子吟而放淚兮。放子出而不還。孰能思而不釋兮。といふに至りて、放流の人の悲吟たるを知るべきのみ。

蓋し詩經詩人に在りては、君を美人に比したりと雖も、未だ屈子の如く多からず。未だ屈子の如く詳ならず。屈子に至りて、その眞意は君臣の際に存すと雖も、美人を描き、戀愛を説くの端開けぬ。而して此の傾向はたゞ名を君を諫むるに假り、その實美人を描き、戀愛を説くを主とするに至る。宋玉等既に然り、漢代武常朝の文學者特に甚だし。而して遂にまた散文に移し、支那に於ける戀愛小説の萌芽たらしむるに至る。その淵源遠し、結果また奇と謂ふべし。想ふにそのこゝに至らしめしもの南方情感に富めるもの、與て大に力あらずんばあらじ。

(十九)

屈子はまた善鳥香草以て忠貞に配し、惡禽臭物以て讒佞に比し、虬龍鸞鳳以て君子に託す。詩に草木禽獸の名多しと雖も、到底楚辭に比すべからず。彼は自然の景物を縱に自在にその材料となし。若しその寓意を除き、楚辭を誦すれば、時に香草香り、臭木雜り、時に美禽飛び、醜鳥翔り、時に虬龍天に昇り、鸞鳳空に舞ひ、荆楚南方の地に逍遙するの感あるべく、また楚地天然物の畧字彙たるべし。而して遂に支那文學に天然の美を注入するの助となりぬ。

特にその香草を以て清白を表するが如き、楚辭至るところに雜見し、その心の潔白を狀しては、扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以爲佩。といひ、また朝搴阰之木蘭、夕攬州之宿莽。といひ、三后の純粹なるもなほ一美に任せず、衆芳を雜用するを狀しては、雜申椒與菌桂兮、豈維糝夫蕙蒨。といひ、衆賢志士の遂にその所を失はんを哀みては、

余既滋蘭之九畹、又樹蕙之百畝。畦留夷與揭車兮、雜杜蘅與芳芷。冀枝葉之峻茂、願竢時乎吾將刈。雖萎絕其亦何傷兮、哀衆芳之蕪穢。

といひ、また上忠信の人を好まず、君子變じて小人となるを狀しては

蘭芷變而不芳兮、荃蕙化而爲茅。何昔日之芳草兮、今直爲此蕭艾也。豈其有他故兮、莫好修之害也。

といひ、その世に困し、神明に託附して水上に居處せんとしては

築室兮水中、葺之兮荷蓋。蓀壁兮紫壇、羽芳椒兮盈堂。桂棟兮蘭橈、辛夷楣兮蒨房。罔薛

荔兮爲帷、擗蕙櫜兮既張。白玉兮爲鎮、疏石蘭兮爲芳。芷葺兮荷屋、綠之兮杜蘅。合百草

兮實庭、建芳馨兮廡門。(九歌 湘夫人)

といふ。その他、朝飲木蘭之墜露、夕餐秋菊之落英。(離騷)といへるが如き、浴蘭湯兮沐

芳(九歌 雲中君)といへるが如き、何ぞそれ清絶なる。靈魂を祭りて、春蘭兮秋菊、長無絶兮終古、といへるが如き、湘夫人を祭りて、嫋々兮秋風、洞庭波兮木葉下、といへるが如き、また何等の好句ぞ。

屈子また史公のいひけん如く、上帝譽を稱し、下齊桓を遣ひ、中湯武を述ぶ。人事を材とするに於てまた盡せりと謂ふべし。然どもその辭をして、絢爛目を奪ふの觀あらしめしものは、實にその天然物を以て材とせしこと、與て大に力あるべし。而して是實に楚人の特有にして、屈子ことに甚たしきを見る。その結果、支那文學をして天然に富ましむるに與て、頗る力ありき。

(二十)

屈子また頗る支那古代の神話を採り來りて、その材となす。彼の過甚なる惡濁の情熱は、懊惱の極、彼の絶大なる想像力を驅りて、人間を離れて、神明と伍し、人世を離れて天上に遊ばしむ。昔に今を離れて古に遊ばしむるのみならず、余はたい離騷の見ゆるものを擧げて、その一例に供すべし。彼已に上禹湯文王徳を修めて以て興り、下羿澆桀紂惡を行うて以て亡び、中龍逢比干忠を履、直を行うて身以

て菹醢にせられしを知り、乃ち長跪して衽を布き、仰て天に訴へ、中心曉明、その中正の道を得たり。精は真人に合ひ、神は化と遊ぶ。是に於てか

駟玉虬以乘鸞兮、溘埃風余上征。朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎縣圃。欲少留此靈瑣兮、日忽々其將暮。吾令羲和弭節兮、望崦嵫而未迫。吾將上下而求索。飲馬於咸池兮、馳余轡乎扶桑。折若木以拂日兮、聊逍遙以相羊。前望舒使先驅兮、後飛廉使奔屬。鸞皇爲余前戒兮、雷師告余以未具。吾令鳳凰飛騰兮、繼之以日夜。鸛風屯其離兮、率雲霓而來御。紛總々其離合兮、班陸離其上下。吾令帝閭開關兮、倚闔闔而望予。時曖々其將罷兮、結幽蘭以延佇。世溷濁而不分兮、好蔽美而嫉妬。朝吾將濟於白水兮、登閭風而縹馬。忽反顧以流涕兮、哀高丘之無女。

と。尋て春宮に遊び、宓妃を求め、有娥の佚女を求め、有虞の二姚を求め、媒拙にして皆な合はざるを述べ、以て君に得ざるに興ず。靈氣爲に占うて勉めて遠逝して狐疑するなかれと勸め、何所か獨り芳草なからん、爾何ぞ故宇を懐ふといひしを擧げ、心猶ほ猶豫して狐疑し、また巫咸をして占はしめ、その勉めて升降し以て上下せよといひしを擧げ、椒蘭頼みがたし、又た况んや揭車と江離とをや、若かす年徳方壯の

時に及び四方を周流して君臣の賢を觀、往て之に就かんには、

靈氣既告余以吉占兮、馳吉日乎吾將行。折瓊枝以爲羞兮、精瑣璫以爲糧。爲余駕飛龍兮、雜瑤象以爲車。何離心之可同兮、吾將遠逝以自疏。邇吾道夫崑崙兮、路修遠以周流。揚雲霓之晻曖兮、鳴玉鸞之啾々。朝軼於天津兮、夕余至乎西極。鳳皇翼其承旂兮、高翔翺之翼翼。忽吾行此流沙兮、遵赤水而容與。塵蛟龍以梁津兮、詔西皇使涉余。路修遠以多難兮、騰衆車使徑待。路不同以左轉兮、指西海以爲期。屯余車其千乘兮、齊玉馱而並馳。駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇。抑志而弭節兮、神高馳之邈邈。奏九歌而舞韶兮、聊暇日以媮樂。陟陞皇之赫戲兮、忽臨睨夫舊鄉。

而して僕夫悲余馬懷兮、蜷局顧而不行といふを以て之を結ぶ、以て楚國を去るに忍びざるの意を示す。彼は天上を遊行して遂に懐に楚國の往來するを免ざるなり。彼が神話をかりて、絶大の想像力を馳せ、神明と伍し、天上に遊ぶを記したるは九歌九章處々に散見す。而して余は支那の詩人にして想像に富むこと未だ屈原の如きを見ず。而して彼は君を求むるの意を美人を求むるに寄せ、且つその女の神話中の美人なるか故に尋常人間の戀愛におちず。婉曲にして卑俚ならず、まこと古

詩人たるに恥ぢざるものあり。

王逸いふ、昔楚國南郢の邑、沅湘の間、其俗鬼を信じて祀を好む。其祠必ず歌樂鼓舞をなし、以て諸神を樂します。屈原放逐せられてその域に竄伏し、懷憂苦毒愁思、鬱出で、俗人祭祀の禮、歌舞の樂を見るに、その祠鄙陋なり、因て爲めに九歌の曲を作り、上神に事ふるの敬をいひ下、以て己の冤結を見す。之に託して以て風諫す。神話的事實を采りてその材をなすの技倆はまた九歌中にも見ゆ。彼の清白、到底人間の溷濁を受くるに忍びず。神明と伍し、天上に遊び、自らまた神話中の一人物たらんとす。而して這般の神話は、老莊哲學の腐敗と共に道教中に入り、また支那小説の端を開くに至る。是また多く楚地の産物にして楚人の空想に富み、迷信に深きに職由せずんばあらざるなり。

(二十一)

屈原の義に富み、行に敢なる、まことに北方仁義繩墨に涵育せられたるに深きを見る。然ともその感情に富み想像力の偉大なる、依然南人たるを失せざるなり。彼は思索家にあらず、老莊の徒と異なり。然ともその想像力の偉大なる、天地の始終

を疑ひ人間の運命に想到せざるを得ざりき。彼の不遇屢々人間の運命の薄を悲み、なほ義に杖りて立ち中正の道を行けり、而して天地の始終を疑ひたるは天問の一篇之を證明して餘あるべし。王逸の傳ふるところによれば、屈原放逐せられ、憂心愁悴、山澤に彷徨し、陵陸を經歷し、旻昊に嗟號し、天を仰て歎息し、楚に先王の廟及び公卿の祠堂ありて、天地山川、神靈の琦瑋、備及及び古賢聖の怪物行事を圖書せるを見、周流罷倦、その下に休息し、仰て圖書を見、因てその壁に書し、呵して之れを問ひ、以て憤懣を渫き、愁思を舒瀉す』と。天問は此の如くして成れり。而して如何か之を問ひたる。文義不次なりと雖も、大抵その意を見るに難からず。彼は先づ天地剖判の前に筆を起し

曰、遂古之初、誰傳道之。上下未形、何由考之。冥昭瞢闇、誰能極之。と問ひ、天地既に分れては

馮翼惟像、何以識之。明々闇々、惟時何爲。陰陽三合、何本何化。圜則九重、孰營度之。惟茲何功、孰初作之。幹維焉繫、天極焉加。八柱何當、東南何虧。隅隈多有、誰知其數。天何所沓、十二焉分。日月何屬、列星安陳。出自湯谷、次於蒙汜。自明及晦、所行幾里。

と問ふ。決章斷句此等奇怪の神話的事實を臚列問尋し、或は神女、女岐無合、夫焉取九子と問ひ、或は天の何闔而晦、何開而明と問ひ、或は康回(共工)憑怒、何故以東南傾と問ひ、或は九州何錯、川谷何滂、東流不溢、孰知其故、東西南北、其脩孰多、南北順蹙、其衍幾何、崑崙縣圃、其尻安在、增城九重、其高幾里と問ひ、また、焉有石林、何獸能言、焉有虬龍、負熊以遊、雄虺九首、儻忽焉在、何所不死、長人何守、靡萍九衢、臯華安居、蛇吞象、厥大何如と問ひ、支那古代の傳説神話、地理歴史の不明より生ずる臆説等を採り來りて數百問を提す。彼が該博なる智識(當時に於ける)、偉大なる想像力はまたこゝにもその一般を示せり。兎まれ彼はなほ純乎たる南人の特質を有す。

(二十二)

屈子の感情に富む、忠にして容れられず、直にして疎せられ、離騷の大篇は實に此怨より生ず。その想像力の大なるその君を思ひ憂ふるの切なる、絢爛の句、紆曲の文に寓す。而してその放流せられて君國に倦戀するの熱誠は死に至るまで逾らず。九章を見て知るべし。彼はその哀郢に於て、思郷の情を抒へ

哀故都之日遠、登大墳以遠望兮、聊以舒吾憂心。哀州土之平樂兮、悲江介之遺風。當陵

陽之焉至兮、蘇南渡之焉如。曾不知夏之爲丘兮、孰兩東門之可蕪。心不怡之長久兮、憂

與愁相按。惟郢路之遼遠兮、江與夏之不可涉。忽若去不信兮、至今九年而不復。

と悲み、また鳥飛反故郷兮、狐死必首丘、信非吾罪而棄逐兮、何日夜而忘之といふ。拙思に於てまたいふ。

有鳥自南兮、來集漢北。好媿佳麗兮、睠獨處此異域。既惇獨而不群兮、又無良媒在其側。道卓遠而日忘兮、願自申而不得。望北山而流涕兮、望憂々之短夜兮、何晦明之若歲。惟郢都之遼遠兮、魂一夕而九逝。曾不知路之曲直兮、南指月與列星。願徑逝而不得兮、魂識路之營營。何靈魂之信直兮、人之心不與吾心同。理弱而媒不通、尙不知余之從容。

彼が思郷の情殷なる此等一二の例に於ても亦た見るべし。

要するに、屈子の辭はその資性の過清と過隘とが、時世の過度なる溷濁と衝突し、之を遣るにその激烈なる感情、偉大なる想像力を以てし、南人の慣用せる古代の神話、天然の實物を以てその材とを資りて之を點綴す。而してその辭の絶清絶艶なる多く他に類例を見ず。たゞその辭の靡麗なるは後世盛行なるゝに至りて害毒を散文に及ぼし、と雖も、支那文學に天然の美を注入するの助なし、美人戀愛を詠

するの素を爲くり、また神仙小説の淵源をなし、の功また偉大ならずや。蓋し文字の靡麗、思想の豊富は北人に比して南人の遙に勝るところ、莊子楚辭を以て之を北方の文學者の製作に較せは一目瞭然たるべし。

(二十三)

屈子の清白なる、汨羅水底の藻となりしより、之を推佐追慕するもの世々絶えず、悲鳴哀吟皆なその調に効ふ。漢時劉向屈子の辭を録し、また此等推佐追慕する者の辭をその後に加へて十五卷となす。また自ら屈原を追念して九歎を作り、之を加へて十六卷となす。蓋し家集の始なり。後漢の王逸、屈原と同土共國、竊に劉向等の風を慕ひ、頌一篇を作りて九思といふ。また楚辭の章句を作り、九思を合せて十卷となす。是よりさき前漢の時班固、賈逵、離騷章句を作り、隋唐の間に至りて解をなすもの尙ほ數家あり。皆な傳はず。幸に王注獨存す、後趙宋に至りて洪興祖之が補注を爲り、朱熹出て之を折中し、その集註を作る。今時林氏の楚辭燈、また世に行はる。然ども終に王注の古奥にして簡明なるに若かざるなり。漢時楚辭頗る盛に行はれ、専門の學者さへありき、蕭統の文選出て、之を讀むもの少なし。

屈子の博學宏辭なる、門下また秀出の士多し。宋玉、唐勒、景差等特に世に知らる。景差の賦存するもの少なしと雖も、漢志によれば、

唐勒賦四篇

宋玉賦十六篇。

といふ。共に楚人、屈子に親炙せり。而して宋玉最も著はる。

宋玉楚に事へて大夫たり。單行の集なし、その賦、楚辭、文選等に見ゆ。その楚辭中に見ゆるものは、曰く九辨九篇、曰く招魂。皆な屈原の爲めに作る。即ちその師の忠にして放逐せられしを閔惜して、九辨を作る。またその師の山澤に愁慙し、魂魄放佚、その命將に落ちんとするが故に招魂を作り、以てその精神を復し、その年壽を延べんとし、外四方の惡を陳べ、内楚國の美を崇び、以て懷王を諷諫し、その覺悟して之を還さんを冀ふなり。またその文選に見ゆるものは、曰く風賦、曰く高唐賦、曰く神女賦、曰く登徒子好色賦、是なり。(九辨五篇は招魂とも亦文選に出づ)その他遠賦、釣賦も亦たその作として傳へらる。而して對楚王問の小品は後世對問の文牀を開き、恰も屈原の漁父卜居の二賦の如く多く人口に膾炙せり。

史公はいふ、屈原既死之後、楚有宋玉、唐勒、景差之徒者、皆好辭而以賦見稱、然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫、とげにや、屈子一たび去て、その微辭は宋玉の徒之を傳へぬ、然ともその熱情に至りては遂に失せぬ。宋玉の風賦は頃襄王の驕奢を諷諫せんか爲めに作れりといふ、然とも是れ名のみ。その高唐賦、神女賦、登徒子好色賦に至りては皆な是れ美人を詠せしもの、已に屈子の美人を以て君に譬へしと同じからず。美人を描出するを目的とせるなり。その辭の絢爛、屈子に譲らずと雖もまた屈子の熱情、屈子の想像力なし。若し夫れ宋玉の美人を描出するを目的とし、屈子の如く之に托せしにあらざり、而して如何ばかり之を描出するに巧妙なりしやを知らんと欲せば、登徒子好色賦の一節を讀まば足らん。彼が秦の章華の大夫が曾て睹しどころなりとて王に語るを賦して

臣少曾遠游、周覽九土、足歷五都、出咸陽、歷邯鄲、從容鄧、衛、溱、洧之間、是時向春之末、迎夏之陽、鶉鳴階々、群女出桑、此郊之姝、華色含光、軀美容冶、不待飾粧、臣觀其麗者、因稱詩曰、遵大路兮、攬子袂、贈以芳華、辭甚妙、於是處子、悅若有望、而不來、忽若有來、而不見、意密軀疎、俯仰異觀、合喜微笑、竊視流眄、復稱詩曰、寤春風兮、發鮮榮、潔齊俟兮、惠音聲、

贈我如此兮、不如無生、因遷延而辭避、蓋徒以微辭相感動、精神相依憑、目欲其顏、心願其義、揚詩守禮、終不過差、故足稱也

といふ。實に後世司馬相如が美人賦の張本となる、而して玉多く問答を以て辭を遣る。蓋し屈原漁父卜居に倣ふ、後世賦家また多く之に倣ふ。而してこの賦、漁父卜居と共に散軀を用ふ。後世散軀の題皆な之を祖とす。

その九辨五首、既にや屈原の賦軀と異なり。參差數落、峻急の氣多く、屈子の纏綿と同じからず。特にその高唐、神女の二篇一申、後世相如の上林子虛二賦その實一篇なるもの之に本づく。且つや高唐に於て山水鳥獸魚物等を述へ、畢見せざるなり。たゞ是れ筆に隨うて境を生じ更に倫次なし。子虛、上林の條分類せし差あるのみ。要するに賦は宋玉に至りてその軀畧は定まるものと謂ふべし。

第三 南北一六思潮の會流。 西方文學

(一)

春秋の初、未だ西方に於て所謂文學者と稱すべきものあらざりき。春秋の末、戰國の時に至りてもなほ西方秦人に文學者少なし。然とも主として政治上の關係よ

りまた人情風俗の他と異なるものあるよりして刑名法術の説をなすもの争うて秦に入る。而して此等の學者は要するに南北兩思想に感染を蒙り、その孤峭峻厲なる思想と、奇拔簡強なる文致とを以て異彩を支那文學史上に放てり。而して彼等は固より西方秦に人となりしにあらざると雖も、西方の風土人情に協ひ、從て期せずして皆な秦に入り、その學秦に行はれ、その言秦に誦せられ、遠く後世に至るまで、その影響を絶たず。故に假に之を西方文學者と共に講ず、強ち不可とすべからず。而して此等文學者の思想の根柢をなししものを管子とす。されば余は此等法家の文學を評論するに先だち管子につきて聊か一顧の勞を吝むべからず。

(二)

人間の性格は地理的影響歴史的感化のその天稟を經緯するものによりて織成せらる。而して時に地理的感化の大なるとあり、歴史的感化の大なることあり。概して時世の潮流急なるどきに當ては後者の遂に前者に勝るに至る。支那に在ても春秋の諸家は、大抵地理的印象を有すること顯著なりと雖も、既に戰國の時に至りては人間の思想頗る膨大し、支那全國を以て一國とするの傾を生じ、また昔時の

如く諸侯の國を以て一國とする傾の甚だしきに似ず。從て地理的影響漸く薄らぎ時世の感化頗る大なり。見よ當時の學士文客、一局に拘せず、やゝ折衷するものすら生ずるに至りたるを。法術諸家は特に時世の子にして、明確なる歴史的觀念を有し、當時に適應せる治方を案出し、と自信せしもの然ともその源に遡ればまた齊人管仲の遺意に本づくものあるを忘る可らず。

中央に於ても周制の實際に行はれしは短日月の間のみ。所謂邦國に於て此制度を採用せし痕迹あるものは諸侯の中たゞ魯あり。而して魯と齊との國風は實に受封の當初に於て布きたる制度に於て明にその相違を示せり。魯公伯禽初めて封を受け魯へ之くや三年にして政を周公に報じぬ。周公曰く、何ぞ遅きや、伯禽曰くその俗を變じ、その禮を革め、喪三年然る後之を除く、故に遅しと。大公また齊に封せらる。五月にして政を周公に報ず。周公曰く、何ぞ疾き。曰く、吾その君臣の禮を簡にし、その俗の爲に従へりと。是れ人口に増彘せる談柄にして親親上恩は周魯の執るところ、尊賢上功は齊の立法の精神なりき。而して此國風は大にその地の人心に影響し、魯の學者大抵儒の徒にして、山東の地方功利の説起る。而して

管仲此地に出て、桓公を輔け遂にその覇業をなしき。

覇はその素を齊の國風に有すると此の如しと雖も、是れたゞ覇の何故に齊に起りしかを説明するに足りて、覇の何故に當時に起りしかを説明するに足らず。蓋し春秋時代に至るまでは歴代の哲王聖主皆な民を教ゆるを重とし、これが政治をなすにも道德主義を執り、國家の公と個人の私とその間嚴然たる區劃なかりき。想ふに家長制度の遺風はその家を治むるが如く國を治め、國を治むるが如く天下を治め、たゞ情義の關係を主として權力の關係を顧みず。之を治むるよりも之を教ゆるを以て政治の第一要義とせんこと固よりその處なるべし。國未に至り、情義的の關係は破れ、舊慣故俗の人心を制裁するものなきに及びて、君臣の關係は權力の關係となり、勢ひ民を教へ民を導かんより、寧ろ民を政だし民を治むるを主とするに至ることまた自然のことのみ。

周室式微、その力能く諸侯を制する能はざるに至りて、小は大に合せられ、弱は強に吞まれ、恰も小獨立國體を連ねて鹿を中原に逐ふの壯觀を寫しぬ。是に於て先づ講せざる可らざるものは國を富ますにあり、兵を強くするにあり。王者政治こゝ

に仆れて力を以て仁をかるの覇者政治之に代る。管仲は此時勢の必要に應じて世に出でたり。

然れども覇者政治は王者政治と法治政治との過渡なるを忘る可らず。道德主義の政治と法治主義の政治との連鎖なるを忘る可らず。換言せば時世の變局に適應して一時を彌縫せるものにすぎざるを忘る可らず。人心は之を以て満足すべきにあらず。時は不常態のものをして常態に復せしむ五伯の後戰國となり、遂に秦に一統せらる。勢は傾向をしてその極に達せしめざれば已まず。覇政遂に法治となりぬ。

(三)

王政の熄みて覇政の起りしは思想の一變なり。名によらずして實により、教によらずして法により、道德によらずして功利により、凡そ力と富とを以て爲政の第一要義とせしは覇者に創りて法家に成る。然れども是れ實行の上に於て謂ふのみ。所謂覇者の言は實に管仲の言なるか、管子なる書は果して管仲の著なるか、是れ疑問なり。

先秦の學者管子の言の稱する者亦た之有り。而してその書漢初に於て講習尤も著しとなす。賈誼鼂錯を以て經本となし、司馬遷は管氏の書を讀むに詳なるかなその之を言ふやといふ。成衷の間劉向之を第録して八十六篇となす。然れども管子申韓の書の稍、紬けられしは實に當時古文大に興りし時に始まる。漢志は之を道家に列し、隋唐志之を法家の首に著す。唐に至りて己に殘闕ありしが如し、宋に至りて十篇を失ふ。明に至りて殘闕特に甚だし、萬曆中趙用賢刊するところ宋本に由ると稱す。然れども屢、點竄を経たり。己に劉向校する所の舊にあらざ。ただ他氏妄更する者に比すれば尤も古に近し。現に行はるゝもの皆な之に依る。今管子なる書の性質をみるに、葉氏の一人の筆、一時の書にあらざといへる、周氏の雜說叢るところといへる、その眞を穿てる言なるべし。而して、八十六篇その中十篇文は失せ、目は存ず、古人分て八となす、即ち經言と稱せらるゝもの九篇、外言と稱せらるゝもの八篇、内言と稱せらるゝもの九篇、短語と稱せらるゝもの十九篇、區言と稱せらるゝもの五篇、雜篇と稱せらるゝもの十一篇、管子解と稱せらるゝもの五篇、管子輕重と稱せらるゝもの十九篇、而して篇次また此順序による。うち輕言九篇

を除きて他の諸篇の管子の手筆にあらざるは古來幾多の學者の考説を待たず、多少の讀書眼あるものは直ちに之れを知るに難からず。短語以下はいはず。内言九篇の全然後人の作たるはその諸篇の文辭の多く史辭なるより推すもその内往々管仲以後のことを記し、桓公以後の亂を叙せるより推すも、決して疑ふべきにあらず。外言八篇中にも管子の言として引けるもの多く、周氏の如、内業法禁諸篇、又偏駁不相麗といひ、また黃氏が管子書不知誰所集、乃龐雜重複、似不出一人之手、心術内業等篇皆刻斷隱語、以爲怪、管子責實之政、安有虛浮之語、といへる、遠からざるの推定といふべし。

然れども學者多くは經言の諸篇を疑はず。特に收民篇の如き史公之を引ききて仲の說となし、韓子の引けるもの往、經言中の言と符す。その文の簡奧また遂に戰國時代の作家に似ず。然らば經言は管子の手筆なるか。たゞ朱子はその語類中に於て管子全部を抹殺して曰く、

管子非仲所著、仲當時任齊國之政、事甚多、稍間時又有三歸之瀕、決不是開工夫著書底人、著書者不見用之人也。

と。言や、僻するところあり。且つ獨斷にすぎずと雖もまた大に味あるを覺ゆ。余は經言も或は管子の手筆にあらずとするの可なるにあらずやを疑ふ。今二三の例證を擧ぐれば

(一) 管子四順に曰く、故知予之爲取者、政之資也。此語酷だ老子の將欲奪之、必固與之(三)、(四)といへるに肖たり。是れ政略家の常套にして偶、老子と暗合せるに過ぎざるべしとせんも、その他の篇中道家の言に似たるもの頗る多し。されば漢志にも管子を以て道家の首に列せり。然れども是れ自ら荆楚南人の思想にして北方の思想にあらず。余は以爲ふ。管子の書は道家世に興りし後、人その説を採て管子に附會せしにあらずやと。されど山東齊人の思想はや、江南楚の思想に似たる者あるは事實なり。管子中老子に似たるものありと雖も直ちに以て管子の膺をいふ可らずとせんも、余はなほ經言の管子の手筆にあざざるを信ず。何ぞや

(二) 立致九敗の一節を見よ、曰く、寢兵之説勝、則險阻不守。兼愛之説勝、則廉恥不立と。是れ疑ふべし。兼愛の説、寢兵の言は老子に創りて、墨子に成り、宋鉞尹文の徒盛に之を唱ふ。大凡此等の説は共に亂離人生を解せざるの世に出づべくして、春

秋の初、管仲の時已にかゝる説あるべしとも覺えず。たとへこれありとせんも管子の之を駁せざるを得ざるほど世に勢力あるべしとも覺えず。余は益、管子の經言古は古なりと雖も老子墨子以後に成りしものとするの可なるを見る。此證なほ薄弱なりとざるものあらば余になほ一證なり。

(三) 管子また王霸の辨を載す。經言中にあるものゝみを擧げんも曰く、無爲者帝。爲而無以爲者王。爲而不貴者霸(乘馬)と。宛然老子中の語。又た曰く、尊賢授德則帝。身仁行義、服忠用信、則王。審謀章禮、選士利械、則霸(幼)と。宛然偏家の言。然れども余の見るところを以てせば王霸の辨は孔子の時なほ未だ明かならざりしが如し。後世事を論する詳なるに至りて儒家中に在ては孟子先づ之を唱へ、荀子之を和す。(論 之 を い ふ 也) 孔子の王霸をいふ已に明白ならずとせば孔子以前此の如く明亮にその別をいひしものありしとも思はれず。况んやその之をいふ、或は道家の言に類し、或は儒家の言に類するをや。

(四) たいその文致よりいふも、篇々何ぞ相異なるの甚だしきや。牧民の簡古なる、山高の吊詭なる、權修の逸宕なる、立政の質正なる、師法の簡途なる、古は則ち古し。

然ども決して一人の手に成りしものにあらず。特に乘馬と此等の篇とを比すれば誰とて時に遠近の差あるを知るに難からざるべし。

要するに經言九篇と雖も頗る頼みかたきもののみにして、少なくとも老子墨子以後の人の手になりしものなるのみならず、決して一人の手になりしものにあらざる疑なからむ。葉氏か管子一人の筆にあらず一時の書にあらずといへるは旨ある言にして、朱子が管子は仲の著すところにあらずといへるも亦た誣ひざるの言なり。まことに管仲は事業家にして學者にあらず、實に之を行ふの人にして空しく之を言ふの人にあらず。朱子が決して是れ閑工夫著書底の人にあらずといへる、まことに管仲を知れるの言なり。

(四)

管子なる書は仲の手筆にあらず、北方山東功利の思想と南方荆楚道德の思想との會萃より成れり。覇者の思想を文るに道家の思想を以てす。その根柢遂に北方的規矩準繩に拘束せらるゝを免れずと雖も、自ら儒家の言と異なり山東功利の國

風より發生せる思想なり。儒は親親を基とし、覇は尊賢を主とす。儒家の言は嚴なるものあるもその中自ら和あり、覇者の言は和なるものあるもその中自ら嚴あり。管子經言の簡輿にして古色ある多く老子論語等に遜らず。而して皆な共に春秋寛厚の風ありて戰國殺伐の氣なしと雖も、管子の他に比して法家的嚴厲の素あるを否むべからず。傾向は傾向を逐うて趨る。戰國の急潮は老子は流れて莊子となり、孔子は走りて孟子となり、管子は激して韓子となる。而して韓子最も後れて世に出て最も戰國的思想と感情とを代表す。

群雄交争の世に於て富強の實を講ずるもの、出づべきは敢て怪しむを須みず。管子一たび道德主義の王政を終り、功利主義の覇政を始めしよりその遺意を襲ふもの相次て起る。然ども覇者はなほ法家と異なり、彼は時勢に適應して古制を改め半は周官を祖として化裁變通を盡すのみ。専ら周官の舊に依らんとする儒と異なりと雖も亦た専ら舊慣を破壊せんとする法家とも異なれり。退けは儒となり進めは法となる、過渡なり橋梁なりとなす所以。彼はたゞ舊によりてその格するものを變通せんとするのみ。また覇者は利と信と武とを主とす。さればとて

道義を無用とせず、道徳を採るは王者政治の後殿なり。利と信と武とを主とするは法家の先驅なり。而して覇はまた道徳をいふと共に法を説く。利は即ち國を富ます所以、武は即ち兵を強くする所以、情を離るゝの信は信賞必罰の根するところ。戰國に入りて覇は遂に法となりぬ。

法家は皆な富國強兵を主義とす。然とも富國も亦た歸するところ強兵にあり。管子の意を承けて、一層之をその極端に推せしもの魏に李悝あり、秦に商鞅あり、悝は魏文侯に相となり、富國強兵を務め、その地力を盡すの説は人口に膾炙せるところ。漢志に李子三十二篇を著せるも、今傳らず、少しく後れて商鞅出づ。彼が天資の刻薄なる、まことに法家に適せり。漢志に商君二十九篇を著す、宋に至るまで、その三篇を失ひ、その現存するもの目二十六篇あり、然ともその内二篇目あり、書なし、さればその實二十四篇を殘せるのみ。而して學者往々その價を疑ふものありと雖も、その警拔なる眼光、峻峭なる思想、簡勁なる文致、また自ら法家の筆なり。

法を説くものゝ思想の根柢は實に山東覇者の言にあり、而して自ら北方思想の一派たり。然るに春秋の末、主として法を説くものゝ外に、主として術を講ずるもの

の一派起る。その思想の根柢實に南方老子の言に本づき、列國抗爭の際、君權を増大ならしむるの必要を充たさんとて世に出でたるものなり、今韓子の言によりて法と術の別をきかんに曰く、術者因任而授官、循名而責實、操殺生之柄、課群臣之能者也。法者憲令著於官府、刑罰必於民心、賞存乎慎法、而罰加乎姦令者也。此人臣之所師也。君無術則弊於上、臣無法則亂於下、此不可一無、皆帝王之具也。(答十)と。術は即ち形と名との參同するにあり、刑名の名こゝに起る。彼は君主をして無爲ならしめ、臣の稱する名と臣の行ふ形とを參同し、以て之を賞罰せんとす。老子の意と全く同じとにあらぬと、その無爲主義を政治に應用せば、また將に此の如くなるべきか。而して術家として最も古きものを鄭の大夫鄧析とす。春秋末年の人にして魯の定公と時を同じくす。彼はまた詭辯家の祖たり。列子にいふ、操兩可之説、設無窮之詞と。荀子は評す、察而不惠、辯而無用と。漢志二篇を著す、今本また二篇あり。その老子に本づきしは一見之を知るに難からず、次て戰國初期に至りて慎到出づ。騶衍、淳于髡、環淵、接子、田駢、騶奩の徒と並に稷下先生たり。また黃老の術を學び、以て政治を論ず。管子なる書の大部分は想ふに慎到等の筆に成りしものならむ。

史記いふ慎到著十二論と。漢志いふ慎子四十二篇と。劉向十二篇を定めて四十
二篇となししなるべし。宋時纔に五篇を存す。今本五篇文に刪削多し、また宋時
の舊にあらじ。申不害次て鄭に出て賤官より起り術を學びて韓昭侯に相たり。
商君秦に相たると時を同じくす。昭公八年相位に即きしより内政教を修め外諸
侯に應じ、十五年の間、申子の身を終るまで國治まり兵疆く、終に韓を侵すものな
りき。その學黃老に本づきて刑名を主とす。史記稱す、著書二篇、號曰申子と。漢
志、申子三篇を著す。劉向二篇を分て六篇となしし、か、今佚す。たゞ諸書にその遺
言の散見せるあるのみ。また以てその思想を窺ふに足る。要するに此等の諸家
は南方思想を解するに北方的規矩準繩に拘束せられたる思想を以てし、老子宇宙
大の思想を政治の實際に應用し、その所謂術を發明せしのみ。
而して山東功利に根したる法家の言と江南無爲に源したる術家の言を會し、萃め
て之を大成し之を遺るに孤峭なる彼か資性に加ふるに戰國的英雄の氣を以てし
劍戟相摩して火を發するの觀を呈せしものを韓子とす。
一たび韓非の書を繕けば先づその題目に於て既に異様の感あるべし。曰く孤憤

曰く八姦、曰く十過、曰く姦劫弑臣、曰く亡徵、曰く飾、曰く安危、曰く詭使、曰く六反、曰く
五蠹、皆な人をして愴然秋霜を蹈むの感あらしむ。

韓非は韓の公子なり。その事蹟は史記老莊申韓列傳に具す。韓さきに申子あり、
その流風の薰するところ多少韓非に影響なしといふべからず。加ふるに秦頗り
に兵を三晋に加へその勢旭日の如し。而してその國は商鞅遺法の存するところ、
韓非が法術を説く、その孤峻なる性格その逢遭せる時勢に本づくべしと雖も申商
の感化また與て力なくんばあらず。

彼もと李斯と共に荀子を師とす。その稱道するところ何ぞ相似ざるの甚だしき
や。さればその學説と學説との間何等の關係なきが如く説くもの往々にしてこ
れあり。たゞ蘇子荀卿を論して以爲らく荀卿喜で異説をなして譲らず。敢て高
論をなして顧みざるものなり。故に李斯秦に事へ書を焚き、大に古先聖王の法に
於てその師の道に於て冠讐もたゞならずと。蘇子もと托する所あり、安石惠卿を
暗刺するのみ。その説取るに足らずと雖も法術の士と荀子との間に如何なる關
係あるやを説きしは之を以て始とす。

余の見るところを以てすれば荀と韓とは思想上確乎なる歴史的關係あるが如し。蓋し知は争に生ず。當時の政治上社會上はた學術上の争ひは人智の進歩に偉大なる影響を及ぼしぬ。而して人智の進歩は知らず識らずの間に儒流の説をして時勢の影響を蒙らしめぬ。孔子は仁を主とし孟子に至りて義を唱へ、荀子に至りて禮を隆くす。次で來るものは何ぞ法にあらざるや。荀子學說の根柢はその性惡説にあり。彼が議論の起點は毎に茲に存ず。而して荀子は以爲らく人の性惡なるが故に之を善ならしめむが爲に先王の道を要すと。先王の道とは何ぞ禮なり、彼が言を借りて云へば準繩なり、彼は己の天下を治めん散漫なる仁義のみによらずして確乎たる準繩規矩を以てせんとす。彼は己に道德的向上により法術的防止に一步を轉したるなり。而して荀子の歴史的眼孔は儒家中稀に見るところ、韓非その門に出づ、所以なしとせんや。况んや、申子と國を同じくし、商子の秦を富強ならしめしを聞見し、その性格之に適し時勢之を屬すをや。

當時の韓王名を安といふ、非數、書を以て之を諫むと雖も、暗弱終に用ゆる能はず、是に於て韓非國を治めてその法制を修明せず、契を執て以てその臣下を御せず、富國

強兵以て人を求めて賢に任せず、反て浮淫の道を擧げて之を功實の上に加ふるを疾み、以爲らく儒者文を用ひて法を亂り、俠者は武を以て禁を犯し、寛なれば名譽の人を寵し急なれば介冑の士を用ゆ、今の養ふところ、用ゆるところにあらず、用ゆるところ養ふところにあらず、廉直の邪枉の臣に容られざるを悲み、往者得失の變を觀たり、故に孤憤、五蠹、内外儲說、林、說難十餘萬言を作る。

人或はその書を傳へて秦に至る。彼と始皇とは此の時代を代表せる二偉人なり。彼か言ひしところは始皇實に之を行ひたり。史の傳ふるところによれば始皇、孤憤五蠹の書を見て曰く、嗚呼、寡人得見此人、與之游、死不恨矣と。その傾投想ふべきなり。時に李斯始皇に事へて頗る用ゐらる。而して彼もと韓子と共に荀卿を師とし、自ら以爲らく非に如かずと。是に於てこれ韓非の著せしところの書なるをいふ。秦恐れて急に韓を攻む。韓王始め非を用ひず。急なるに及びて遁ち非を遣し、秦に使せしむ。その始皇に説きし狀、初見秦、存韓、難言に具す、始皇韓非を悦び未だ信用せず、李斯姚賈之を害とし、遂に之を讒殺す。

非口吃なり、道説する能はず、善く書を著す。その書十餘萬言皆な發憤感怨に成る。

虚名を賤み實用を貴ひ、賞罰を明にし、浮淫を破し、法術の變を極む。蓋し非韓の疎屬公子たり、畸致、援乏し。一たび王を見るに至りて棄て用ひられず、卒に秦に之き、韓を存せんと欲すと雖も得へからず、李姚の讒するところとなり、身戮せられて以て死す。その怨憤たる、寧ろ言ふに忍びんや。

彼が所信を行はんとする、また李斯一輩の徒の功名富貴に眩惑せられたると撰を異にす。その確乎たる自信之を斷行せんとする抱負、堂谿公に答ふるところ、以てその一斑を知るに足る。曰く

夫治天下之柄、齋民萌之度、甚未易處也、然所以廢先王之教、而行賊臣之所取者、竊以爲立法術、設度數、所以利民萌、便衆庶之道也、故不憚亂主闇上之患禍、必思以齊民萌之資利者、仁智之行也。(田門)

と。然り彼は亂主闇上に容られず、遂に秦に讒殺せさられぬ。さればその遺書の怨憤彼が如き、固よりその處なり。

(六)

當時社會の狀態まことに慘憺たる光景を呈したり。春秋の頃より層疊し來りし

密雲は歲月と共に烈風暴雨となり、人心の墮落今や殆どその極に達しぬ。政界は權詐漸く止みて暴力之に代り、韓子が所謂中世遂於智謀、當分爭於氣力といへるもの頗るその實を穿てるの名言たらんとす。人間の私徳地に墜ちて社會の公義泥に委す而して特に不遇の域に沈淪せしものを人主とす。君臣情義の連鎖絶えて法網の之を束縛するなし。當時の諺には厲王を憐むといへり。三卿の晋に於ける、田氏の齊に於ける、皆なその例として視るべきもの、韓子が備内に於て論ぜしところ、憤慨の餘に出で猜疑の心を以て他を付度せしものなるべきも、亦た當時の事態を想像するに足るものあり。曰く

人主之患、在於信人、信人則制於人、人臣之於其君、非有骨肉之親也、縛於勢而不得、不事也、故爲人臣者、親視其君心也、無須臾之休、而人主怠傲處其上、此世所以有劫君弑主也、爲人主而大信其子、則姦臣得乘於子以成其私、故李兌傳趙王而餓主父、爲人主而信其妻、則姦臣乘其妻以成其私、故優施傅麗姬、教申生而主宰齊、夫以妻之近與子之親、而猶不可信、則其餘無可信者矣。

と。而して特に甚たしきものは次の一段にあり。曰く

且萬乘之主千乘之君后妃夫人適爲太子者或有欲其君之蚤死者何以知其然。夫妻者非有骨肉之親也。愛則親不愛則疎。語曰其母好者其子抱然則其之反也。其母惡者其子釋。丈夫年五十而好色未解也。婦人年三十而美色衰矣。以衰美之婦人事好色之丈夫。即身見疏賤。其子疑不爲主。此而后妃夫人之所以冀其君之死者也。唯母爲后而子爲主。則令無不行。禁無不止。男女之樂不減於先君而擅萬乘不疑此。就毒扼味之所以用也。故桃左春秋曰。人主之疾死者不能處半。

彼は父子兄弟夫婦の間すらなほ計算の心ありと謂ふ。君と臣とを以て互に利を漁するものと思へるは當然の事なり。彼が君臣の間を観ること此の如きに止らず。君と臣とは各その利害を異にする者となし。臣のその君を弑せざる者は黨與具せざればなりといふに至る。彼が八姦に於て説くところの如き。人臣の足りて以て姦をなすに八術あるをいひて頗る密なり。一に曰く同牀。何をか同牀と謂ふ。曰く貴夫人愛孺子。便假好色。人臣之に道りて姦をなす。二に曰く左旁。何をか左旁と謂ふ。曰く優笑侏儒。左右近習。人臣之に道りて姦をなす。三に曰く父兄。何をか父兄と謂ふ。曰く側室公子。人主の親愛することろなり。大臣廷吏。人主の與

に計るところなり。人臣之に道りて姦をなす。四に曰く養殃。何をか養殃といふ。曰く人主宮臺池を樂奏し。子女狗馬を好飾し。以てその心を樂ます。これ人主の殃なり。人臣之に道りて姦をなす。五に曰く民萌。何をか民萌と謂ふ。曰く人臣たるもの公財を散じ。小惠を行ひ。朝廷市井をして皆な己を勸譽せしめて。以てその主を塞き。その欲するところをなす。六に曰く流行。何をか流行といふ。曰く人主たるものその言談に固塞せられ。論議を聽くを希ふときは。人臣辯士。能説者を求めて。流行の辭をなさしめ。以てその主を壞り。その私をなす。七に曰く威疆。何をか威疆といふ。曰く人臣に君たるもの群臣百姓を以て威疆をなすものなり。人臣劍客死士を衆めて。群臣百姓を恐れしめ。以てその私を行ふ。八に曰く四方。何をか四方と謂ふ。曰く人臣に君たるもの國小なれば。大國に事へ。兵弱ければ。疆兵を畏る。人臣公財を以て。大國に事へ。その威をかりて。その君を恐れしむ。されば臣の君に服するは。君の柄を執り。勢に處り。その力以て敵すること能すを以てのみ。君は累卵の危に處るものなり。所謂人主は利害の的藪なり。射者衆し。彼が君臣を視ること一切の情義を否定し。單に權力の關係を以て之を視るなり。是に於てかその

所謂術を以て臣を馭せんとはつとむるなる。

彼は術を以て臣を馭し、また法を以て民を治めんとす。術は密を尙と、法は顯を欲す。而して彼は如何にか民を視たる。彼の民を視る、無智無識、嬰兒の如しとなすなり。その言に曰く、民智之不可用、猶嬰兒之心也。故に彼は絶對的專制を主張するなり。その意に以爲らく

夫嬰兒不別首則腹痛、不別淫則寢益、別首則淫、必一人抱之、慈母治之、然猶啼呼不止。

嬰兒不知犯其所、小苦致所大利也。

(學顯)

民智の用ゆるべからざる尙ほ嬰兒の智の用ゆるべからざるが如し。而して彼は君と民との關係を以て權力關係となし、民は固と勢に服し能く義に懐くこと寡なしといふ。されば仲尼の聖人にして天下の大爲めに服役するもの七十人、而して仁義をなすもの一人。魯の哀公の下主にして、南面國に君たらば、境内の民敢て臣とせざるなし。民はもと勢に服す。勢賊に以て人を服し、身し故に仲尼反て臣たり、而して哀公顯て君たり。仲尼その義を懐くにあらず、その勢に服するなり。彼の解するところによれば、勢とは勝衆之資なりといふ。君は此勝衆之資を有す。故

に官法を行つて民服するなり。

要するに韓子は人心腐敗の影響より、人間の政治的關係、彼は人間を以て全く政治的動物とするが故に、人間の凡ての關係を以て全く權力の關係となし、而して君の臣を馭するに術を用ひ、民を制するに法を用ゆへきを説き、この兩者を集めて大成し、一切の情を撲滅し、一切の私を滅盡して、誅戮擧用、大小輕重、一に名に因り、實に擊し、一に法に依り、令に準し、照々たる仁義を事とするなからんとす。實に老子の學に資るところ頗る多きを見る。

(七)

時世は人を作る。戰國の末、道義地を拂ひ、人間の善端かくれてたゞその劣情のみを餘すの際に韓子出づ。彼が銳利なる眼は人間虚飾の表面を泛觀せずして、その汚穢なる裏面を洞見し、その猜疑の心は殆ど人間常情の外に逸出す。而して之を遣るに到底の筆力を以てす。彼は臆面なく人間劣情の裸躰を描出す。而して他人説て七八分に至り得ざるところをも彼は説て十分十二分に至らざれば已まざるなり。陳深が之を評して

今讀其書上下數千年古今事變奸臣世主隱微伏匿下至委巷窮閭婦女嬰兒人情曲折不啻隔垣而洞五臟非著書當在未入秦之先年未壯已能事如指掌何材之蚤也其議事也蚤其命物也材窮智究慮淵竭谷虛故不終天年而中道天絕

といへるその果して早熟なりし故に早死せしや否やを知らずと雖も人情曲折啻に垣を隔て五臟を洞するのみならずさるは信なり。而してその心眼の到底なるのみならず筆力に於て到底なるは朱晦翁が

看文字須是猛將用兵直是鏖戰一陣如酷吏治獄直是推勘到底決是不恕方得此是治國之一件讀韓子者須徹其相意相而後僅得作者苦心。

といへるに盡せり。呂居仁が文章須要說盡事情如韓非諸書大略可見といへるまた此意なり。彼はまことに心に於ても手に於ても酷吏たるを失はず。

而して彼は啻に犀利なる眼猜疑なる心を有するのみならずまた之を遺るに十二分の筆力を有するのみならず彼はまた明晰なる頭腦を有せり。說難の諸篇は之を證明して餘あり。事を論ずる髓に入り文を爲くる心を刺す。周末文人多しと雖も犀利なる眼孔到底なる筆力特に彼か如く明晰なる頭腦を有するものを見ず。

朱晦翁嘗て云く老蘇只だ論語韓子と諸聖人の書とを取り安坐して讀むもの七八年後來許多の文字を做出して此の如く好しと。豈ただ老蘇と云はんや三蘇の文皆な力を韓子に得たり。而してなほ文名を千古に赫灼たらしむるに足る韓子が支那文學史に於ける地位勢力決して孟莊諸家に下らざるなり。

(八)

韓子の峭刻なるその思想に於てもその文致に於ても具に峭を極め刻を盡す。而してその情の烈にして心の熱する口角泡を吹くと云はんより杜鵑血に鳴くの趣あり。加ふるに時は戰國の末世變の急なるに遭ひ而して身は轉軻不遇遂に客死に了る。その鬱勃たる不平は萬斛の熱血をして全身の血管より迸出せしむ。彼は怨むと云はんより憤ふるなり。彼は泣くといはんより怒るなり。彼は苦むと云はんより悶ゆるなり。莊周は海波の暴風に激したるが如く洶湧の裡自から輕浮流蕩の態あり孟子は泰山の怒風を遮るが如く山鳴り谷應るの間自ら沈重不動の容あり。韓子にいたりては山の火を吐き怪岩巨石を一時に四方に雨すらか如し。若し夫れ等しく山を以て譬ふれば莊周は遠山模糊として雲烟出沒し千態萬

状窮極するどころなきが如く、孟子は泰山の巍乎として雲際に聳立するが如く、韓子は奇峰の矗立して刀もてけづりたらんが如し。今之に屈原を加へて戰國四文豪の像を作れば嘲笑するものは莊子にして壯語するものは孟軻、憤怒するものは韓子にして哀泣するものは屈子ならむ。

韓子の直情徑行なる、之かんと欲するところに之かざれば止まず、火も之を踏み水も之に行く。彼は前後左右を顧慮せざるなり。孟子はなほ徑よりせず、韓子に至りては直にその荆棘を踏破せんのみ。孟子は至るべきに至るのみ、韓子に至りては寧ろ之を越えて之かんとす。劉思その文心雕龍に於て韓子を評して曰く

韓非著博喻之富

と。博喻これあり。然ども博はその特色にあらず。彼は博といはんより深し、紆曲といはんより直徑なり、孤峻なり。その思想己に然り、その法術を以て上下を律せんとす、何ぞそれ單純明決なる。その文致また然るなり。直截なり明快なり、精覈なり。その音また絲竹より出づるものに似ずして鏗然、鏗然金石より出づるものに似たり。

彼か思想の直截にしてその頭腦の明晰なる、而してその文致の峭深にして他人説で漸く七八分に至るべきものを彼は説て十分十二分に至るの筆力は、韓子をしてたゞに周末に於てその特能を専らにせしむるのみならず、支那文學史上殆ど連轡して馳するに足るべきものを見ず。而して彼は之に載するにその猜疑なる心情を以てその犀利なる眼光に映せしめたる腐敗社會に蠢動せる腐敗動物の劣情を以てす。發憤、感怨、滿腔の熱血迸り、萬丈の光焰發す。宜なり、その學説の世に納られざるにも拘はらず鉛槧の士珍として帳中の物となすや、蓋しその文詞を鑿とするなり。

(九)

古來韓子の文を評するもの、孤峭といひ、深刻といひ、奇にして破的なるものといひ、また古峭といふ。その文の縱横自在にして而して且つ古色の蒼然たるものあるまことに珍とするに足る。その一字の冗なく一句の繁なく、全篇氣力充實して些の解弛なきは韓子の常筆法とせんも愛臣、主道、揚權の篇の如きまゝ、律語を用ひまたや、韻を用ゆる等自ら古跡たるを失せず。特に主道、揚權の二篇の如き、老子の

意を承けて韓子の尤も意を用ひしところ連珠の如く篋銘の如く古奥奇峭春秋の文に似たり。漢以後の作者遂に摸倣し得ざるところ。彼の才能學識已に多しとするに足る而してその筆力また益々多しとすべし。

韓子五十三篇十餘萬言は大抵その入秦以前に成れり。たゞ初見秦存韓難言の三篇は韓子の爲めに秦に入りし後に成りたるもの然どもその思想已に西方秦人に合へり。始皇の韓子に傾投して此人を見之と遊はし死すとも恨みずといへりしは已に擧げたり。後世三國の時に至りて蜀の先主勅して曰く、

申韓之書益人智意可歎誦之(蜀)

と。孔明申韓管子六韜の書を手寫して以て後主に進め孟孝裕の意また孔明と同じ。而して後世蜀の地三蘇を出す。商鞅さきに秦に入りてその説盛に秦に行はれ韓子後に秦に入りて始皇傾投す。而して之に孔明孝裕三蘇の徒相次て刑名法家に資る。西方の思想感情法家諸子の思想感情と默契するところあるか。はた此等諸子西方文學の基を開き流風餘韻遠く後世に及びたるか。余は聊かこゝに一考を費さる可らず。

(十一)

支那塞内は古來隱然三大部分に別かる。而してこの三大部分の鼎立せしは春秋戦國の時を以て始とすべし。この以前に在ては北方獨り開けて南西なは蒙昧の域にあり。三代の間北人の勢力増大するに従ひその化また南西に及び周の政綱紊るゝに及び南方楚國を立て西方秦また勢を得たり。而して所謂中國諸侯なる古國舊邦は齊魯の伯王交起りて之を結び周室を戴きて秦楚に對立す。三大勢力の鼎立は已に當時に於て見るべかりき。而して這般の三分は決して單に人爲的にのみ是れよれるにあらず天然の分割勢ひ然らざるを得ざる者あり。江北と江南との差異は已に察ぼその梗概を述べたり。西方秦の地はいかに前二者と異なるが余はその文學を評隲するの前、先づその特質をなせる緣由を考査せざる可らず。

若しそれ漠たる野を以て北方天然の風景を概すべく、蕩たる水を以て南方天然の風景を概すべしとせば巍たる山は以て西方天然の特色とすべし。秦は阜陶の子伯翳の後なりと稱す、伯翳禹を佐けて水を治め、水土既に平なり、舜命じて虞師とな

し、上下卿木鳥獸を掌らしむ。姓を賜ひて羸といふ。夏商の興衰をへ、亦た世、人あり。周孝王その末孫非子をして馬を汧渭の間に養はしむ。能く鳥獸の聲を識るとなし、非子を封じて附庸となし之を秦谷に邑せしむ。曾孫秦仲に至りて宣王又た命じて大夫となす。始めて車馬禮樂侍御の好あり。國人之を美するの詩あり。秦風こゝに始まる。春秋の時已に晋楚と對立して伯を一方に稱す。その民の慄悍にして武を尙び自ら興國の氣象ありしは詩の秦風之を證して餘あるべし。特に小戎の一篇の如き秋高く馬肥え、磅礴たる英氣人に迫る。今その詩句を引用するの繁を避け、序者がその意をいへるを擧ぐべし。曰く

小戎美襄公也、備其兵甲以討西戎、西戎方強而征伐不休、國人則矜其車甲、婦人能閱君子焉。

と。秦風の諸篇言の淫柔に亘るものなし。音また鄭衛に似ず、人をして坐ろにスバルタの古を追憶せしむ。されば左傳襄公二十九年吳の公子札來聘し、周樂を觀んと請ふに任せ、工をして十五國風、二雅、三頌を歌はしむるや、札秦風をき、評して曰く

此之謂夏聲、夫能夏則大、大之至也、其周之奮乎。

と。その沛然興國の氣象ある、まこと周の始に似たるものあり。而してその秋風嚴厲の趣ありて遂に周の春風寛和の態なきも亦た始より然りしが如し。秦風の字々風霜を挾むを見てもその一端を卜知すべし。降りて戰國に至りその益、領土を擴張し遂に西巴蜀を擧げ南漢中を取り、西方一帶の土皆なその有に歸す。而して秦人孤峭嚴厲の氣は此間に磅礴たりき。

余は秦人の資性を觀ていまた嘗てその地の山川に想到せずんはあらず。若しそれ支那北方の千里万里の平野を出て、一たび足を函谷關に向くればまた單調の風景にあらず、函谷關の如きは一夫難に當れば萬卒も通ずる能はずといふにあらずや。函谷關をへ、潼關をへ、幾多懷古の涙を振うて岐山縣をすぐれば所謂蜀道なり。蜀道難の如き入蜀記の如き多少文學を好愛するの士は必ず一讀を經たるなるべし。その山の險、その水の駛、また南北地方と大に異なるものあり。而して山多く水多きの結果は霧濃く烟深く山水をして益、千狀萬態の妙を呈せしむ。此の如き山水に涵養せられたる秦人の思想感情か急峻にして孤峭なるべきを想ふに

それ免れざるところならむか。

刻薄なる商君は此地に入りてその言聽かれその道行はる。而して秦をもて富強を擅にせしむ。韓子また入りて讒死の慘にあひしと雖も、秦始皇は實に彼か知己たりし。而して韓子の同門李斯また重く秦に用ゐられき。余は今李斯を評するに先たちて韓子入秦の前に成りし呂氏春秋に一顧の勞を惜むべからず。

(十二)

呂氏春秋また呂覽といふ。その書二十餘萬言分て八覽六論十二紀となす。周末諸子各家の長を探り黃老儒墨刑名兵農の言を兼收して一に偏せず。戰國未獨立思想の衰へて祖述折衷を事とせし思想界の狀態は此書最も明に之を表明せり。「此書呂氏春秋と稱す。秦相呂不韋その客の聞くところを著さしめ之を集論して一書となせしによる。今例によりて呂不韋の小傳及び此書の成立せし當時の事情を案ずるに史記によれば呂不韋なるものは陽翟の大賈なり。嘗て邯鄲に買し、秦の孝文王の庶子楚が趙に質子となるを見て曰く、是れ奇貨失ふ可らずと。乃ち邯鄲の美姬を買うて妾となし、其懷孕するを知りて之を楚に獻す。楚、秦に歸りて

位に即ぐ。是を莊襄王となす。不韋を以て丞相となし、文信侯に封じ、河南の雒陽十萬戸を食ましむ。莊襄王在位三年にして薨す。邯鄲の姬産むところの太子政立つ。是を始皇帝となす、乃ち不韋を尊みて相國となし、號して仲父と稱す。是時に當りて魏に信陵君あり、楚に春申君あり、趙に平原君あり、齊に孟嘗君あり。皆な士に下り賓客を喜びて以て相傾く。不韋秦の強を以て之に及ばざるを羞ぢ、亦士を招致して之を厚遇し、食客三千人の多きに至る。而して當時諸侯に辯士文人多く、荀卿の徒の如き書を著して天下に布く。不韋乃ちその客をして各、その聞くところを著せしめ、その論を集めて八覽六論十二紀二十餘萬言となし、以謂らく、天地萬物古今の事を備へたりと。呂氏春秋と號し、之を咸陽の市門に布し、千金をその上に懸け、諸侯の遊士賓客を延て能く一字を増損する者あらば千金を與へんと約す。而して遂に一字を増損し得るものなかりしといふ。

されば呂氏春秋と題すと雖も、呂氏一人の思想を據べたるものにあらずして賓客の議論を集めたるものなり。不韋もと賈人、權客ありまた多少の爲政的技倆ありと雖も、著書底の人にあらず。たゞ此書の首尾順序あり、結構剪裁一人の手に成る

が如く、論理行文また一人の作たるを失はざるの觀あるより見れば、單に兼賓客の異見を雜載したる雜書にあらず。その黃老、儒墨、刑名、兵農の言を折衷するにも、その實際に抵牾するや否や、常情に背反するや否やを以て取捨を決し。淺近と雖も亦た自ら一定の標準あり。理義一貫して終に前後撞着の病なし。想ふに賓客の中より能文達識の士を撰び、以て之を總べしめ、以て之を筆せしめしものなるべし。何を以て之を呂氏春秋とは名けたる、此書の原序者蓋し作者の自序は曰く

蓋聞古之清世、是法天地。凡十二紀者、所以紀治亂存亡也。所以知壽夭吉凶也。上發之天、下驗之地。中審之人。若此則是非不可無所通矣。

と、蓋し春夏秋冬の十二月に分てその論旨を排列し、以てその十二紀六十篇をなしたるが故に春秋とは名づけたるなり。またその呂覽と稱するは八覽六十篇の十二紀六十篇に次て、最も緊要なるを以てなり。而してその結構、每篇必ず冒頭に抽象的の立論をなし、次て事實を擧げて之を明にし、比喩を引きて之を證し、遂に初論に徴して一篇の總結をなす。而して文章平易明白にして解し易く、またやゝ茅坤の所謂

其文沉鬱孤峻、如江流出、峽遇石而未伸者、有哽咽之氣焉。

といへるが如き迹存じて、秦文の秦文たる特性やゝその面影の認め得べきものありと雖も、諸侯の賓客遊士一字を増損し得ざりきとて誇り得べき程のものにあらず。識見ある學士文客、豈何ぞ千金の爲めに之を増損することをなさんや。

(十三)

秦時文學者中なほ注意すべきものは李斯なり。彼が政治家としての名聲は後世儒流罵詈の聲に埋められしが如しと雖も、平心之を論ずればその手腕決して輕す可らざるものあり。始皇が六國を平げ半ば郡縣の制度を採用し、銳意中央集權の政をなし、以て支那全土をして渾然一國たるの面目を有せしめたるもの、李斯與て頗る力ありき。その書生を坑にし、經籍をやきしが如き隘は即ち隘なりと雖も民心を一にし、權を中央に集めんとする社會の潮流に動されしものとせば、また多少恕すべきところなきにあらず。たゞ道念甚だ固からず、徒らに富貴に眩惑して遂に兎を逐ふことすら能はざるの身となりしはもと自ら招くの禍決して避けられ得べきにあらず。

彼は韓非と共に荀卿に師事せり。然とも彼も韓非の如く思索に長せし頭腦を有せざりき。たゞ當時の風潮に化せられ世の風雲に乗せんとする素志は彼をかりて秦に入らしめ、その國是たる惟法惟術の政策を遂行せしめぬ。彼は寧ろ心の人にあらずして手の人なりき。たゞその學力才識たゞへ浮薄なるにもせよは彼をして秦時一代の文柄を掌らしめぬ。その製作今に存するもの甚た多からず、史記列傳に傳ふるところは皆な奏議の數なり。その文奇峭に於てはや、韓非に劣れりと雖も適麗なるは頗る之にすぐ。或はその逐客を諫めしを評して以爲らく、凡そ文豊褥なるものは痛切をかき直截なるものは枯淡に苦む之れ之を兼ねたりと。これ獨り此書のみならんや李斯の文大抵然るなり。

李斯の文のなほ傳れるものは史記秦本記に見ゆる金石文字なり。始皇の四方を巡遊するや至るところの名山皆な碑を立て、秦徳を頌するの文を刻せり。而してその執筆者は皆な李斯なり。その文の簡古質直なる金石文字の標的とすべし。彼か支那文學に於ける功德はなほ此に止まらず。彼は小篆即ち籀文を増補して小篆即ち秦篆を作りしこと是なり。これ直接に文學に關せずと雖も書記の

便は間接に文學に影響せしや知るべし。自後獄吏程邈繼て隸書を造る字畫益省簡に従ふ。その隸といふは徒隸に施すの義に取る。

李斯か後世儒流に蛇蝎視せらるゝはその原因、主として抗儒焚書にあり。當時の政策より視れば恕すべき點なきにあらずと雖も、その暴戾殘虐古今多くその例を見ず。而して支那文學が爲めに一大挫折をなし、結果は漢代文學に至りて漸く覺れぬ。

歴史文學

(一)

左史言を記し、右史事を記せし支那古代の制度にして已に堯舜以前に創りしもの如し。現に存する尙書は即ち聖主賢臣の言を記せし左史の筆に成る。堯舜三代の事蹟はよりて以てその概を窺ふべく、是をや支那歴史の苞芽といふべき。(固より史料にすぎざるべきも)而して右史の筆になりたる所謂事を記し、書きた存せざるべからず。現に存する竹書紀年のこと或はその遺ならずやと思はるゝ節なきにあらずと雖もや、偽書たるの疑なき能はず、右史の筆のあとに余たゞ春